

パンドラの匣

太宰治

作者の言葉

この小説は、「健康道場」と称する或る療養所^あで病いと闘っている二十歳の男の子から、その親友に宛てた^あ手紙の形式になっている。手紙の形式の小説は、これまでの新聞小説には前例が少かつたのではなからうかと思われる。だから、読者も、はじめの四、五回は少し勝手が違つてまごつくかも知れないが、しかし、手紙の形式はまた、現実感が濃いので、昔から外国に於いても、日本に於いても多くの作者に依つて試みられて来たものである。

「パンドラの匣はこ」という題に就つては、明日のこの小説の第一回に於て書き記してある筈はずだし、此処ここで申上げ
て置きたい事は、もう何も無い。

はなは甚だぶあいそな前口上でいけませんが、しかし、こん
なぶあいそな挨拶あいさつをする男の書く小説が案外面おもしろ白い事
がある。

（昭和二十年秋、河北新報に連載の際に読者になせる
作者の言葉による。）

幕ひらく

1

君、思い違いしちやいけない。僕は、ちつとも、しよ
げてはいないのだ。君からあんな、なぐさめの手紙を
もらつて、僕はまごついて、それから何だか恥ずかし
くて赤面しました。妙に落ちつかない気持でした。こ
んな事を言うと、君は怒るかも知れないけれど、僕は
君の手紙を読んで、「古いな」と思いました。君、もう

すでに新しい幕がひらかれてしまっているのです。しかも、われらの先祖のいちども経験しなかつた全然あたらしい幕が。

古い気取りはよそうじやないか。それはもうたいてい、ウソなのだから。僕は、いま、自分のこの胸の病気に就いても、ちつとも気にしてはいない。病気の事なんか、忘れてしまった。病気の事だけじやない。何でもみんな忘れてしまった。僕がこの健康道場にはいったのは、戦争がすんで急に命が惜しくなつて、これから丈夫なからだになり、何とかして一つ立身出世、なんて事のためでは勿論もちろんないし、また、早く病気をな

おしてお父さんに安心させたい、お母さんを喜ばせた
いなどという涙ぐましいような殊勝な孝心からでも無
かったのだ。しかし、また、へんなやけくそを起して
こんな辺鄙へんびな場所へ来てしまったというわけでも無い
んだ。ひとの行為にいちいち説明をつけるのが既に古
い「思想」のあやまりではなからうか。無理な説明は、
しばしばウソのこじつけに終っている事が多い。理論
の遊戯はもうたくさんだ。概念のすべてが言い尽され
て来たじゃないか。僕がこの健康道場にはいつたのに
は、だから何も理由なんか無いと言いたい。或る日、
或る時、聖霊が胸に忍び込み、涙が頬ほおを洗い流れて、

そうしてひとりですいぶん泣いて、そのうちに、すつとからだが軽くなり、頭脳が涼しく透明になった感じで、その時から僕は、ちがう男になったのだ。それまで隠していたのだが、僕はすぐに、

「喀血かっけつした。」

とお母さんに言つて、お父さんは、僕のためにこの山腹の健康道場を選んでくれた。本当にもう、それだけの事だ。或る日、或る時とは、どんな事か。それは君にもおわかりだろう。あの日だよ。あの日の正午だよ。ほとんど奇蹟きせきの、天来みこえの御声に泣いておわびを申し上げたあの時だよ。

あの日以来、僕は何だか、新造の大きい船にでも乗せられているような気持だ。この船はいつたいどこへ行くのか。それは僕にもわからない。未だ、まるで夢見心地だ。船は、するする岸を離れる。この航路は、世界の誰も経験だれした事のない全く新しい処女航路らしい、という事だけは、おぼろげながら予感できるが、しかし、いまのところ、ただ新しい大きな船の出迎えを受けて、天の潮路のまにまに素直に進んでいるという具合なのだ。

しかし、君、誤解してはいけない。僕は決して、絶望の末の虚無みたいなものになっていくわけではない。

船の出帆は、それはどんな性質な出帆であつても、必ず何かしらの幽かすかな期待を感じさせるものだ。それは大昔から變りのない人間性の一つだ。君はギリシヤ神話のパンドラの匣はこという物語をご存じだろう。あけてはならぬ匣をあけたばかりに、病苦、悲哀、嫉妬しつと、貪慾どんよく、猜疑さいぎ、陰險いんけん、飢餓、憎悪ぞうおなど、あらゆる不吉の虫が這い出し、空を覆おほつてぶんぶん飛び廻まわり、それ以来、人間は永遠に不幸ふこうに悶もたえなければならなくなつたが、しかし、その匣の隅すみに、けし粒ほどの小さい光る石が残つていて、その石に幽かに「希望」という字が書かれていたという話。

それはもう大昔からきまっているのだ。人間には絶望という事はある得ない。人間は、しばしば希望にあざむかれるが、しかし、また「絶望」という観念にも同様にあざむかれる事がある。正直に言う事にしよう。人間は不幸のどん底いぢちにつき落され、ころげ廻りながらも、いつかしら一縷いちろうの希望の糸を手さぐりで捜し当てているものだ。それはもうパンドラの匣以来、オリムポスの神々に依よつても規定せられている事実だ。楽観

論やら悲観論やら、肩をそびやかして何やら演説して、ことさらに氣勢を示している人たちを岸に残して、僕たちの新時代の船は、一足おさきにするすると進んで行く。何の渋滞も無いのだ。それはまるで植物の蔓つるが延びるみたいに、意識を超越した天然の向日性に似ている。

本当にもうこれからは、やたらに人を非国民あつかいにして責めつけるような気取ったものの言い方などはやめにしましょう。この不幸な世の中を、ただいっそう陰鬱いんうつにするだけの事だ。他人を責めるひとほど陰で悪い事をしているものではないのか。こんどまた戦

争に負けたからと言って、大いそぎで一時のがれのごまかしを捏造^{ねつぞう}して、ちよつとうまい事をしようたくらんでいる政治家など無ければ幸いだが、そんな浅墓^{あさはか}な言いつくろいが日本をだめにして来たのだから、これからは本当に、気をつけてもらいたい。二度とあんな事を繰り返したら世界中の鼻つまみになるかも知れぬ。ホラなんか吹かずに、もつとさつぱりと単純な人になりましょう。新造の船は、もう既に海洋にすべり出ているのだ。

そりや僕だって、いままでずいぶんつらい思いをして来たのです。君もご存じのとおり、僕は昨年の春、

中学校を卒業と同時に高熱を発して肺炎を起し、三箇月も寝込んでそのために高等学校への受験も出来ず、どうやら起きて歩けるようになってからも、微熱が続いて、医者から肋膜ろくまくの疑いがあると云われて、家でぶらぶら遊んで暮しているうちに、ことしの受験期も過ぎてしまって、僕はその頃ころから、上級の学校へ行く気も無くなり、そんならどうするのか、となると眼の先がまっくらで、家でただ遊んでいるのもお父さんに申しわけがなく、またお母さんに対しても、ていさいの悪いこと並たいいではなく、君には浪人の経験が無いからわからないかも知れないが、あれは全くつらい

地獄だ。僕はあの頃、ただもうやたらに畑の草むしりばかりやっていた。そんな、お百姓の真似まねをする事で、わずかにお体裁を取りつくろっていた次第なのだ。ご承知のように、僕の家の裏には百坪ほどの畑がある。これは、ずっと前から、どうしたわけか僕の名前で登記されているらしいのだ。そのせいばかりでもないけれども、僕はこの畑の中に一歩足を踏みいれると、周囲の圧迫からちよつとのがれたような気楽さを覚えるのだ。この一、二年、僕はこの畑の主任みたいなものになつてしまつていた。草をむしり、また、からだにさわらぬ程度で、土を打ちかえし、トマトに添木を作つ

てやったり、まあ、こんな事でも少しは食料増産のお手伝いにはなるだろうと、その日その日をごまかして生きていたのだけれども、けれども、君、どうしてもごまかし切れぬ一塊の黒雲のような不安が胸の奥底にこびりついていて離れないのだ。こんな事をして暮して、いったい僕はこれから、どんな身の上になるのだろう。なんの事はない、てもなく癡人はいじんじやないか。そう思うと、ぼうぜん杲然とする。どうしてよいか、まるで見当も何もつかなくなるのだ。そうして、こんなだらし無い自分の生きているという事が、ただ人に迷惑をかけるばかりで、全然無意味だと思うと、なんとも、つら

くてかなわなかったのだ。君のような秀才にはわかるまいが、「自分の生きている事が、人に迷惑をかける。僕は余計者だ。」という意識ほどつらい思いは世の中に無い。

3

けれども君、僕がこんな甘ったれた古くさい薄のろの悩みを続けているうちにも、世界の風車はクルクルと眼にとまらぬ早さでまわっていたのだ。歐洲おうしゅうに於いてはナチスの全滅、東洋に於いては比島決戦につい

おきなわ

で沖縄決戦、米機の日本内地爆撃、僕には兵隊の作戦の事などほとんど何もわからぬが、しかし、僕には若い敏感なアンテナがある。このアンテナは信頼できる。一国の憂鬱ゆううつ、危機、すぐにこのアンテナは、ぴりりと感ずる。理窟りくつは無いんだ。勘だけなんだ。ことしの初夏の頃から、僕のこの若いアンテナは、嘗かつてなかつたほどの大きな海嘯かいしやうの音を感知し、震えた。けれども僕には何の策も無い。ただ、あわてるばかりだ。僕は滅茶苦茶めっちゃくちゃに畑の仕事に精出した。暑い日射ひざしの下で、うんうん唸うなりながら重い鋤くわを振り廻して畑の土を掘りかえし、そうして甘藷かんしょの蔓を植えつけるのである。な

んだって毎日、あんなに烈はげしく畑の仕事を続けたのか、僕には今もってよくわからない。自分のやくざなからだが、うらめしくて、思い切りこっぴどく痛めつけてやろうという、少しやけくそに似た気持もあったように、死ぬ！　死んでしまえ！　死ぬ！　死んでしまえ！　と鍬を打ちおろす度毎たびごとに低く呻うめくように言い続けていた日もあった。僕は甘藷の蔓を六百本植えた。

「畑の仕事も、もういい加減によすんだね。お前のからだには少し無理だよ。」と夕食の時にお父さんに言われて、それから三日目の深夜、夢うつつの裡うちに、こんこんと咳せき込んで、そのうちに、ごろごろと、何か、

胸の中で鳴るものがある。ああ、いけない、とすぐに
気き附づいて、はつきり眼が覚めた。咯血の前に、胸がご
ろごろ鳴るといふ事を僕は、或る本で読んで知ってい
たのだ。腹這いになつた途端に、ぐつと来た。口の中
に一ぱい、生臭い匂においのものを含みながら、僕は便所
へ小走りに走つた。やはり血だつた。便所にながいこ
と立っていたが、それ以上は血が出なかつた。僕は忍
び足で台所へ行き、塩水でうがいをして、それから顔
も手も洗つて寢床へ歸つた。咳せきの出ないように息をつ
めるようにして静かに寝ていて、僕は不思議なくらい
平氣だつた。こんな夜を、僕はずっと前から待ってい

たのだというような気さえした。本望、という言葉さえ
え思い浮んだ。明日もまた、黙つて畑の仕事を続けよ
う。仕方がないのである。他ほかに生きがいの無い人間な
のである。ぶんを知らなければいけない。ああ、本当
に僕なんか一日も早く死んでしまつたほうがいいのだ。
いまのうちに、うんと自分のからだをこき使つて、そ
うしてわずかでも食料の増産に役立ち、あとはもうこ
の世からおさらばして、お国の負担を軽くしてあげた
ほうがよい。それが僕のような、やくざな病人のせめ
てもの御奉公の道だ。ああ、早く死にたい。

そうして翌あぐる朝は、いつもより一時間以上も早く起

きて、さっさと蒲団ふとんを畳んで、ごはんも食べずに畑に出てしまった。そうして滅茶苦茶に畑仕事をした。今から思うと、まるで地獄の夢のようだ。僕は勿論、この病気の事は死ぬまで誰にも告白せずにいるつもりだった。誰にも知らせずに、こつそりぐんぐん病気を悪化させてしまうつもりであった。こんな気持ちをこそ、墮落思想というのだらうね。僕はその夜、お勝手に忍び込んで、配給の焼酎しょうちゆうをお茶碗ちやわんで一ぱい飲みほしちゃったよ。そうして、深夜、僕はまた咯血をした。ふと眼覚めて、二つ三つ軽く咳をしたら、ぐつと来た。こんどは便所まで走って行くひまも無かった。硝子戸ガラスド

をあけて、はだしで庭へ飛び降りて吐いた。ぐいぐいと喉のどからいくらでも込み上げて来て、眼からも耳からも血が噴き出ているような感じがした。コップに二杯くらいも吐いたろうか、血がとまった。僕は血で汚れた土を棒切れで掘り返して、わからないようにした、とたんに空襲警報である。思えば、あれが日本の、いや世界の最後の夜間空襲だったのだ。朦朧もうろうとした気持ちで、防空壕ぼうくうごうから這い出たら、あの八月十五日の朝が白々と明けていた。

でも僕は、その日もやっぱり畑に出たのだ。それを聞いては、流石さすがに君も苦笑するだろう。しかし君、僕にとつては笑い事じゃ無かった。本当にもうそれより以外に僕の執るべき態度は無いような気がしていたのだ。どうにも他に仕様が無かった。さんざ思い迷った揚句あげくの果に、お百姓として死んで行こうと覚悟をきめた筈ではないか。自分の手で耕した畑に、お百姓の姿で倒れて死ぬのは本望だ。えい、何でもかまわぬ早く死にたい。目まいと、悪寒おかんと、ねっとりした冷たい汗とで苦しいのを通り越してもう気が遠くなりそうで、豆

畑の茂みの中に仰向に寝ころんだ時、お母さんが呼びに来た。早く手と足を洗ってお父さんの居間にいらっしやいという。いつも微笑ほほえみながらものを言うお母さんは、別人のように厳肅な顔つきをしていた。

お父さんの居間のラジオの前に坐すわらされて、そうして、正午、僕は天来の御声に泣いて、涙が頬を洗い流れ、不思議な光がからだに射し込み、まるで違う世界に足を踏み入れたような、或あるいは何だかゆらゆら大きい船にでも乗せられたような感じで、ふと気がついてみるともう、昔の僕ではなかった。

まさか僕は、死生しせい一如いちにちの悟りをひらいたなどと自惚うぬぼれ

れてはいないが、しかし、死ぬも生きるも同じ様なものじゃないか。どっちにしたって同じ様につらいんだ。無理に死をいそぐ人には気取屋が多い。僕のこれまでの苦しさも、自分のおていさいを飾ろうとする苦勞にすぎなかつた。古い気取りはよそうじゃないか。君の手紙の中に「悲痛な決意」などという言葉があつたけれども、悲痛なんてのは今の僕には、何だか安芝居の色男役者の表情みたいに思われる。悲痛どころではあるまい。それはもう既に、ウソの表情だ。船は、するする岸壁から離れたのだ。そして船の出帆には、必ず何かしらの幽かな希望がある筈だ。僕はもう、しよげ

てはいない。胸の病氣も気にしていない。君からあんな、同情の言葉に満ちた手紙をもらって、僕は実際まごついた。僕はいまは何も思わず、ただこの船に身をゆだねて行くつもりだ。僕はあの日、すぐにお母さんに打明けた。自分でも不思議なくらい平静な態度で打明けた。

「僕、ゆうべ咯血しました。その前の晩も、咯血しました。」

何の理由も無かった。急に命が惜しくなったというわけでも無い。ただ、きのう迄までの無理な気取りが消えただけだ。

お父さんは僕のためにこの「健康道場」を選んでくれた。ご承知のように、僕のお父さんは数学の教授だ。数字の計算は上手かも知れないが、お金のお勘定なんてのは一度もした事がないらしい。いつも貧乏なのだから、僕もぜいたくな療養生活など望んではいけない。この簡素な「健康道場」は、その点だけでも、まったく僕に似合っている。僕には、なんの不平も無い。僕は、六箇月で全快するそうだ。あれから一度も咯血しない。血痰けつたんさえ出ない。病気の事なんか忘れてしまった。この「病気を忘れる」という事が、全快の早道だと、こここの場長さんが言っていた。少し変わったところ

のある人だ。何せ、結核療養の病院に、健康道場などという名前をつけて、戦争中の食料不足や薬品不足に対処して、特殊な闘病法を発明し、たくさんの入院患者を激励して来た人なのだから。とにかく変った病院だよ。とても面白い事ばかり、山ほどあるんだけど、まあこの次にゆっくりお話ししよう。

僕の事に就いては、本当に何もご心配なさらぬように。では、そちらもお大事に。

昭和二十年八月二十五日

健康道場

きようはお約束どおり、僕のいまいるこの健康道場の様子をお知らせしましょう。E市からバスに乗って約一時間、小梅橋というところで降りて、そこから他のバスに乗りかえるのだが、でも、その小梅橋からはもう道場までいくらも無いんだ。乗りかえのバスを待っているより、歩いたほうが早い。ほんの十丁くらいのもなのだ。道場へ来る人は、たいていそこから

もう歩いてしまう。つまり、小梅橋から、山々を右手に見ながらアスファルトの県道を南へ約十丁ほど行くと、山裾やますそに石の小さい門があつて、そこから松並木が山腹までつづき、その松並木の尽きるあたりに、二棟むねの建物の屋根が見える。それがいま、僕の世話になつている「健康道場」と称するまことに風変りな結核療養所なのだ。新館と旧館と二棟にわかれている。旧館のほうはそれほどでもないが、新館はとても瀟洒しょうしゃな明るい建物だ。旧館で相当の鍛錬を積んだ人が、この新館のほうにつきつきと移されて来る事になっているのだ。けれども僕は、元気がよいので特別に、はじめ

から新館にいれられた。僕の部屋は、道場の表玄関から入ってすぐ右手の「桜の間」だ。「新緑の間」だの「白鳥の間」だの「向日葵の間」だの、へんに恥ずかしいくらい綺麗な名前きれいながそれぞれの病室に附せられてあるのだ。

「桜の間」は、十畳間くらいの、そうしてやや長方形の洋室である。木製の頑丈がんじょうなベッドが南枕みなみまくらで四つ並んでいて、僕のベッドは部屋の一ばん奥にあつて、枕元の大きい硝子窓ガラスまどの下には、十坪くらいの「乙女ヶ池」とかいふ（この名は、あまり感心しないが）いつも涼しく澄んでいる池があつて、鮒ふなや金魚が泳いでい

るのもはつきり見えて、まあ、僕のベッドの位置に就いては不服は無い。一番いい位置かも知れない。ベッドは木製でひどく大きく、ちやちなスプリングなど附いていないのが、かえつてたのもしく、両側には引出しやら柵たなやらがたくさん附いていて、身のまわりのもの一切をそれにしまい込んでも、まだ余分の引出しが残っているくらいだ。

同室の先輩たちを紹介しよう。僕のとよりは、おおつきまつえもん大月松右衛門殿だ。その名の如く人品じぶとこつがら卑いやしからぬ中年のおっさんだ。東京の新聞記者だとかいう話だ。早く細君に死なれて、いまは年頃の娘さんと二人

だけの家庭の様子で、その娘さんも一緒に東京からこの健康道場ちかくの山家やまがに疎開そかいして来ていて、時々この淋さびしき父を見舞まひいに来る。父はたいていむつつりしている。しかし、ふだんは寡言家かげんかでも、突如として恐るべき果斷家くだんかに変わる事もある。人格は、だいたい高潔けつせつらしい。仙骨せんこつを帯びているようなところもあるが、どうもまだ、はつきりはわからない。まっくろい口髭くちひげは立派だが、ひどい近眼らしく、眼鏡の奥の小さい赤い眼は、しよぼしよぼしている。丸い鼻の頭には、絶えず汗の粒が湧わいて出るらしく、しきりにタオルで鼻の頭を強くこすって、その為ために鼻の頭は、いまにも血

のしたたり落ちるくらいに赤い。けれども、眼をつぶって何かを考えている時には、威厳がある。案外、偉いひとなのかも知れない。綽名あだなは越後獅子えちごじし。その由来は、僕にはわからないが、ぴったりしているような感じもする。松右衛門殿も、この綽名をそんなにやがってもないようだ。ご自分からこの綽名を申出たのだという説もあるが、はつきりは、わからない。

2

そのお隣りは、木下清七殿。左官屋さんだ。未だ独

身の、二十八歳。健康道場第一等の美男におわします。色あくまでも白く、鼻がつんと高くて、眼許めもとすずしく、いかにもいい男だ。けれども少し爪先つまさきき立ってお尻しりを軽く振って歩く、あの歩き方だけは、やめたほうがよい。どうしてあんな歩き方をするのだろう。音楽的だとも思っているのかしら。不可解だ。いろんな流行歌も知っているらしいが、それよりも都々逸とどいつというものが一ばんお得意のようである。僕は既に、五つ六つ聞かされた。松右衛門殿は眼をつぶって黙って聞いているが、僕は落ちつかない気持である。富士の山ほどお金をためて毎日五十銭ずつ使うつもりだとか、

馬鹿々々しい、なんの意味もないような唄ばかりなので、全く閉口のほかは無い。なおその上、文句入りの都々逸というのがあって、これがまた、ひどいんだ。唄の中に、芝居の台詞せりふのようなものはいるのだ。あら、兄さん、とか何とか、どうにも聞いて居られないのだ。けれども一度に続けて二つ以上は歌わない。いくつでも続けて歌いたいらしいのだが、それ以上は松右衛門殿がゆるさない。二つ歌い終ると、越後獅子は眼をひらいて、もうよかろう、と言う。からだにさわると、言い添える事もある。歌い手のからだにさわるといいう意味か、聞き手のからだにさわるといいう意味か、

はつきりしない。でも、この清七殿だつて決して悪い人じゃないんだ。俳句が好きなんだそうで、夜、寝る前に松右衛門殿にさまさまの近作を披露ひろうして、その感想を求めたけれども、越後は、うんともすんとも答えぬので、清七殿ひどくしよげかえつて、さつさと寝てしまったが、あの時は可哀想かわいそうだった。清七殿は越後獅子をかかなり尊敬しているらしい。この粋いきな男の名は、かっぱれ。

そのお隣りに陣取っている人は、西脇にしわき一夫殿。郵便局長だか何だかしていた人だそうだ。三十五歳。僕はこの人が一ばん好きだ。おとなしそうな小柄こがらの細君がが

時々、見舞いに来る。そうして二人で、ひそひそ何か話をしている。しんみりした風景だ。かつぽれも、越後も、遠慮してそれを見ないように努めているようである。それもまたいい心掛けだと思う。西脇殿の綽名は、つくし。ひよろ長いからであろうか。美男子ではないけれども、上品だ。学生のような感じがどこかにある。はにかむような微笑は魅力的だ。この人が、僕のお隣りだったら、よかったのにと僕はときどき思う。けれども、深夜、奇妙な声を出して唸うなる事があるので、やっぱりお隣りでなくてよかつたとも思う。これでだいたい僕の同室の先輩たちの紹介もすんだ事になるの

だが、つづいて当道場の特殊な療養生活に就いて少し御報告申しませう。まず、毎日の日課の時間割を書いてみると、

六時

起床

七時

朝食

八時ヨリ八時半マデ

屈伸鍛錬

八時半ヨリ九時半マデ

摩擦

九時半ヨリ十時マデ

屈伸鍛錬

十時

場長巡回（日曜）

ハ指導員ノミノ巡回）

十時半ヨリ十一時半マデ

摩擦

十二時

昼食

一時ヨリ二時マデ

講話（日曜八慰

安放送）

二時ヨリ二時半マデ

屈伸鍛鍊

二時半ヨリ三時半マデ

摩擦

三時半ヨリ四時マデ

屈伸鍛鍊

四時ヨリ四時半マデ

自然

四時半ヨリ五時半マデ

摩擦

六時

夕食

七時ヨリ七時半マデ

屈伸鍛鍊

七時半ヨリ八時半マデ

摩擦

八時半

報告

九時

就寝

3

こないだも、ちよつと申上げて置いたように、戦争中に焼かれた病院も多いだろうし、また罹災りさいしないまでも、物資不足やら手不足やらで閉鎖した病院も少くなかったようで、長期の入院を必要とするたくさんの結核患者、特に僕たちのようにあまり裕福でない患者たちは、行きどころを失ったような有様になったので、

この辺には、さいわい敵機の襲撃もほとんど無いし、地方有力の篤志家が二、三打ち寄り、当局の賛助をも得て、もとからこの山腹にあつた県の療養所を増築し、いまの田島博士を招聘しょうへいして、ここに、物資にたよらぬ独自の結核療養所が出来たというわけなのだ。まず、ざつとこの日課の時間割をざらんになつただけでも、普通の療養所の生活と随分ちがうのがおわかりだろうと思う。病院、あるいは患者などという観念を捨てさせるように仕組まれている。

院長の事を場長と呼び、副院長以下のお医者是指導員、そうして看護婦さんたちは助手、僕たち入院患者

は塾生じゆくせいと呼ばれる事になっている。すべてここの田島場長の創案らしい。田島先生がこの療養所へ招聘されて来てからは、内部の機構が一新せられ、患者に対しても独得の療法を施し、非常な好成績で、医学界の注目の的となっているのだそうだ。頭がすっかり禿はげているので、五十歳くらいにも見えるが、あれでまだ三十歳代の独身者だとかいう事だ。瘦やせて長身の、ちよつと前こごみの、そうして、なかなか笑わない人だ。頭の禿はげている人は、たいてい端正な顔をしているものだが、田島先生も、卵に目鼻というような典雅な容貌ようぼうの持主である。そうして、これも頭の禿はげた人

に特有の、れいの猫ねこみたいな陰性の気むずかしさを持って
持っている人のものである。ちよつと、こわい。毎日、
午前十時にこの場長は、指導員、助手を引き連れて場
内を巡回するのだが、その時には、道場全体が、しん
となる。塾生たちも、この場長の前では、おそろしく
神妙しんまうにしている。けれども、陰ではこっそり綽名で呼
んでいる。清盛きよもりというのだ。

さて、それでは当道場の日課について、もう少しわ
しく説明しましょうか。屈伸鍛錬くつしんたんれんというのは、一口に
言えば、手足と、腹筋の運動だ。こまかく書くと君は
退屈するだろうから、ごく大ざっぱに要点だけ言うと、

まあ、ベッドの上に仰向に大の字に寝たまま、手の指、手首、腕と順次に運動をはじめて、次に腹をへこましたり、ふくらましたり、ここはなかなかむずかしく練習を要するところで、また屈伸鍛錬の一ばん大事なところでもあるらしく、その次には足の運動、脚の筋肉をいろいろに伸ばしたり、ゆるめたりして、そうして大体、一とおり鍛錬を終る。そうして、一度終れば、また手の運動から繰り返し、三十分間、時間のある限りつづけていなければならぬ。これを前に記した時間割のとおり午前二回、午後三回、毎日やるんだから、楽じゃない。これまでの医学の常識から言えば、結核

患者がこんな運動をするのは、とんでもない危険な事とされていたらしいが、これもまた、戦時の物資不足から生まれた新療法の一つであろう。当道場では、たしかに、この運動を熱心にやる人ほど、かいふく恢復が早いそうだ。

次に摩擦の事を少し書こう。これも当道場独得のものらしい。そうしてこれは、ここの陽気な助手さんたちの役目なのだ。

摩擦に用いるブラシは、散髪の時に用いる硬い毛の
ブラシの、あの毛を、ほんの少しやわらかくしたよう
なものである。だから、はじめのうちは、これでこす
られると相当に痛く、皮膚のところどころに摩擦負け
のブツブツの生ずるような事さえある。けれども、た
いていは一週間ほどで慣れてしまう。

摩擦の時間が来ると、れいの陽気な助手さんたちが、
おのおの手わけして、順々に全部の塾生たちに摩擦し
てまわるのである。小さいかなだつ金盥いに、タオルを畳んで
いれて、それを水にひたして、ブラシをそのタオルに
押しつけては水をつけ、それでもって、シャツシャツ

と摩擦するのである。摩擦は原則として、ほとんど全身にほどこす。入場後の一週間ほどは手足だけであるが、それからのちは、全身になる。横向きに寝て、ま
ず手、それから足、胸、腹と摩擦して、次に寝がえり
を打って反対側の手、足、胸、腹、背中、背中、腰と
移って行くのである。慣れると、なかなか気持のよい
ものである。殊ことに、背中をこすつてもらう時の気持は、
何とも言えない。うまい助手さんもあるが、へたくそ
の助手さんもある。

けれども、この助手さんたちの事に就いては、後で
また書く事にしよう。

道場の生活は、この屈伸鍛錬と摩擦の二つで明け暮れしていると思つてよい。戦争がすんでも、物資の不足は変わらないのだから、まあ当分はこんな事で鬪病の心意気を示すのも悪くないじゃないか。この他ほかには午後一時からの講話、四時の自然、八時半からの報告などがあるけれども、講話というのは、場長、指導員、または道場へ視察にやつて来る各方面の名士など、かわるがわるマイクを通じて話かけて、それが部屋の外の廊下の要所々に設備されてある拡声機から僕たちの部屋へ流れてはいい、僕たちはベッドの上すわに坐つて黙つて聞いているのだ。

これは、戦争中に拡声機が電力の不足でだめになつたので、一時休止していたのだそうだが、戦争がすんで電力の使用が少し緩和されると同時に、またすぐはじめられたのだ。場長は、このごろ、日本の科学の発展史、とでもいうようなテーマの講義を続けている。

頭のいい講義とでもいうのであろうか、淡々たる口調で、僕たちの祖先の苦労を実に平明に解説してくれる。きのうは、杉田玄白すぎたげんぱくの「蘭学事始らんがくことはじめ」に就いてお話しして下さった。玄白たちが、はじめて洋書をひらいて見たが、どのようなにしてどうほんやく翻訳してよいのか、「まことにろだ艱難なき船の大海に乗出せしが如く、茫洋ぼうようとして寄る

べなく、只ただあきれにあきれて居たる迄までなり」というところなど実によかった。玄白たちの苦心に就いては、僕も中学校の時にあの歴史の木山ガンモ先生から教えられたが、しかし、あれとは丸つきり違う感じを受けた。

ガンモは、玄白はひどいアバタで見られた顔ではなかった、などつまらぬ事ばかり言っていたつけね。とにかく、この場長の毎日の講話は、僕にはとても楽しみだ。日曜には、講話のかわりにレコオドを放送する。僕はあんまり音楽は好きでないけれども、でも一週間に一度くらい聞くのは、わるくないものだ。レコオド

のあいまに、助手さんの肉声の歌が放送される事もあるが、これは聞いていて楽しい、というよりは、ハラハラして落ち附かない気持ちになるものだ。でも、他の塾生たちには、これが一ばん歓迎されているようだ。清七殿など、眼を細くして聞いている。思うに、かれ自身も都々逸の文句入りというところなど、放送したくてたまらないのだろう。

午後四時の自然というのは、まあ、安静の時間だ。

この時刻には、僕たちの体温が一ばん上昇していて、からだだが、だるくて、気分がいらいらして、けわしくなり、どうにも苦しいので、まあ諸君の気のむくように勝手な事をして過してい給え、たまという意味で自由の三十分間を与えられているような具合のものらしいが、でも、塾生の大部分は、この時間には、ただ静かにベッドに横臥わうがしている。ついでながら、この道場では、夜の睡眠の時以外は、ベッドに掛蒲団かけぶとんを用いる事を絶対に許さない。昼は、毛布も何も一切掛けずに、ただ寝巻を着たままでベッドの上にごろ寝をしているのだが、慣れると清潔な感じがして来て、かえって気

持がいい。午後八時半の報告というのは、その日その日の世界情勢に就いての報道だ。やっぱり廊下の拡声機から、当直の事務員のおそろしく緊張した口調のニュースが、いろいろと報告せられるのだ。この道場では、本を読む事はもちろん、新聞を読む事さえ禁ぜられてゐる。耽読たんどくは、からだに悪い事かも知れない。まあ、ここにいる間だけでも、うるさい思念の洪水こうずいからのがれて、ただ新しい船出という一事をのみ確信して素朴そぼくに生きて遊んでゐるのも、わるくないと思つてゐる。

ただ、君への手紙を書く時間が少くて、これには弱つ

ている。たいてい食事後に、いそいで便箋びんせんを出して書いていたが、書きたい事はたくさんあるのだし、この手紙も二日ばかりで書いたのだ。でも、だんだん道場の生活に慣れるに随したがって、短い時間を利用する事も上手になつて来るだろう。僕はもう何事につけても、ひどく楽こじ天居士てんこじになつていようでもある。心配の種類なんか、一つも無い。みんな忘れてしまった。ついでに、もうひとつ御紹介すると、僕のこの当道場に於おける綽名は、「ひばり」というのだ。実に、つまらない名前だ。小柴利助こしばりすけという僕の姓名が、小雲雀こひばりという具合にも聞えるので、そんな綽名をもらう事になつたも

のらしい。あまり名誉な事ではない。はじめは、どうにもいやらしく、てれくさくて、かなわなかったが、でもこのごろの僕は、何事に対しても寛大になつていたので、ひばりと人に呼ばれても気軽に返事を与える事になっているのだ。わかつたかい？ 僕はもう昔の小柴じゃないんだよ。いまはもう、この健康道場に於ける一羽の雲雀なんだ。パイチクパイチクやかましく囀さえずって騒いでいるのさ。だから、君もどうかそのつもりで、これからの僕の手紙を読んでおくれ。何という軽薄な奴やつだ、なんて顔をしかめたりなんかしないでおくれ。

「ひばり。」と今も窓の外から、ここの助手さんのひとりが僕を鋭く呼ぶ。

「なんだい。」と僕は平然と答える。

「やつとるか。」

「やつとるぞ。」

「がんばれよ。」

「よし来た。」

この問答は何だかわかるか。これはこの道場の、挨拶あいさつである。助手さんと塾生が、廊下ですれちがった時など、必ずこの挨拶を交す事にきまつているようだ。いつ頃ごろからはじまった事か、それはわからぬけれども、

まさかこの場長がとりきめたものではなからう。助手さんたちの案出したものに違いない。ひどく快活で、そうしてちよつと男の子みたいな手剛てしわさが、ここの看護婦さんたちに通有の気風らしい。場長や指導員、塾生、事務員、全部のひとに片端から辛辣しんらつな綽名を呈上するのも、すなわち、この助手さんたちのようである。油断のならぬところがあるのだ。この助手さんたちに就いては、更によく観察し、次便でまたくわしく報告する事にしよう。

まずは当道場の概説くだんの如しというところだ。
失敬。

九月三日

鈴虫

1

拜啓 つかまつ 仕 そうろう り 候。 九月になると、やっぱり違うね。
風が、湖面を渡って来たみたい、ひやりとする。虫
の音も、めつきり、かん高くなって来たじゃないか。
僕 ぼく は君のように詩人ではないのだから、秋になったか

らとて、別段、断腸の思いも無いが、きのうの夕方、ひとりの若い助手さんが、窓の下の池のほとりに立って、僕のほうを見て笑って、

「つくしにね、鈴虫が鳴いてるって言ってやって。」

そんな言葉を聞くと、この人たちには秋がきびしく沁しみみているのだという事がわかって、ちよつと息がつかまった。この助手さんは、僕と同室の西脇にしわきつくし殿に、前から好意を寄せているらしいのだ。

「つくしは、いないよ。ついさつき、事務所へ行つた。」と答えてやったら、急に不機嫌ふきげんになり、言葉まで頗すこぶるぞんざいに、

「あらそう。いなくたつていいじゃないの。ひばりは鈴虫がきらいなの？」と妙な逆襲の仕方をして来たので、僕はわけがわからず、実にまごついた。

この若い助手さんには、どうも不可解なところが多く、僕は前から、このひとに最も気をつけて来ているのだ。綽名あだなはマア坊。

ついでに、きようは他の助手さんたちの綽名ほかも紹介しましょう。こないだの手紙に、ここの助手さんたちは、油断しんちつのならぬところがあつて、男のひとたちに片端から辛辣しんちつの綽名を呈上していると云つたが、しかし、また塾生のほうだつて負けずに、助手さんたち全部を

綽名で呼んでいるのだから、まあ、アイコみたいなものだ。けれども、塾生たちの案出した綽名は、そこは何といつても、やっぱり女性に対するいたわりもあるらしく、いくぶんお手やわらかに出来ている。三浦正子だから、マア坊。なんという事もない。竹中静子だから、竹さん、なんてのはもつとも気がきかない。平凡きわまる。また、眼鏡をかけている助手さんは、出目金^{でめきん}でもいうようなところなのに、遠慮して、キントト。痩^やせているから、うるめ。淋^{さび}しそうな顔をしているから、ハイチャイ。このへんは、まあ、いいほうかも知れないが、どうも少し遠慮している。ひどく、

ぶ器量なくせに、パーマネントも物凄く、ものすご眼蓋を赤く

塗ったりして、奇怪な厚化粧をしているから、孔雀。くじやく

ばかにして、孔雀とつけたのだろうが、つけられた当

人はかえって大いに得意で、そうよ、あたしは孔雀よ、

といよいよ自信を強くしたかも知れない。ちつとも

諷刺ふうしがきいていない。僕ならば、天女とつける。そう

よ、あたしは天女よ、とはまさか思えまい。その他、

となかい、こおろぎ、たんてい、たまねぎなど、いろ

いろあるが、みんな陳腐だ。ただひとり、カクランと

いうのがあって、これはちよつと、うまくつけたもの

だと思う。顔のはばが広くほつぺたが真つ赤に光って

いる助手さんがあつて、いかにも赤鬼のお面を聯想れんそうさせるのだが、さすがに、そこは遠慮して避けて、鬼の霍乱かくらんというわけで、カクランだ。着想が上品である。

「カクラン。」

「なんだい。」すまして答える。

「がんばれよ。」

「ようし来た。」と元気なものだ。霍乱に頑張がんばられては、かなわない。このひとに限らず、ここの助手さんたちは、少し荒っぽいところがあるけれども、本当は気持ちのやさしい、いいひとばかりのようだ。

塾生たちに一ばん人気のあるのは、竹中静子の、竹さんだ。ちつとも美人ではない。丈が五尺二寸くらいで、胸部のゆたかな、そうして色の浅黒い堂々たる女だ。二十五だとか、六だとか、とにかく相当としとつてゐるらしい。けれども、このひとの笑い顔には特徴がある。これが人気の第一の原因かも知れない。かなり大きな眼が、笑うとかえつて眼尻めじりが吊り上つて、そうして針のように細くなつて、齒がまつしろで、とても涼しく感ぜられる。からだが大いから、看護婦の

制服の、あの白衣がよく似合う。それから、たいへん働き者だという事も、人気の原因の一つになっているかも知れない。とにかく、よく気がきいて、きりきりしやんと素早く仕事を片づける手際は、かつほれの言てきわい草じやないけれど、「まったく、日本一のおかみさんだよ。」摩擦の時など、他の助手さんたちは、塾生と、無駄むだぐち口をきいたり、流行歌を教え合ったり、善く言えば和気藹々わきあいあいと、悪く言えばのろのろとやっているのに、この竹さんだけは、塾生たちが何を言いかけても、少し微笑ほほえんであいまいに首肯うなずくだけで、シャツシャツとあざやかな手つきで摩擦をやってしまっている。しかも

摩擦の具合は、強くも無し弱くも無し、一ばん上手で、そうして念いりだし、いつも黙って明るく微笑んで愚痴も言わず、つまらぬ世間話など決してしないし、他の助手さんたちから、ひとり離れて、すつと立っている感じだ。このちよつとよそよそしいような、孤独の気品が、塾生たちにとって何よりの魅力になっているのかも知れない。何しろ、たいへんな人気だ。越後獅子えちじしの説に拠よると、「あの子の母親は、よつぽどしつかりした女に違いない」という事である。或いはある、そうかも知れない。大阪の生れだそうで、竹さんの言葉には、いくらか関西訛なまりが残っている。そこがまた

塾生たちにとつて、たまらぬいいところらしいが、僕は昔から、からだ身体おおいの立派な女を見ると、大鯛おおいなんかを思い出し、つい苦笑してしまつて、そうして、ただそのひとを気の毒に思うばかりで、それ以上は何の興味も感じないのだ。気品のある女よりも、僕には可愛らしいかわいい女のほうがよい。マア坊は、小さくて可愛らしいひとだ。僕は、やつぱり、あのどこやら不可解なマア坊に一ばん興味がある。

マア坊は、十八。東京の府立の女学校を中途退学して、すぐここへ来たのだそうである。丸顔で色が白く、まつげの長い二重ふたえまぶた瞼の大きい眼の眼尻が少しさがつて、

そうしていつもその眼を驚いたみたいにまんまるく
睜つて、そのため額に皺しわが出来て狭い額がいつそう狭
くなっている。滅茶苦茶めちゃくちやに笑う。金歯が光る。笑いた
くて笑いたくて、うずうずしているようで、なに？
と眼をぐんと大きく睜つて、どんな話にでも首をつつ
込んで来て、たちまち、けたたましく笑い、からだを
前ごごみにして、おなかをとんとん叩たたきながら笑い咽むせ
んでいるのだ。鼻が丸くてこんもり高く、薄い下唇したくちびる
が上唇より少し突き出ている。美人ではないが、ひど
く可愛い。仕事にもあまり精を出さない様子だし、摩
擦も下手くそだが、何せピチピチして可愛らしいので、

竹さんに劣らぬ人気だ。

3

君、それにつけても、男つて可笑おかしなものだね。そんなに好きでもない女の人には、カクランだの、ハイチャイだの、ばかにしたような綽名をどしどしつけるが、いいひとに対しては、どんな綽名も思いつかず、ただ、竹さんだのマア坊だのという極めて平凡な呼び方しか出来ないのだからね。おやおや、きようは、ばかに女の話ばかりする。でも、きようは、なぜだか、

他の話はしたくないのだ。きのうの、マア坊の、

「つくしにね、鈴虫が鳴いてるって言ってやって。」

という可憐な言葉に酔わされて、まだその酔いが醒さめずにいるのかも知れない。いつもあんなに笑い狂っているくせに、マア坊も、本当は人一倍さびしがりの子なのかも知れない。よく笑うひとは、よく泣くものじゃないのか。なんて、どうも僕はマア坊の事になると、何だか調子が変わになる。そうして、マア坊は、どうやら西脇つくし殿を、おしたい申しているのだから、かなわない。いま僕は、この手紙を、昼食を早くすましていそいで書いているのだが、隣の「白鳥の間」か

ら、塾生たちの笑い声にまじって、かん高い、派手な、マア坊の笑い声はつきり聞えて来る。いったい、何を騒いでいるのだろう。みつともない。白痴じゃないか。なんて、きょうの僕は、どうも少し調子が変わだ。いろいろ、もつと、書きたい事もあったのだけれど、どうも隣室の笑い声が気になって、書けなくなった。ちよつと休もう。

やつと、どうやら、お隣の騒ぎも、しずまったようだから、もう少し書きつづける事にしよう。どうもあの、マア坊つてのは、わからないひとだ。いや、なに、別に、こだわるわけでは無いがね、十七八の女つて、皆

こんなものなのかしら。善いひとなのか悪いひとなのか、その性格に全然見当がつかない。僕はあのひとと逢うたんびに、それこそあの杉田玄白がはじめて西洋の横文字の本をひらいて見た時と同じ様に、「まことに艫舵なき船の大海に乗出せしが如く、茫洋として寄るべなく、只あきれにあきれて居たる迄なり」とでもいふべき状態になってしまう、と言えば少し大袈裟だが、とにかく多少、たじろぐのは事実だ。どうも気になる。いまでも僕は、あのひとの笑い声のために手紙を書くのを中断せられ、ペンを投げてベッドに寝ころんでしまったのだが、どうにも落ちつかなくて堪え難く

なつて来て、寝ころびながらお隣の松右衛門殿に訴えた。

「マア坊は、うるさいですね。」そう僕が口をとがらせて言ったら、松右衛門殿は、お隣りのベッドに泰然とあぐらをかいて爪楊子つまようじを使いながら、うむと首肯うなずき、それからタオルで鼻の汗をゆつくり拭ぬぐって、

「あの子の母親が悪い。」と言った。

なんでも母親のせいにする。

でも、マア坊も、或いは意地の悪い継母なんかには育てられた子なのかも知れない。陽気にはしゃいでいるけれども、どこかに、ふっと淋しい影が感ぜられる。

なんて、どうもきょうの僕は、マア坊を、よつぽど好
いているらしい。

「つくしにね、鈴虫が鳴いてるって言ってやって。」

その時から、どうも僕はへんだ。つまらない女なん
だけれどもね。

九月七日

死生

きのうは妙な手紙で失敬。季節のかわりめには、もの皆があたりしく見えて、こいしく思われ、つい、好きだ好きだ、なんて騒ぎ出す始末になるのだ。なあに、そんなに好いてもいないんだよ。すべて、この初秋という季節のせいなのだ。このごろは僕も、まるでもう、おつちよこちよいの、それこそピイチクピイチクやかましくおしやべりする雲雀ひばりみたいになってしまったよ。うだが、しかし、もはやそれに対する自己嫌悪けんおや、臍ほそを噛かみたいほどの烈はげしい悔恨も感じない。はじめは、その嫌悪感の消滅を不思議な事だと思っていたが、な

に、ちつとも不思議じゃない。僕は、まったく違う男
になってしまった筈はずではなかったか。僕は、あたらしい
い男になっていたのだ。自己嫌悪や、悔恨を感じない
のは、いまでは僕にとって大きな喜びである。よい事
だと思っている。僕には、いま、あたらしい男として
の爽さわやかな自負があるのだ。そうして僕は、この道場
に於おいて六箇月間、何事も思わず、素朴そぼくに生きて遊ぶ
資格を尊いお方からいただいたているのだ。囀さえずる雲雀。
流れる清水。透明に、ただ軽快に生きて在れ！

きのうの手紙で、マア坊をばかに褒ほめてしまったが、

あれは少し取消したい。実は、きよう、ちよつと珍妙な事件があつたので、前便の不備の補足かたがた早速御一報に及ぶ次第なのだ。囀る雲雀、流れる清水、このおつちよこちよいを笑う給うな。たも

けさの摩擦は久しぶりでマア坊だった。マア坊の摩擦は下手くそで、いい加減。つくし殿には、ていねいに摩擦してあげるのかも知れないが、僕には、いつでも粗末で不親切だ。マア坊には、僕なんか、まるで道ばたの石ころくらいにしか思われていないのだらうし、どうせそうだらうし、まあ、仕方が無い。けれども僕にとつては、マア坊は、あながち石ころでは無いのだ

から、僕はマア坊の摩擦の時には息ぐるしく、妙に固
くなつて、うまく冗談が言えない。冗談を言うどころ
か、声が喉のどにひつからまつて、ろくにものが言えなく
なるのだ。結局、僕は、不機嫌ふきげんみたいに、むつつりし
てしまうのだが、そうするとまた、マア坊のほうでも
気づまりになるのであろう、僕の摩擦の時だけは、ちつ
とも笑わず、そうして無口だ。けさの摩擦も、そんな
具合の窮屈な、やりきれないものであった。殊ことにも、
あの、「つくしにね、鈴虫が鳴いてるって言ってやって」
以来、僕の気持は急速にはりつめて来ているような
按配あんばいなのだし、それにまた、君への手紙に、マア坊を

好きだ好きだと書いてやった直後でもあるし、どうにも、かなわない、ぎこちない気分であつた。マア坊は、僕の背中をこすりながら、ふいと小声で言つた。

「ひばりが、一ばんいいな。」

うれしく無かつた。何を言つていやがると思つた。とつてつけたようなそんなお世辞を言えるのは、マア坊が僕を、いい加減に思つている証拠だ。本当に、一ばんいいと思つていたら、そんなにはつきり、ぬけぬけと言えるものではない。僕にだつてそれくらいの機微は、わかっているさ。僕は、黙つていた。すると、また小声で、

「なやみが、あるのよ。」

と来た。僕は、びつくりした。なんてまあ、まずい事を言うのだろう。うんざりした。「鈴虫が鳴いている」が、これで完全にマイナスになった。低能なんじゃないかしらと疑った。まえからどうも、あの笑い方は白痴的だと思っていたが、さては、ほんものであったか、などと考えているうちに、気持も軽くなつて、「どんな悩みが、あるんだい。」と馬鹿ばかにし切った口調で尋ねることが出来た。

答えない。かすかに鼻をすすった。横目でそつと見ると、なんだ、かれは泣いているのだ。いよいよ僕は呆れた。^{あき}よく笑うひとは、またよく泣くひとではないか、などときの僕は君に書いてやったが、そんな出鱈目でたらめの予言が、あまりあっけなく眼前に実現せられているのを見ると、かえってこつちが気抜けしていやになる。ばかばかしいと思った。

「つくしが退場するんだってね。」と僕は、からかうような口調で言った。事実、そんな噂うわさがあるのだ。何か一家内の都合で、つくしは、北海道の故郷のほうの

病院に移らなければならぬような事になったという噂を、僕は聞いて知っていたのだ。

「ばかにしないで。」

すつと立って、まだ摩擦もすまないのに、かなだら金盥をかかえてさつきと部屋から出て行ってしまった。その後姿を眺ながめて、白状するが、僕の胸はちよつと、ときめいた。まさか、僕の事でなやんでいるなどは、いくら自惚うぬぼれても、考えられやしないけれど、しかし、あんなに陽気なマア坊が、いやしくも一個の男子の前で意味ありげに泣いてみせて、そうして怒って、すつと立って行ったというのは、或あるいは重大な事なのかも知

れない。或いは、ひよつとすると、と、そこは、いくらおさえつけてもやっぱり少し自惚れが出て来て、ついさっきの軽蔑感けいべつかんも何も吹っ飛んでしまつて、やたらにマア坊がいとしく思われ、わあ、と叫びたい気持で、ベッドに寝たまま両腕を大きく振りまわした。けれども、なんという事も無かつた。マア坊の涙の意味がすぐにわかつた。お隣りの越後獅子えちごじしの摩擦をしていたキントトが、その時、事も無げに僕に教えたのだ。

「叱しかられたのよ。あんまり調子に乗つて騒ぐので、ゆうべ、竹さんに言われたのよ。」

竹さんは助手の組長だ。叱る権利はあるだろう。ま

あこれで、すべて、わかった。なんとこの事も無かった。はつきり、わかったというものだ。なあんだ！組長に叱られて、それで悩みがあるもすさまじいや。僕は、実に、恥ずかしかった。僕のあわれな自惚れを、キントトにも、越後獅子にも、みんなに見破られて憫笑びんしょうせられているような気がして、さすがの新しい男も、この時ばかりは閉口した。実に、わかった。何もかも、よくわかった。僕は、マア坊の事は、きれいにあきらめるつもりだ。新しい男は、思い切りがいいものだ。未練なんて感情は、新しい男には無いんだ。僕はこれからマア坊を完全に黙殺してやるつもりだ。

あれは猫だ。ねこ 本当につまらない女だ。あはははは、と
ひとりで笑つてみたい氣持だ。

お昼には、竹さんがお膳ぜんを持って来た。いつもは、
さつさと帰るのだが、きょうは、お膳をベッドの傍の
小机こまに載せて、それから伸び上るようにして窓の外を
眺めなが、二、三步、窓のほうへ歩み寄り、窓縁に両手を
置いて、僕のほうに背を向けたまま黙つて立っている。
庭の池を見ている様子であつた。僕はベッドに腰かけ
て、さつそく食事をはじめた。あたらしい男は、おか
ずに不服を言わないものである。きょうのおかずは、
めざしと、かぼちやの煮つけだ。めざしは頭からバリ

バリ食べる。よく噛かんで、よく噛んで、全部を滋養にしなければならぬ。

「ひばり。」と音声の無い、呼吸だけの言葉で囁ささやかれて、顔を挙げたら、竹さんは、いつのまにか、両手をうしろに廻まわして窓に寄りかかってこちら向きになっていて、そうして、あの特徴のある微笑をして、それから、やつぱり呼吸だけのような極めて低い声で、「ママ坊が泣いたって？」

「うん。」僕は普通の声で返辞した。「なやみがあると
言つてた。」よく噛んで、よく噛んで、きれいな血液を
作るのだ。

「いやらしい。」竹さんは小さい声で言つて顔をしか
めた。

「僕の知つた事じゃない。」あたらしい男は、さつぱり
しているものだ。女のごたつきには興味が無いんだ。

「うち、気がもめる。」と言つて、にっと笑つた。顔が
赤い。

僕は、少しあわてた。ごはんを、なま噛みのまま呑
み込んでしまった。

「たんと食べえよ。」と、低く口早に言つて、僕の前を通り、部屋から出て行つた。

僕の口は思わずとがった。なあんだ。大きいなりをして、だらしがねえ。なぜだか、その時、そんな気がして、すこぶる気にいらなかつた。組長じゃないか。人を叱つて気がもめる、もないもんだ。僕は、にがにがしく思つた。竹さんも、もつと、しっかりしなければいかんと思つた。けれども、三杯目のごはんをよそつて、こんどは僕のほうで顔を赤くしてしまつた。おひつのごはんが、ばかに多いのだ。いつもは、軽く三杯よそうと、ちやうど無くなる筈なのに、きょうは

三杯よそつても、まだたつぷり一杯ぶん、その小さいおひつの底に残つてあるのだ。ちよつと閉口だった。

僕は、このような種類の親切は好かない。親切の形式が、またおいしいとも感じない。おいしくないごはんは、血にも肉にもなりはしない。なんにもならん。むだな事だ。越後獅子の口真似くちまねをして言うならば、「竹さんの母親は、おそろしく旧式のひとに違いない。」

僕はいつものように軽く三杯たべただけで、あとの鼯ひいき肩の一杯ぶんは、そのままおひつに残した。しばらくして竹さんが、何事も無かつたような澄ました顔をしてお膳をさげに来た時、僕は軽い口調で言つてやつ

た。

「ごはんを残したよ。」

竹さんは、僕のほうをちつとも見ないで、おひつの蓋ふたをちよつとあけてみて、

「いやらしい子！」と、ほとんど僕にも聞きとれなかつたくらいの低い声で言つてお膳を持ち上げ、そうしてまた、何事も無かつたような澄ました顔で部屋から出て行つた。

竹さんの「いやらしい」は口癖のようになっていて、何の意味も無いものらしいが、しかし、僕は女から「いやらしい」と言われると、いい気はしない。実に、い

やだ。以前の僕だったら、たしかに竹さんを一発ぴしやんと殴ったであろう。どうして僕はいやらしいのだ。いやらしいのは、お前じゃないか。昔は女中が、鼻^{でっ}の丁^{ちやわん}稚^んの茶碗^をにごはんをこっさり押し込んでよそつてやったものだそうだが、なんとも無^む智^ちな、いやらしい愛情だ。あんまり、みじめだ。ばかにしちやいけない。僕には、あたらしい男としての誇りがあるんだ。ごはんというものは、たとい量が不足でも、明るい気持でよく嚙んで食べさえすれば、充分の栄養がとれるものなのだ。竹さんを、もつとしつかりしたひとだと思っていたが、やっぱり、女はだめだ。ふだんあ

んなに利巧そうに涼しく振舞っているだけに、こんな愚行を演じた時には、なおさら目立って、きたならしくなる。残念な事だ。竹さんは、もつとしつかりしなければいけない。これがマア坊だったら、どんな失敗を演じても、かえって可愛く、いじらしさが増すというような事もないわけではないのだろうが、どうも、立派な女の、へまは、困る。と、ここまでお昼ごはんの後の休憩を利用して書いたのだが、突然、廊下の拡声機が、新館の全塾生はただちに新館バルコニーに集合せよ、という命令を伝えた。

便箋びんせんを片附かたづけて二階のバルコニーに行つてみると、

きのうの深夜、旧館の鳴沢イト子とかいう若い女の塾生が死んで、ただいま沈黙の退場をするのを、みんなで見送るのだという事であつた。新館の男の塾生二十三名、そのほか新館別館の女の塾生六名、緊張した顔でバルコニーに、四列横隊みたいな形で並び、出棺を待った。しばらくして、白い布に包まれた鳴沢さんの寝棺が、秋の陽ひを浴びて美しく光り、近親の人たちに守られながら、旧館を出て松林の中の細い坂路さかみちを、ア

スファルトの県道の方へ、ゆるゆると降りて行った。鳴沢さんのお母さんらしい人が、歩きながらハンケチを眼にあて、泣いているのが見えた。白衣の指導員や助手の一団も、途中まで、首をたれて、ついて行った。

よいものだと思った。人間は死に依よつて完成せられる。生きているうちは、みんな未完成だ。虫や小鳥は、生きてうごいているうちは完璧かんぺきだが、死んだとたんには、ただの死骸しがいだ。完成も未完成もない、ただの無に帰する。人間はそれに較くらべると、まるで逆である。人間は、死んでから一ばん人間らしくなる、というパロドックスも成立するようだ。鳴沢さんは病氣と戦って死んで、

そうして美しい潔白の布に包まれ、松の並木に見え隠れしながら坂路を降りて行く今、ご自身の若い魂を、最も厳肅に、最も明確に、最も雄弁に主張して居おられる。僕たちはもう決して、鳴沢さんを忘れる事が出来ない。僕は光る白布に向つて素直に合掌した。

けれども、君、思い違ひしてはいけない。僕は死をよいものだと思つた、とは言つても、決してひとの命を安く見ていい加減に取扱つていゝるものでも無いし、また、あのセンチメンタルで無気力な、「死の讚美者さんびしや」とやらでもないんだ。僕たちは、死と紙一枚の隣合せに住んでいゝるので、もはや死に就いておどろかなくなつ

ているだけだ。この一点を、どうか忘れずにいてくれ
給え。僕のこれまでの手紙を見て、君はきつと、この
日本の悲憤と反省と憂鬱ゆううつの時期に、僕の周囲の空気だ
けが、あまりにのんきで明るすぎる事を、不謹慎のよ
うに感じたに違いない。それは無理もない事だ。しか
し、僕だつて阿呆あほうではない。朝から晩まで、ただ、げ
たげた笑つて暮しているわけではない。それは、あた
り前の事だ。毎夜、八時半の報告の時間には、さまざま
まのニュウスを聞かされる。黙つて毛布をかぶつて寝
ても、眠られない夜がある。しかし僕は、いまはそん
なわかり切つた事はいっさい君に語りたくないのだ。

僕たちは結核患者だ。今夜にも急に咯血かっけつして、鳴沢さんのようになるかも知れない人たちがばかりなのだ。僕たちの笑いは、あのパンドラの匣はこの片隅かたすみにころがつていた小さな石から発しているのだ。死と隣合せに生活している人には、生死の問題よりも、一輪の花の微笑が身に沁しみる。僕たちはいま、謂いわば幽かすかな花の香にさそわれて、何だかわからぬ大きな船に乗せられ、そうして天の潮路のまにまに身をゆだねて進んでいるのだ。この所謂いわゆる天意の船が、どのような島に到達するのか、それは僕も知らない。けれども、僕たちはこの航海を信じなければならぬ。死ぬのか生きるのか、それ

はもう人間の幸不幸を決する鍵かぎでは無いような気さえして来たのだ。死者は完成せられ、生者は出帆の船のデッキに立ってそれに手を合せる。船はするする岸壁から離れる。

「死はよいものだ。」

それはもう熟練の航海者の余裕にも似ていないか。新しい男には、死生に関する感傷は無いんだ。

九月八日

マア坊

さつそくの御返事、なつかしく拝読しました。こないだ、僕は、「死はよいものだ」などという、ちよつと誤解を招き易い^{やす}ようなあぶない言葉を書き送ったが、それに対して君は、いちぶも思い違いするところなく、正確に僕の感じを受取ってくれた様子で、実にうれしく思った。やっぱり、時代、という事を考えずには居られない。あの、死に対する平静の気持は、一時代まえの人たちには、どうしても理解できないのではある

まいか。「いまの青年は誰だれでも死と隣り合せの生活を
して来ました。敢あえて、結核患者に限りませぬ。もう
僕たちの命は、或あるお方にささげてしまつていたので
す。僕たちのものではありません。それゆえ、僕たち
は、その所謂天意の船に、何の躊躇ちゆうちよも無く気軽に身を
ゆだねる事が出来るのです。これは新しい世紀の新し
い勇氣の形式です。船は、板一まい下は地獄と昔から
きまつていますが、しかし、僕たちには不思議にそれ
が気にならない。」という君のお手紙の言葉には、か
えつてこつちが一本やられた形です。君からいただいた
た最初のお手紙に対して、「古い」なんて乱暴な感想を

吐いた事に就いては、まじめにおわびを申し上げなければならぬ。

僕たちは決して、命を粗末にしているわけではない。しかしまた、死に対していたずらに感傷に沈み、或いは、恐れおびえてもいないのだ。その証拠には、あの鳴沢イト子さんの白布に包まれた美しく光る寝棺を見送ってから、僕はもう、マア坊だの竹さんだのの事はすっかり忘れて、まるできょうの秋空のように高く澄んだ心境でベッドに横たわり、そうして廊下では、塾生じゅくせいと助手が、れいの如ごとく、

「やっとするか。」

「やっとるぞ。」

「がんばれよ。」

「ようし来た。」

という挨拶あいさつを交しているのを聞き、それがいつものようなふざけ半分の口調でなくて、何だか真剣な響きのこもっているのに気がついた。そうして、そのように素直に緊張して叫んでいる塾生たちに、僕はかえって非常に健康なものを感じた。少し気取った言い方をするなら、その日一日、道場全体が神聖な感じであった。僕は信じた。死は決して、人の気持を萎縮いしゆくさせるものではない、と。

僕たちのこんな感想を、幼い強がりとか、或いは絶望の果のヤケクソとしか理解できない古い時代の人たちは、気の毒なものだ。古い時代と、新しい時代と、その二つの時代の感情を共にめいりよう明瞭に理解する事のできる人は、まれなのではあるまいか。僕たちは命を、羽のように軽いものだと思っている。けれどもそれは命を粗末にしているという意味ではなくて、僕たちは命を羽のように軽いものとして愛しているという事だ。そうしてその羽毛は、なかなか遠くへ素早く飛ぶ。本当に、いま、愛国思想がどうの、戦争の責任がどうの、このと、おとなたちが、きまりきったような議論を

やたらに大声挙げて続けているうちに、僕たちは、その人たちを置き去りにして、さっさと尊いお方の直接のお言葉のままに出帆する。新しい日本の特徴は、そんなところにあるような気さえする。

鳴沢イト子の死から、とんでもない「理論」が発展したが、僕はどうもこんな「理論」は得手じゃない。新しい男は、やっぱり黙って新造の船に身をゆだねて、そうして不思議に明るい船中の生活でも報告しているほうが、気が楽だ。どうだい、また一つ、女の話でもしようかね。

君のお手紙では、君は、ばかに竹さんを弁護しているようじゃないか。そんなに好きなら、竹さんに君から直接、手紙でも出すがよい。いや、それよりも、まあ、いちど逢^あつてごらん。そのうち、おひまの折に、僕を見舞いに、ではなくて竹さんを拝見しに、この道場へおいでになるといい。拝見したら、幻滅しますよ。何せ、どうにも、立派な女なのだから。腕力だつて、君より強いかも知れない。お手紙に依^よると、君は、マア坊が泣いた事なんか、少しも問題ではないが、竹さ

んの、「うち、気がもめる」が、大事件だ、というお説
のようだが、それは僕だつて考えてみたさ。マア坊が
僕のところへ来て、なやみがあるのよ、なんて言つて
泣いた事に就いて、「うち、気がもめる」というのは、
すなわち、竹さんが僕に前から思召おぼしめしがある証拠では
なからうか、とばかな自惚うぬぼれを起したいところだが、
僕には、みじんもそんな氣持が起らない。竹さんは、
なりばかり大きくて、ちつともお色氣の無い人だ。い
つも仕事に追われて、他の事ほかなど、考えているひまも
無いようなたちの人なんだ。助手の組長という重責に
緊張して、甲斐か々々がいしく立働いているというだけの人

なんだ。竹さんが、その前夜、マア坊を叱しかった。叱しかったところが、マア坊はひどくしよげて、泣いたりして
いるという事を、他の助手から聞いて、それでは自分
の叱り方が少し強すぎたのかしらと反省して、そうし
て心配になって来て、「うち、気をもめる」という事にな
った、というのがこの場合、頗すこぶる野暮よぼったいけれど
も、しかし、最も健全な考え方だと思われる。それに
違ちがいないのだ。女なんて、どうせ、自分自身の立場の
事ばかり考えているものさ。あたらしい男は、女に対
して、ちつとも自惚おぼれていないのだ。また、好かれる
という事も無いんだ。さっぱりしたものだ。

「うち、気がもめる」と言つて、竹さんは顔を赤くしたけれども、あれは、マア坊を叱つた事に就いて気もめる、という意味で、ふいと言つたその言葉が、案外の妙な響きを持つてゐる事にはつと気づいて、少し自分でまごついて顔を赤くしたというだけの事で、なんとこの事もない。きわめて、つまらぬ事だ。そうして、あの日、マア坊が僕のところまで泣いた事や、また、気がもめるの事にしても、或いは、ごはん一杯ぶんの鼻^{ひいき}の事にしろ、あの日の全部の変調子を解くために、是非とも考慮に入れて置かなければならぬ重大な事実が一つあるのだ。それは、鳴沢イト子の死である。鳴

沢さんは、その前夜に死んだのだ。笑い上戸じょうこのマア坊が叱られたのもそれでわかる。助手たちは、鳴沢イト子と同様の、若い女だ。衝動も強かったのでは、あるまいか。女には、未だ、古くさい情緒みたいなものが残っている。淋さびしくて戸まどいして、そうして、ごはん一杯ぶんの慈善なんて、へんな情緒を發揮したのであるまいか。とにかく、あの日の、みんなの変調子は、鳴沢イト子の死と強くむすびついているようだ。マア坊も、竹さんも、別段、僕に思召しがあるわけじゃないんだ。冗談じゃない。

どうだ、君、わかったかい。これでも、君は、竹さ

んを好きかい。まあいちど道場へ御出張になって、実物を拝見なさる事だ。竹さんよりは、マア坊のほうが、まだしも感覚の新しいところがあつて、いいように僕には思われるのだが、君は、ひどくマア坊をきらいらしいね。考え直したらどうかね。マア坊には、やつぱり、ちよつといいところがあるんだぜ。おとといであつたか、マア坊が、とても気だてのよいところを見せてくれて、僕は、にわかにもたまたマア坊を見直したというわけだが、きようは一つその事の次第を御紹介しましょう。君も、きつと、マア坊を好きになるだろうと思う。

おととい、同室の西脇にしわきつくし殿が、いよいよ一家内の都合でこの道場を出る事になつて、ちようどその日がマア坊の公休日とかに当たっているのだそうで、それで、つくしをE市まで送つて行く約束をしたとか、その前の日あたりからマア坊は塾生たちに大いにかかわられて、お土産をたのむ、とほうぼうから強迫されて、よし心得た、と気軽に合点々々していたが、おとといの朝早く、久留米くるめがすり緋のモンペイをはいて、つくし殿の

あとを追っていそいそ出かけ、そうして午後の三時頃、
僕たちが屈伸鍛錬をはじめていたら、こいしい人と別
れて来たひとらしくもなく、にこにこ笑いながら帰つ
て来て、部屋々々を廻まわつて約束のお土産を塾生たちに
くばつて歩いていた。

いまのような手不足の時代には、かなりの暮しをし
ている家の娘でも、やはり家を出て働かなければなら
ぬ様子だが、マア坊なども、どうやらその組らしく、
仕事も遊び半分のようだし、そのくせポケットの温か
なせい、いつもなかなか気前がよく、それがまた塾
生たちの人気の原因の一つになっているようで、こん

な時のお土産だつて、かなり贅沢だ。お土産は、どこでどんな具合に入手したのか、一寸に二寸くらいのおもちゃの鏡だ。裏に映画女優の写真が貼られてある。昔は、こんなものは、駄菓子屋の景物などに、ただでくれたしろものだが、いまはこんなものでも、買うとなると決して安くないだろう。どこかの駄菓子屋かおもちゃ屋のストックを、そんなに数十枚も買って帰ったのかも知れないが、とにかく、いかにもマア坊らしい思いつきのお土産だ。塾生たちには、裏の映画女優の写真がいたくお気に召した様子で、たいへんな騒ぎ方だ。かっぱれも一枚もらった。僕は、女からものを

もらうのは、いやだから、はじめからお土産の強迫な
どもしなかつたし、また、みんなと同じおもちゃの懐
中鏡一枚の恩恵に浴したところで、つまらない事だと
思っていたし、マア坊が僕たちの部屋へやって来て、
かつぽれに鏡を手渡し、

「かつぽれさんは、この女優を知ってる？」

「知らねえが、べっぴんだ。マア坊にそっくりじゃな
いか。」

「あら、いやだ。ダニエル・ダリユウじゃないの。」

「なんだ、アメリカか。」

「ちがうわよ、フランスのひとよ。ひところ東京では、

ずいぶん人気があつたのよ。知らないの？」

「知らねえ。フランスでも何でも、とにかくこれは返すよ。毛唐けとうはつまらねえ。日本の女優の写真とかえてくれねえか。あい願わくば、そうしてもらいたい。こいつは、向うの小柴こしばのひばりさんにもあげるんだね。」

「ぜいたく言ってる。特別に、あなただけに差上げるのよ。ひばりには、いや。意地わるだから、いや。」

「どうだかね。ではまあ、いただいて置きましょう。ダニエ？」

「ダニエルよ。ダニエル・ダリユウ。」

そんな二人の会話を聞いて、僕はにこりともせず屈伸鍛錬を続けていたが、さすがに面白くなかった。僕がそんなにマア坊にきらわれていたのか。好かれているとは、もちろん思っていないが、こんなに僕ひとり憎まれてきらわれているとは思ひ及ばなかった。自分の地位を最低のところ^{おもしろ}に置いたつもりでいても、まだまだ底には底があるものだ。人間は所詮^{しよせん}、自己の幻影に酔って生きているものであろうか。現実^{まじめ}は、きびしいと思った。いったい僕の、どこがいけないのだらう。こんど一つマア坊に、真面目^{まじめ}に聞いてみようと思った。そうして、機会は、案外早くやって来た。

その日の四時すぎ、自然の時間に、僕はベッドに腰かけてぼんやり窓の外を眺^{なが}めていたら、白衣に着かえたマア坊が、洗濯物^{せんたくもの}を持ってひよいと庭に出て来た。僕は思わず立ち上り、窓から上半身乗り出して、

「マア坊。」と小さい声で呼んだ。

マア坊は振向き、僕を見つけて笑った。

「土産をくれないの？」と言ってみた。

マア坊は、すぐには答えず、四辺を素早く身廻した。

誰か見ていないかと、あたりに気をくばるような具合
いであった。道場は、いま安静の時間である。しんと
していた。マア坊は、こわばったような笑い方をして、
ちよつとてのひら掌を口の横にかざし、あ、と大きく口をあ
け、それから口をとがらせて顎あごをひき、その次に、口
を半分くらいひらいてこつくり首肯うなずき、それから口を
三分の二ほどひらいてまた、こつくり首肯いた。声を
全然出さず、つまり口の形だけで通信しているのであ
る。僕には、すぐにわかった。

「ア、ト、デ、ネ」と言っているのだ。

すぐにわかったけれども、わざと、同じ様に口の形

だけで、「ア、ト、デ？」と聞きかえすと、もう一度、
「ア、ト、デ、ネ」を一字一字区切つて、子供がこつくりこつくりをするような身振りで可愛く通信してみせて、それから、口の横にかざしていた掌を、内緒、内緒、とでもいうように小さく横に振つて、肩をきゅつとすくめて笑い、小走りに別館のようへ走つて行つた。
「あとでね、か。案ずるより生むが易し、だ。」そんな事を心の中で眩つひやき、僕は、どさんとベッドに寝ころがった。僕のよろこびに就いては説明する必要があるまい。すべて、御賢察にまかせる。

そうして、きのうの夜の摩擦の時、僕はマア坊から、

その「アトデネ」のお土産をもらった。きのうの朝から、時々、マア坊は、エプロンの下に何か隠しているようなふうで、意味ありげに廊下をうろついて、ひよつとしたら、あのエプロンの下に僕へのお土産を忍ばせてあるのではあるまいかとも思っていたのだが、ずうずう図々しくこちらから近寄って手を差しのべ、「どうしたの？」などと逆襲されると、これはまた大恥辱であるから、僕は知らん顔をしていたのだ。けれども、やっぱり、それは僕への贈物であったのだ。

昨夜の七時半の摩擦は、約一週間ぶりでマア坊の番に当って、マア坊は左手にかなだら金盥をかかえ、右手をエプ

ロンの下に隠し、にやりにやりと笑いながらやって来て、僕のベッドの側にしやがみこんで、

「意地わる。取りに来ないんだもの。けさから何度も廊下で待っていたのに。」

そう言つてベッドの引出しをあげ、素早くエプロンの下の品物をその中に滑り込ませて、ぴったり引出しをしめ、

「言つちや、いやよ。誰にも、言つちやいやよ。」

僕は寝ながら二度も三度も小さく首肯いた。摩擦に取りかかつて、

「ひばりの摩擦は、久しぶりね。なかなか番が廻って

来ないんだもの。お土産を渡そうとしても、どうしたらいいのか、困ったわ。」

僕は自分の首のところに手をやって、結ぶ真似まねをして、ネクタイか？ という意味の無言の質問をすると、「ううん。」と下唇したくちびるを突き出して笑って否定し、「ばかねえ。」と小声で言った。

実際、ばかだ。僕には、背広さえ無いのに、何だつてまた、ネクタイなんて妙なものを考えたのだろう。われながら、おかしい。或いは、あの小さい懐中鏡から無意識にネクタイを聯想れんそうしたのかも知れない。

僕は、こんどは右手で、ものを書く真似をして、万年筆か？ という意味の質問を試してみた。実に僕は勝手な男だ。僕の万年筆がこの頃はどうも具合が悪いので、あたらしいのが欲しいという意識が潜在していたらしく、ついこんな時ひよいと出る。僕は内心、自分の凶々しさに呆あきれたよ。

「ううん。」マア坊は、やっぱり首を横に振って否定する。まるでもう、見当がつかない。

「ちよつと、地味かも知れないけど、人にやったりし

ないでね。お店に、たった一つ残っていたのよ。飾りも、ちつとも上等でないけど、ここを出てから持つて歩いてね。ひばりは紳士だから、きつと要るわよ。」

いよいよ、わからなくなつた。まさか、ステツキじやあるまい。

「とにかく、ありがとう。」僕は寝返りを打ちながら言つた。

「何を言つてるの。ぼんやりねえ、この子は。さつさと早くなおつて、いなくなるというい。」

「おおきに、お世話だ。いっそ、ここで、死んでやろうかね。」

「あら、だめよ。泣くひとがあるわ。」

「マア坊かい？」

「しよってるわ。泣くもんですか。泣くわけがないじゃないの。」

「そうだろうと思った。」

「あたしが泣かなくなつて、ひばりには、泣いてくれる人がいくらでもあるわ。」ちよつと考えてから、「三人、いや、四人あるわ。」

「泣くなんて、意味が無い。」

「あるわよ、意味があるわよ。」と強く言い張つて、それから僕の耳元に口を寄せて、「竹さんでしよう？」

キントトでしょう？ たまねぎでしょう？ カ克蘭
でしよう？」と一人々々左手の指を折って数え上げて、
「わあい。」と言つて笑つた。

「カ克蘭も泣くのか。」僕も笑つた。

その夜の摩擦はたのしかつた。僕も以前のように、
マア坊に対して固くなるような事はなく、いまでは何
だか皆を高所から見下しているような涼しい余裕が出
来ていて、自由に冗談も言えるし、これもつまり、女
に好かれないなどという息ぐるしい欲望を、この半箇よくぼう
月ほどの間に全部あつさり捨て去つたせいかも知れぬ
が、自分でも不思議なほど、心に少しのこだわりも無

く楽しく遊んだのだ。好くも好かれるも、五月の風に騒ぐ木の葉みたいなものだ。なんの我執も無い。あたらしい男は、またひとつ飛躍をしました。

その夜、摩擦がすんで、報告の時間に、アメリカの進駐軍がいよいよこの地方にも来るといふ知らせを、拡声機を通して聞きながら、ベッドの引出しをさぐり、マア坊の贈物を取り出し、包をほどいた。

三寸四方くらいの小さい包で、中には、シガレットケースが入っていた。「ここを出てから持って歩いてね、ひばりは紳士だから、きつと要るわよ」という先刻の不可解な言葉の意味も、これでわかった。

それを箱から出して、ちよとひっくりかえしたりして見ているうちに、僕は何だかひどく悲しくなってきた。うれしくないのだ。あながち、世間のニュウスのせいばかりでも無かったようだ。

6

それは、ステンレスというのか、ケーキナイフなどに使つてあるクロームのような金属で出来た銀色の、平たいケースである。蓋ふたには薔薇ばらの蔓つるを圖案化したよ
うな、こんがらかつた細い黒い線の模様があつて、そ

の蓋の縁には小豆色のエナメルみたいなものが塗られてある。このエナメルが無ければよいのに、このエナメルの不要な飾りのために、マア坊の言うように、「ちよつと地味」だし、また「ちつとも上等でなく」なっている。でもまあ、せつかくマア坊が買って来てくれたのだから、とにかく大事にしまつて置くべきであらう。

どうも、しかし、愉快でない。もらつて、こんな事を言うのはいけないが、本当にちつとも嬉うれしくないのだ。よその女のひとから、ものをもらうのは、初めての経験であるが、実に妙に胸苦しくていけないもの

だ。はなはだ後味のわるいものだ。僕は、引出しの奥の一ばん底に、ケースを隠した。早く忘れてしまいたい。

ケースには、僕も、少し閉口して、持てあましの形だが、しかし、こんな経緯に依^よつて、マア坊のよさを少しでも君にわかつてもらいたくて、以上、御報告の一文をしたためた次第だ。どうだね、少しはマア坊を見直したかね。やっぱり、竹さんのほうがいいかね。御感想をお聞かせ下さい。

きょうは、つくしのベッドに、隣りの「白鳥の間」の固パンが移って来た。姓名は須川^{すがわごろう}五郎、二十六歳。

法科の学生だそうで、なかなかの人気者らしい。色浅黒く、眉がまゆ太く、眼はぎよろりとしてロイド眼鏡をかけて、わしばな驚鼻で、あまり感じはよくないが、それでも、助手さんたちから、大いに騒がれているのだそうだ。どうも、男から見えていやなやつほど、女に好かれるようだ。固パンの出現に依って、「桜の間」の空気も、へんにしらしらしいものになって来た。かつぽれば、既に少し固パンに対して敵意を抱いているようだ。きようの夕食前の摩擦の時にも、助手さんたちは固パンに向って英語を色々たずねて、

「ねえ、教えてよ。ごめんなさいね、つてのは英語で

「どうなの。」

「アイ、ベツグ、ユウア、ペアドン。」固パンは、ひどく気取って答える。

「覚えにくいわ。もつと簡単な言いかたが無いの？」
「ヴェリイ、ソオリイ。」実に気取って言う。

「それじゃあね。」と別な助手さんが、「どうぞお大事にね、ってことを何というの？」

「プリイズ、テツキヤア、オブ、ユアセルフ。」take careを、テツキヤアと発音する。なんとも、どうも、きざな事であった。

助手さんたちは、それでも大いに感心して聞いてい

る。かつぽれには、僕以上に固パンの英語が癩かんにさわ
るらしく、小さい声でれいの御自慢の都々逸とどいつ、

『末は博士か大臣か、よしな書生にや金が無い』とか
いうのを歌ったりして、とにかく、さかんに固パンを
牽制けんせいしようとおせている様子であつた。

僕はしかし、元気だ。きょう体重をはかたら、四
百匁もんめちかく太つていた。断然、好調である。

九月十六日

衛生について

こないだから、女の事ばかり書いて、同室の諸先輩に就いての報告を怠っていたようだから、きようは一つ「桜の間」の塾生じゆくせいたちの消息をお伝え申しましょう。きよう「桜の間」では喧嘩けんかがあつた。とうとう、かつぽれが固パンに敢然と挑戦ちようせんしたのだ。

原因は梅干である。

それが甚はなはだ、どうにもややこしい話なのである。かつぽれには、かねて、瀬戸の小鉢こぼちがあつて、それに

梅干をいれて、ごはんの度に、ベッドの下の戸棚とだなから
取出しては梅干をつついていた。けれども、このごろ、
その梅干にかびが生えはじめた。かつぽれば、これは
容いれ物の悪いせいではあるまいかと考えた。小鉢の蓋ふた
がよく合わぬので、そこから細菌が忍び入り、このよ
うにかびが生える結果になったのに違いないと考えた。
かつぽれば、なかなか綺麗きれい好きになひとんだ。どうに
も気になる。何かよい容れ物があるまいかと、かつぽ
れは前から思案にくれていたというような按配あんばいなのだ。
ところが、きのうの朝食の時、お隣りの固パンがやは
り、食事の度毎たびごとに持出していたらつきょうの瓶びんが、ちよ

うど空いたのを、かっぱれば横目で見とどけ、あれがいいと思つた。口も大きいし、そうして、しつかり栓せんも出来る。いかなる細菌も、あの瓶の中には忍び込む事が出来まい。もう空いたのだから、固パンも気軽に貸してくれるだろう。固パンに頭を下げるのは癩しやくだが、でも、細菌を防ぐためには、どうしてもあのらつきよの瓶が必要である。衛生を重んじなければならぬ。そう思つて、かっぱれば、食事がすんでから、おそれるおそれる固パンに空瓶の借用を申し出た。

固パンは、かっぱれの顔をまっすぐに見て、
「こんなものを、どうするのです。」

その言い方が、かつぽれに、ぐつと来たというのである。前からこの二人の間には暗雲が低迷していたのである。かつぽれは、この健康道場第一等の色男を以て任じていたのに、最近に到^{いた}つて固パンがめきめき色男の評判を高めて、かつぽれの影は薄くなり、むしゃくしゃしていた矢先だったのである。

「こんなもの？ 須川さん、そんな言い方をしてもいいのですか。」かつぽれの言い方も妙である。

「なぜ、いけないのです。」固パンは、にこりともしない。どうにも堅くるしく、気取っている男なのである。「わかりませんかねえ。」かつぽれは、少しおされ気味

になって、にやにやと無理に笑って、「私があなたから、まさか、豚のしつぽを借りようとしたわけではなし、こんなもの、とにべもなく言われては、私の立つ瀬が無くなります。」いよいよ妙だ。

「僕は豚のしつぽなんて事は言いません。」

「わからない人だね。」かっぽれば、少し凄すこくなった。

「かりにお前さんが、豚のしつぽと言わなくなつて、こちらには、ぴんと来るんだから仕様がねえじゃないか。馬鹿ばかにしなさんな。大学生だつて左官だつて、同じ日本国の臣民じゃないか。よくもおれを、豚のしつぽみたいに扱いましたね。おれが豚のしつぽなら、お

前さんは、とかげのしつぽだ。一視同仁というものだ。おれには学はねえが、それでも衛生を尊ぶ事だけは、知っているのだ。人間、衛生を知らなければ、犬畜生と同じわけのものなんだ。」

何が何だか、さっぱりわけのわからない口説くぜつになつて来た。

2

固パンは一向それに取合わず、両手を頭のうしろに組んで、仰向にベッドの上に寝ころがった。度胸のあ

る男のように見えた。かっぱれば、ベッドの上にあぐらを掻いて、からだを前後左右にゆすぶり、腕まくりするやら、自分の膝を自分のこぶしでぽんぽん叩くやら、しきりにやきもきして、

「え、おい、聞いていますのですか、そんな大学生。まさか柔道を使やしねえだろうな。大学生には時たまあれを使うやつがあるから恐れている。あいつあ、ごめんだぜ。いいかい、はつきり言つて置くけど、この道場は、柔道の道場でもなければ、また、色男修行の道場でもないんですぜ。場長の清盛も、こないだの講話で言っていた。諸君は選手である。結核の必ず全治する

という証拠を、日本全国に向つて示すところの選手である。切に自重を望む、と言いましたがね。おれはあの時、涙が出たね。男子、義を見てせざれば勇なきなり、というわけのものだ。勇に大勇あり小勇あり、ともいうべきわけのところだ。だから、人間、智仁勇、この三つが大事というわけになるんだ。女にもてるなんて、問題になるわけのものじゃ決してないんだ。」ほとんど支離滅裂である。それでも、かっぱれば顔を青くしてさらに声を張り上げ、「だから、それだから、衛生が大事だというわけの事に自然になつて行くんだ。常に衛生、火の用心というのは、だから、そここのこ

ろを言ってると思うんだ。いやしくも一個の人間を豚のしっぽと較くらべられるわけのものじゃ絶対に無いんだ。」

「やめろ、やめろ。」と越後獅子えちじしが仲裁にはいった。越後獅子は、それまでベッドの上に黙って寝ころんでいたのだが、その時むっくり起きてベッドから降り、かっぱれのうしろから肩を叩いて、やめろやめろ、とちよつと威厳のある口調で言ったのである。

かっぱれは、くるりと越後獅子のほうに向き直つて、越後獅子に抱きついた。そうして越後獅子の懐ふところに顔を押し込むようにして、うわっ、うわっ、と声を一つ

ずつ区切つて泣出した。廊下には、他の^{ほか}部屋の塾生たち
が、五、六人まごついて、こちらの様子をうかがつ
ている。

「見ては、いけない。」と越後獅子は、その廊下の塾生
たちに向つて^ど吠鳴^なつた。そこまでは立派であつたが、
それから少しまずかつた。「喧嘩^{けんか}ではないぞ！ 単な
る、単なる、ううむ、単なる、単なる、ううむ」と唸^{うな}
つて、とほうに暮れたように、僕のほうをちらと見た。

「お芝居。」と僕は小声で言つた。

「単なる、」と越後は元氣を^{かいふく}恢復して、「芝居の作用だ。」
と叫んだ。

芝居の作用とは、どういう意味か解しかねるが、僕のような若輩から教えられた事をそのまま言うのは、こけん沽券にかかわると思つて、とつきのうちに芝居の作用という珍奇な言葉を案出して叫んだのではないかと思われる。おとなというものは、いつも、こんな具合に無理をして生きているのかも知れない。

かつぽれば、それこそ親獅子のふところにかき抱か
れている児獅子こじしというような形で、顔を振り振り泣き
じやくり、はつきり聞きとれぬような、ろれつの廻まわら
ぬ口調で、くどくどと訴えはじめた。

「おれは、生れてから、こんな赤恥をかいた事はねえのだ。育ちが、悪くねえのです。おれは、おやじにだつて殴られた事はねえのだ。それなのに、豚のしつぽ同然にあしらわれて、はらわたが煮えくりかえつて、おれは、すじみちの立った挨拶あいさつを仕様と思つて、一ばんいい事ばかり言つたのです。一ばんいいところばかり選んで言おうと思つたんだ。本当に、おれは、一ばんのいい事だけを言つてやつたつもりなんだ。それなのに、それを、ベッドに寝ころがって知らん振りして、

なんだ、あの態度は！　くやしくて、残念でならねえのです。なんだ、あの態度は！　ひとが一ばんいい事を言っているのに、あの態度は！　つくづく世間が、イヤになった。ひとが一ばんいい事を、——」

だんだん同じ様な事ばかり繰り返して言うようになつた。

越後は、かつぽれをそつとベッドに寝かせてやった。かつぽれは、固パンのほうに背を向けて寝て、顔を両手で覆^{おお}つて、しばらくしゃくり上げていたが、やがて眠つたみたいになつた。八時の屈伸鍛錬の時間になつても、その形のまままで、じつとしていた。

実に妙な喧嘩であつた。けれども、昼食の頃にはもう、もとの通りのかつぽれさんにかえつていて、固パ
ンが、れいのらつきようの空瓶を綺麗に洗つて来て、
どうぞ、と言つて真面目まじめに差出した時にも、すみませ
ん、とびよこんとお辞儀をして素直に受け取り、そう
して昼食がすんでから、梅干を一つずつ瀬戸の小鉢か
ら、らつきようの瓶に、たのしそうに移していた。世
の中の人が皆、かつぽれさんのようにあつさりしてい
たら、この世の中も、もつと住みよくなるに違いない
と思われた。

喧嘩の事に就いては、これくらいにして、ついでに

もう一つ簡単な御報告がある。

きょうの午後の摩擦は、竹さんだった。僕は、竹さんに君のことを少し言った。

「竹さんを、とても好きだと言っている人があるんだけど。」

竹さんは、摩擦の時には、ほとんど口をきかない。いつも黙って涼しく微笑ほほえんでいる。

「マア坊なんかより、竹さんのほうが十倍もいいと言ってた。」

「誰だれや。」沈黙女史も、つい小声で言った。マア坊よりもいい、というほめ方が、いたく気に入った様子であ

る。女って、あさはかなものだ。

「うれしいかい？」

「好かん。」竹さんはそう一こと言っただけで、シャツと少し手荒く摩擦をつづける。眉をひそめて、まゆ不機嫌ふきげんそうな顔だ。

「怒ったの？ そのひとは、本当にいいやつなんだがね。詩人だよ。」

「いやらしい。ひばりは、このごろ、あかん。」左の手の甲で自分の額の汗をぬぐって言った。

「そうかね、それじゃもう教えない。」

竹さんは黙っていた。黙って摩擦をつづけた。摩擦

がすんで引きあげる時に、竹さんはおくれ毛を搔き上げて、妙に笑い、

「ヴェリイ、ソオリイ。」と言った。

ごめんなさいね、って言ったつもりなんだろう。ちよつと竹さんも、わるくないね。どうだい、君、そのうちにひまを見て、当道場へやって来ないか。君の大好きな竹さんを見せてあげますよ。冗談、失礼。朝夕すずしくなりました。常に衛生、火の用心とはこのところだ。僕と二人ぶんの御勉強おねがい申し上げます。

九月二十二日

コスモス

1

さつそくの御返事、たのしく拝読いたしました。高等学校へはいると、勉強もいそがしいだろうに、こんなに長い御手紙を書くのは、たいへんでしょう。これからは、いちいちこんな長い御返事の必要はありません。勉強のさまたげになるのではないかと、それが気

になります。

竹さんに、あんな事を言うとはけしからぬとのお叱り。おそれいりました。けれども、「もう僕は君をお見舞いに行けなくなつた」というお言葉には賛成いたしかねます。君も、ずいぶん気が小さい。こだわらずに、竹さんに軽く挨拶出来るようであれば、新しい男とは言えません。色気を捨てる事ですね。詩三百、思い邪無し、とかいう言葉があつたじゃありませんか。天真爛漫を心掛けましょう。こないだお隣りの越後獅子に、

「僕の友だちで、詩の勉強をしている男があるんです

が、」と言いかけたら、越後は即座に、

「詩人は、きぎだ。」と乱暴極まる断定を下したので、僕は少しむっとして、

「でも、詩人は言葉を新しくすると昔から言われているじゃないですか。」と言り返した。越後獅子は、にやりと笑って、

「そう。こんにちの新しい発明が無ければいけない。」と無雑作に答えたが、越後も、ちよつと、あなどりがない事を言うと思った。賢明な君の事だから、すでにお気づきの事と思いますが、どうか、これからは、詩の修行はもとより、何につけても、君の新しい男とし

ての真の面目を見せて下さるよう、お願いします。なんて、妙に思いあがった、先輩ぶった言い方をしましたが、なに、竹さんなんかの事は気にするな、というだけの事なんだ。勇気を出して、当道場を訪問して、竹さんをひとめ見るといい。現物を見ると、君の幻想は、たちまち雲散霧消する。何せもうただ立派で、そうして大鯛おおだいなんだからね。それにしても君は、ずいぶん竹さんに打ち込んだものだね。僕があれば、マア坊の可愛らしさを強調して書いてやっても、「マア坊とやらしい女性などは、出来そこないの映画女優ごじょの如く」なんておっしゃって、一向にみとめてはくれず、

ひたすら竹さん竹さんなんだから恐れいりました。しばらく竹さんに就いての御報告はひかえようと思う。この上、君に熱をあげられて、寝込まれでもしたら大変だ。

きょうは一つ、かつぽれさんの俳句でも御紹介しましょうか。こんどの日曜の慰安放送は、塾生たちの文芸作品の発表会という事になって、和歌、俳句、詩に自信のある人は、あすの晩までに事務所に作品を提出せよとの事で、かつぽれは、僕たちの「桜の間」の選手として、お得意の俳句を提出する事になり、二、三日前から鉛筆を耳にはさみ、ベッドの上に正坐せいざして首

をひねり、真劍に句を案じていたが、けさ、やつとまとまったそうで、十句ばかり便箋びんせんに書きつらねたのを、同室の僕たちに披露ひろうした。まず、固パンに見せたけれども、固パンは苦笑して、

「僕には、わかりません。」と言って、すぐにその紙片を返却した。次に、越後獅子に見せて御批評を乞こうた。越後獅子は背中を丸めて、その紙片をねらうようにつくづくと見つめ、

「けしからぬ。」と言った。

下手だとか何とか言うなら、まだしも、けしからぬという批評はひどいと思った。

かつぽれは、蒼あおざめて、

「だめでしょうか。」とお伺いした。

「そちらの先生に聞きなさい。」と言って越後は、ぐいと僕の方を顎あごでしやくつた。

かつぽれは、僕のところ我便箋を持って来た。僕は不風流だから、俳句の妙味などてんでわからない。やっぱり固パンのように、すぐに返却しておゆるしを乞うべきところでもあったのだが、どうも、かつぽれ

が気の毒で、何とかなぐさめてやりたく、わかりもしない癖に、とにかくその十ばかりの句を拝読した。そんなにまずいものではないように僕には思われた。月並でもいうのか、ありふれたような句であるが、これでも、自分で作るとなると、なかなか骨の折れるものなのではあるまいか。

乱れ咲く乙女心の野菊かな、なんてのは少しへんだが、それでも、けしからぬと怒るほどの下手さではないと思った。けれども、最後の一句に突き当って、はつとした。越後獅子が憤慨したわけも、よくわかった。

露の世は露の世ながらさりながら

誰やらの句だ。これは、いけないと思った。けれども、それをあからさまに言つて、かつぽれに赤恥をかかせるような事もしたくなかつた。

「どれもみな、うまいと思いますけど、この、最後の一句は他のと取りかえたら、もつとよくなるんじゃないかな。素人考えですけど。」

「そうですね。」かつぽれは不服らしく、口をとがらせた。「その句が一ばんいいと私は思っているんですがね。」

そりや、いい筈だ。俳句の門外漢の僕でさえ知っているほど有名な句なんだもの。

「いい事は、いいに違いないでしょうけど。」

僕は、ちよつと途方に暮れた。

「わかりますかね。」かつぽれは図に乗つて来た。「いまの日本国に対する私のまごころも、この句には織り込まれてあると思うんだが、わからねえかな。」と、少し僕を軽蔑するけいべつような口調で言う。

「どんな、まごころなんです。」と僕も、もはや笑わずに反問した。

「わからねえかな。」と、かつぽれは、君もずいぶんトンマな男だねえ、と言わんばかりに、眉まゆをひそめ、「日本のいまの運命をどう考えます。露の世でしょう？」

その露の世は露の世である。さりながら、諸君、光明を求めて進もうじやないか。いたずらに悲観する勿^{なか}れ、といったような意味になって来るじやないか。これがすなわち私の日本に対するまごころというわけのものなんだ。わかりますかね。」

しかし、僕は内心あつけにとられた。この句は、君一茶^{いっさ}が子供に死なれて、露の世とあきらめてはいるが、それでも、悲しくてあきらめ切れぬという気持の句だった筈ではなかったかしら。それを、まあ、ひどいじやないか。きれいに意味をひっくりかえしている。これが越後の所謂^{いわゆる}「こんにちの新しい発明」かも知れ

ないが、あまりにひどい。かつぽれのまごころには賛成だが、とにかく古人の句を盗んで勝手な意味をつけて、もてあそぶのは悪い事だし、それにこの句をそのまま、かつぽれの作品として事務所に提出されては、この「桜の間」の名誉にもかかわると思つたので、僕は、勇気を出して、はつきり言つてやった。

3

「でも、これとよく似た句が昔の人の句にもあるんです。盗んだわけじゃないでしょうけど、誤解されると

いけませんから、これは、他のと取りかえたほうがいいと思ふんです。」

「似たような句があるんですか。」

かつぼれは眼を丸くして僕を見つめた。その眼は、溜息ためいきが出るくらいに美しく澄んでいた。盗んで、自分で気がつかぬ、という奇妙な心理も、俳句の天狗てんぐたちには、あり得る事かも知れないと僕は考え直した。実に無邪気な罪人である。まさに思い邪無しである。

「そいつは、つまらねえ事になった。俳句には、時々こんな事があるんで、こまるのです。何せ、たった十七文字ですからね。似た句が出来るわけですよ。」ど

うも、かつぼれは、常習犯らしい。「ええと、それではこれを消して、」と耳にはさんであつた鉛筆で、あつさり、露の世の句の上に棒を引き、「かわりに、こんなのはどうでしょう。」と、僕のベッドの枕元まくらもとの小机で何やら素早くしたためて僕に見せた。

コスモスや影おどるなり乾ほしむしろ

「けっこうです。」僕は、ほつとして言った。下手でも何でも、盗んだ句でさえなければ今は安心の気持だつた。「ついでに、コスモスの、と直したらどうでしょう。」と安心のあまり、よけいの事まで言つてしまつた。「コスモスの影おどるなり乾むしろ、ですかね。なる

ほど、情景がはつきりして来ますね。偉いねえ。」と言つて僕の背中をぽんと叩いた。^{たた}「隅に置けねえや。」^{すみ}

僕は赤面した。

「おだてちゃいけません。」落ちつかない気持になつた。「コスモスや、のほうがいいのかも知れませんよ。僕には俳句の事は、全くわからないんです。ただ、コスモスの、としたほうが、僕たちには、わかり易くて^{やす}いような気がしたものですから。」

そんなもの、どっちだっていいじゃないか、と内心の声は叫んでもいた。

けれども、かつぽれば、どうやら僕を尊敬したよう

である。これからも俳句の相談に乗ってくれと、まんざらお世辞だけでもないらしく真顔で頼んで、そうして意気揚々と、れの爪つま先さきき立たつてお尻しりを軽く振ふつて歩く、あの、音楽的な、ちよんちよん歩きをして自分のベッドに引き上げて行き、僕はそれを見送り、どうにも、かなわなない気持であった。俳句の相談役など、じつさい、文句入りの都々逸どどいつ以上に困ると思つた。どうにも落ちつかず、閉口の気持で、僕は、

「とんでもない事になりました。」と思わず越後に向つて愚痴を言つた。さすがの新しい男も、かっぱれの俳句には、まいったのである。

越後獅子は黙って重く首肯した。

けれども話は、これだけじゃないんだ。さらに驚くべき事実が現出した。

けさの八時の摩擦の時には、マア坊が、かつぽれの番に当たっていて、そうして、かつぽれが彼女に小声で言っているのを聞いてびっくりした。

「マア坊の、あの、コスモスの匂、な、あれは悪くねえけど、でも、気をつけろ。コスモスや、てのはまずいぜ、コスモスの、だ。」

おどろいた。あれは、マア坊の匂なのだ。

そういえば、あの句にはちよつと女の感覚らしいものがあつた。とすると、あの、乱れ咲く乙女心の野菊かな、とかいう変な句も、くさい。やっぱりあれも、マア坊か誰か助手さんの作つた句なのではあるまいか。何だか、あの十の俳句がことごとくあやしくなつて来た。実に、ひどいひとだ。本当に、あきれるばかりだ。あの露の世の句にしても、また、このコスモスの句にしても、これは「桜の間」の名誉にかかわる、などと大袈裟おおげさな事は言わずとも、かつぽれさんの人格問題と

して、これは、いったい、どんな事になるのだろうか、はらはらしたが、でも、それからまた、かつぽれとマア坊との間に交された会話を聞いて安心し、たいへんいい気持になったのだ。

「コスモスの句つて、どんなの？ わすれてしまったわ。」マア坊は、のんびりしている。

「そうかい。それじゃ、おれの句だったかな？」あつさりしている。

「カクランの句じゃない？ あなたはいつか、カクランと俳句の交換だか何だか、こっそりやってたわね。わあい、だ。」

「してみると、カクランの句かな？」落ちついたものである。淡泊と言おうか、軽快と言おうか、形容の言葉に窮するくらいだ。「カクランの句にしては、うますぎるよ。きやつ、盗みやがったな。」すでにここに到^{いた}つては、天衣無縫とでもいうより他は無^ない。「こんど、おれは、あの句を出すんだ。」

「慰安放送？ あたしの句も一緒に出してよ。ほら、いつか、あなたに教えてあげたでしょう？ 乱れ咲く乙女心の、という句。」

果して然^{しか}りだ。しかし、かつぽれば、一向に平気で、「うん。あれは、もう、いれてあるんだ。」

「そう。しつかりやってね。」

僕は微笑した。

これこそは僕にとって、所謂「こんにちの新しい発明」であつた。この人たちには、作者の名なんて、どうでもいいんだ。みんなで力を合せて作ったものよ。うな気がしているのだ。そうして、みんなで一日を楽しみ合う事が出来たら、それでいいのだ。芸術と、民衆との関係は、元来そんなものだったのではなからうか。ベートーヴェンに限るの、リストは二流だのと、所謂その道の「通人」たちが口角泡をとばして議論している間に、民衆たちは、その議論を置き去りにして、

さっさとめいめいの好むところの曲目に耳を澄まして
楽しんでいるのではあるまいか。あの人たちには、作
者なんて、てんで有り難がたくないんだ。一茶が作っても、
かつぽれが作っても、マア坊が作っても、その句が
面白おもしろくなけりや、無関心なのだ。社交上のエチケツト
だとか、または、趣味の向上だなんて事のために無理
に芸術の「勉強」をしやしないのだ。自分の心にふれ
た作品だけを自分流儀で覚えて置くのだ。それだけな
んだ。僕は芸術と民衆との関係に就いて、ただいま事
新しく教えられたような気がした。

きょうの手紙は、妙に理窟りくつっぽくなつたけれども、

でも、まあ、こんなかつぽれの小さい挿話そうわでも、君の詩の修行に於おいて何か「新しい発明」にでも役立ってくれたら、と思つて、この手紙を破らずにこのまま差し上げる事にしました。

僕は、流れる水だ。ことごとくの岸を撫なでて流れる。
僕はみんなを愛している。きざかね。

九月二十六日

妹

僕がいつも君に、こんな下手な、つまらぬ手紙を書いて、時々ふつと気まりの悪いような思いに襲われ、もうこんな、ばかばかしい手紙なんか書くまいと決意する事も再三あったが、しかし、きよう或るあひとの実に偉大な書翰しよかんに接し、上には上があるものだと、つくづく感歎かんだんして、世の中には、こんなばかげた手紙を書くおかたもあるのだから、僕の君に送る手紙などは、まだしも罪が軽いほうだ、と少しく安堵あんどした次第である。どうも、君、世の中にはさまざまの事がある。あ

のひとが、あんな恐るべき手紙をもつるとは、全く、神か魔かと疑つてみたくなるくらいだ。とにかく、なんと、ひどいんだ。

それでは、きようは一つその偉大なる書翰に就いてちよつと書いてみましょう。

けさは、道場で秋の大掃除がありました。掃除はお昼前にあらかたすんだけれど、午後もし課はお休みになつて、そうして理髪屋が二人出張して来て、塾生じゆくせいの散髪日という事になつたのです。五時頃ごころ、僕は散髪をすまして、洗面所で坊主頭ぼうずあたまを洗っていると、誰かだれ、すつと傍そばへ寄つて来て、

「ひばり、やつとるか。」

マア坊である。

「やつとる、やつとる。」僕は、石鹼せっけんを頭にぬたくりながら、頗すこぶるいい加減の返辞をした。どうも、このごろ、このきまりきった挨拶あいさつの受け答えが、めんどろくさくて、うるさくって、たまらないのである。

「がんばれよ。」

「おい、その辺に僕の手拭てぬぐいが無いか。」僕は、がんばれよの呼びかけには答えず、眼をつぶったまま、マア坊のほうに両手を出した。

右手にふわりと便箋びんせんのようなものが載せられた。片

目を細くあけて見ると、手紙だ。

「なんだい、これは。」僕は顔をしかめて尋ねた。

「ひばりの意地わる。」マア坊は笑いながら僕を睨にらんだ。

「なぜ、よしきた、と言わないの。がんばれよ、と言われて、ようしきた、と答えない人は、病気がわるくなっているのよ。」

僕は、いやな気がした。いよいよ、むくれて、

「それどころじゃないんだ。頭を洗っているんじゃないか。なんだい、この手紙は。」

「つくしから来たのよ。おしまいの所に、歌が書いてあるでしょう？ その意味について。」

石鹼が眼に流れ込まないように用心しながら、両方の眼を洗くあけて、その便箋のおしまいの所の歌を読んでみた。

相見^けずて日長くなりぬ此頃^{この}は如何^{いか}に好去^{さき}くやいぶ
かし吾妹^{わぎも}

つくしも、しやれてると思った。

「こんなの、わからんかねえ。これは、万葉集からでも取った歌にちがいない。つくしの作った歌じゃないぜ。」やいたわけではないが、ちよつと、けちをつけてやった。

「どんな意味？」低く言つて、いやにびったり寄り添つ

て来た。

「うるさいな。僕は頭を洗ってるんだ。後で教えてあげるから、手紙はその辺に置いといて、僕の手拭いを持って来てくれないか。部屋に置き忘れて来たらしいんだ。ベッドの上に無ければ、ベッドのまくらもと枕元の引出しの中にある。」

「意地わる！」マア坊は僕の手から便箋をひったくつて、小走りに部屋のほうへ走って行った。

竹さんの口癖は、「いやらしい」だし、マア坊のは「意地わる」である。以前は、言われる度に、ひやりとしたものだが、いまでは馴なれっこになって、まるで平気だ。さて、それでは、マア坊のいない間に、さっきの歌の「如何さに好去きくや」というところを、なんと解釈してやったらいいか、考えて置かなければならぬ。あそこが、ちよつとむずかしかつたので、手拭いにかこつけて、即答を避けたというわけでもあつたのだ。僕は「如何さにさきくや」の解釈の仕方を考え考え、頭の石鹼を洗い落していたら、マア坊は、手拭いを持って来て、そうしてこんどは真面目まじめな顔で、何も言わずに、

手渡すとすぐにすたすたと向うへ行ってしまった。

はっと思った。僕が悪いとすぐに思った。どうも僕はこのごろ、すれたというのか痲痺まひ「#「痲痺」は底本では「痲痺」したというのか、いつのまにやらこの道場の生活に狎なれて、ここへ来た当時の緊張を失い、マア坊などに話かけられても、以前のような興奮を覚えないし、まるで鈍感になって、助手が塾生の世話をするのは当り前の事で、特別の好意だの、何だの、そんなものはどうだっていいとさえ思うようになっていた状態でもあったので、つい、ぶあいそに手拭いを持って来いなんて言ってしまって、あれでは、マア坊も怒

るだろう。こないだも、竹さんに、「ひばりは、このごろ、あかんな。」と言われたけれど、本当に、僕にはこのごろ少し「あかん」ところがある。けさの大掃除の時に、塾生全部が室内のほこりを避ける意味で、新館の前庭にちよつと出たが、おかげで僕は実に久し振りで土を踏む事が出来た。時々こつそり、裏のテニスコートなどに降りてみる事はあつても、正々堂々の外出の許可を得たのは、僕がここへ来てからはじめての事であつた。僕は松の幹を撫なでた。松の幹は生きて血がかよっているものみたいに、温かかった。僕はしゃがんで、足もとの草の香の強さに驚き、それから両手

で土を掬い上げて。そのしつとりした重さに感心した。自然は、生きている、という当り前の事が、なまぐさいほど強く実感せられた。けれども、そんな驚きも、十分間くらい経つたら消滅してしまった。何も感じなくなつた。麻痺「#「麻痺」は底本では「痲痺」してしまつて平気になつた。僕はそれに気がついて、人間の馴致性じゆんちといふのか、変通性といふのか、自身のたより無さに呆あきれてしまつた。最初のあの新鮮なおのきを、何事に於おいても、持ちつづけていたいものだ、とその時つくづく思つたのだが、この道場の生活に対しても、僕はもうそろそろいい加減な気持を抱きはじめている

のではなからうか、とマア坊に怒られてはつと思ひ
当つたというわけなのだ。マア坊にだつて誇りはある
のだ。すみれの花くらいの小さい誇りかも知れないが、
そんな、あわれな誇りをこそ大事にいたわつてやらな
ければならぬ。僕はいま、マア坊の友情を無視したと
いう形である。つくしからの内緒の手紙を、僕に見せ
るといふ事は、或あるいは、マア坊は今では、つくし以上
に僕に好意を寄せているのだといふ、マア坊のもつた
いない胸底をあかしてくれた仕草なのかも知れない。
いや、それほど自惚うぬぼれて考えなくても、とにかく僕は、
マア坊の信頼を裏切つたのは確かだ。僕が以前ほどマ

ア坊を好きでなくなったからと言ったって、それは、僕のがままだ。僕は人の好意にさえ狎れてしまっている。僕は、シガレットケースをもらった事さえ忘れてる。よろしくない。実に悪い。

「がんばれよ。」と呼びかけられたら、その好意に感奮して、大声で、

「ようしきた！」と答えなければならぬ。

あやまちを改むるにはばかる事なかれだ。新しい男

は、出直すのも早いんだ。洗面所から出て、部屋へ帰る途中、炭部屋の前でマア坊と運よく逢あった。

「あの手紙は？」と僕はすぐに尋ねた。

遠いところを見ているような、ぼんやりした眼つきをして、黙って首を振った。

「ベッドの引出し？」ひよつとしたらマア坊は、さつき手拭いを取りに行った時に、あの手紙を、僕のベッドの引出しにでも、ほうり込んで来たのではあるまいかと思つて聞いてみたのだが、やはり、ただ首を振るだけで返辞をしない。女は、これだからいやだ。よそから借りて来た猫ねこみたいだ。勝手にしろ、とも思つた

が、しかし、僕にはマア坊のあわれな誇りをいたわらなければならぬ義務がある。僕は、それこそ、まさしく、猫撫で声を出して、

「さつきは、ごめんね。あの歌の意味はね、」と言いかけたら、

「もういい。」と、ぼいと投げ棄^すてるように言って、さつさと行ってしまった。実に、異様にするどい口調であつた。僕は突き刺されたような気がした。女つて、凄^すいものだね。僕は部屋へ帰つて、ベッドの上にごろりと寝ころがり、「万事、休す」と心の中で大きく叫んだ。

ところが、夕食の時、お膳ぜんを持って来たのは、マア坊である。冷たくとり澄まして、僕の枕元の小机の上にお膳を置き、帰りしなに固パンのところに立寄って、とたんに人が変つたようにたわいない冗談を言い出し、きやつきやつと騒ぎはじめて、固パンの背中をどんと叩いて、固パンが、こら！　と言つてマア坊のその手をつかまえようとしたら、

「いやあ。」と叫んで逃げて僕のところまで来て、僕の耳元に口を寄せ、

「これ見せたげる。あとで意味教えて。」とひどく早口で言つて小さく折り畳んだ便箋を僕に手渡し、同時

に固パンのほうに向き直り、

「やい、こら、固パン、白状せい。」と大声で言つて、
「テニスコートで、お江戸日本橋を歌つていらつしやつたのは、どなたです。」

「知らんよ、知らんよ。」と固パンは、顔を赤くして懸命に否定している。

「お江戸日本橋なら、おれだつて知つてらあ。」とかつぽれば不平そうに小声で言つて、食事にとりかかった。「どなたも、ごゆつくり。」とマア坊は笑いながら一同の者に会釈えしやくして、部屋を出て行つた。何がなんだか、わけがわからない。マア坊にいい加減になぶられてい

るような気がして、あまり愉快でなかった。そうして僕の手には一通の手紙が残された。僕は他人の手紙など見たくない。しかし、マア坊の小さい誇りをいたわるために、一覧しなければならぬ。やっかいな事になったと思ひながら、食後にこつそり読んでみたが、いや、これが君、実に偉大な書翰であつたのだ。恋文というものであろうか、何やら、まるで見当がつかない。あんな常識円満のおとなしそうな西脇にしわきつくし殿も、かげでこんな馬鹿げた手紙を書くとは、まことに案外なものである。おとなというのは、みんなこのような愚かな甘い一面を隠し持っているものであろうか。と

にかく、ちよつとその書翰の文面を書き写してお目にかけましようか。洗面所では終りの一枚のほんの一端だけを読まされたのだが、こんどは始めからの三枚の便箋全部を手渡しされたのである。以下はその偉大なる手紙の全文である。

4

「過ぎし想い^{おも}出の地、道場の森、私は窓辺によりかかり、静かに人生の新しい一頁^{ページ}とも云^いうべき事柄^{こと}を頭^{から}に描きつつ、寄せては返す波を眺^{なが}めている。静かに寄

せ来る波……然し、沖には白波がいたく吠えている。
然して汐風しおかぜが吹き荒れているが為ために。」というのが書
き出した。なんの意味も無いじゃないか。これではマ
ア坊も当惑する筈はずだ。万葉集以上に難解な文章だ。つ
くしは、この道場を出て、それからつくしの故郷の北
海道のほうの病院に行ったのだが、その病院は、どう
やら海辺に建っているらしい。それだけはわかるのだ
が、あとは何の意味やら、さっぱりわからない。珍ら
しい文章である。もう少し書き写してみましよう。文
脈がいよいよ不可思議に右往左往するのである。

「夕月が波にしずむとき、黒闇こくあんがよもを襲うとき、空

のあなたに我が靈魂を導く星の光あり、世はうつり、ころべど、人生を正しく生きんがために努力しよう！男だ！ 男だ！ 男だ！！ 頑張がんばつて行こう。私は今ここに貴女あなたを妹と呼ばして頂きたい。私には今与えられた天分と云おうか、何と云つていいか、ああ、やはり恋人と云つて熱愛すべき方がいい。」

なんの事やら、さっぱりわからぬ。そうして、この辺から、文脈がますます奇怪に荒れ狂う。実に怒濤どたうの如きものだ。

「それは人じゃない、物じゃない、学問であり、仕事の根源であり、日々朝夕愛すべき者は科学であり、自

然の美である。共にこの二つは一体となって私を心から熱愛してくれるであろうし、私も熱愛している。ああ私は妹を得、恋人を得、ああ何と幸福であろう。妹よ!! 私の!! 兄のこの気持、念願を、心から理解し、してくれることと思う。それであつて私の妹だと思い、これからも御便りを送つてゆきたいと思う。わかつてくれるだろう、妹よ!!

えらい堅い文章になつて申わけありませんでした。然も御世話になりし貴女に妹などと申して済みませんが、理解して下さいると思います。貴女の年頃になれば男女とも色んなことを考える頃なれど、あまり神

経を使うというのか、深い深い事を考えないようにして下さい。私も俗界を離れます。きようはいいお天気ですが、風が強いです。偉大なる自然！ われ泣きぬれて遊ばん！ おわかりの事と思う。きようのこの手紙、よくよく味わい繰返し繰返し熟読されたし。有難ありがとうよ、マサ子ちゃん!! がんばれよ、わがいとしき妹!!

では最後に兄として一言。

相見けずて日長くなりぬ此頃は如何さに好去きくやいぶ
かし吾妹わが妹

正子様

一かずお夫兄おより」

まず、ざっと、こんなものだ。一夫兄よりなんて、自分の名前に兄を附けるのも妙な趣向だが、とにかく、これは最後の万葉の歌一つの他は、何が何やらさっぱりわからない。ひどいものだと思う。真似まねして書こうたつて、書けるものではない。実に、破天荒とでもいうべきだ。けれども、西脇一夫氏という人間は、決して狂人ではない。内気なやさしい人なんだ。あんないい人が、こんな滅茶苦茶めっちゃくちやな手紙を書くのだから、実際にこの世の中には不思議な事があるものだ。マア坊が「意味教えて」と言うのも無理がない。こんな手紙をもらった人は災難だ。悩まざるを得ないだろう。名文

と言おうか、魔文と言おうか、どうもこの偉大なる
書翰しょかんを書き写したら、妙に手首がだるくなって、字が
うまく書けなくなつて来た。これで失敬しよう。また
出直す。

十月五日

試煉しれん

一昨日は、どうも、つくし殿の名文に圧倒され、ペ
ンが震えて字が書けなくなり、尻切しりきれとんぼのお手紙に
なつて失礼しました。あの日、夕食後に僕が、あの手
紙を読んで呆然ぼうぜんとしていたら、マア坊が、廊下の窓か
ら、ちらと顔をのぞかせて、「読んだ？」とでもいうよ
うな無言のお伺いの眼つきをして見せたので、僕は、
軽く首肯うなずいてやった。すると、マア坊も、真面目まじめにこつ
くり首肯うなずいた。ひどく、あの手紙を気にしているらし
い。西脇さんも罪な人だと僕はその時、へんな義憤ぎぶんみ
たいなものを感じた。そうして、僕はマア坊をたまら
なく、いじらしく思った。白状すると、僕はその時以

来、あらたにまた、マア坊に新鮮な魅力を感じたのだ。鈍感な男ではなくなったというわけだ。いつのまにやら、そうなっていた。どうも秋は、いけない。なるほど、秋は、かなしいものだ。笑っちゃいけない。まじめなのだ。

全部、話そう。あの、大掃除の翌あく日、マア坊が朝の八時の摩擦に、金盥かなだらいをかかえてひよいと部屋の戸口にあらわれ、そうして笑いを噛かみ殺しているような表情で、まっすぐに僕のところへ来た。こんなに早くマア坊が僕の番にまわって来るとは思いがけなかった事なので、僕はほとんど無意識に、

「よかったね。」と小声で言ってしまった。うれしかったのだ。

「いい加減言ってる。」マア坊はうるさそうに言つて、そうして、さつさと僕の摩擦に取りかかり、「けさは竹さんの番だったのよ。竹さんに他の御用ほかが出来たから、あたしが代つたの。わるい？」ひどく、あっさりした口調である。僕には、それが少し不満だったので、何も答えず、黙っていた。マア坊も黙っている。次第に息ぐるしく、窮屈になって来た。この道場へ来た当座も、僕はマア坊の摩擦の時には、妙に緊張して具合いの悪い思いをしたものだが、ふたたびあの緊張感がよ

みがえつて来て、どうも、窮屈でかなわなかった。摩擦が、すんだ。

「ありがとう。」僕は寝呆ねぼけ声で言った。

「手紙、かえして！」マア坊は、小声で、けれども鋭く囁ささやいた。

「枕元まくらもとの引出しにある。」僕は仰向おうえいに寝たまま顔をしかめて言った。あきらかに僕は不機嫌ふきげんだった。

「いいわ、お昼食がすんだら、洗面所へちよつといらっしやらない？ その時かえして。」

そう言い棄すて僕の返辞へんじも待たず、さっさと引き上げて行った。

不思議なくらいよそよそしかった。こつちがちよつと親切にしてあげると、すぐにあんなに、つんけんする。よろしい、それならば、僕にも考えがある。思い切り、こつぴどく、やつつけてやろう、と僕は覚悟して、お昼の休憩時間待った。

お昼ごはんは、竹さんが持つて来た。お膳ぜんの隅すみに竹細工の小さい人形が置かれてある。顔を挙げて竹さんに、これは？ と眼で尋ねたら、竹さんは、顔をしかめて烈はげしくイヤイヤをして、誰だれにも言うな、というよくな身振りをした。僕は浮かぬ顔をして、うなずいた。全く、不可解であつた。

「けさ、道場の急用で、まちへ行つて来たのや。」と竹さんは普通の音声で言った。

「お土産か。」と僕は、なぜだか、がっかりしたような気持で、元気の無い尋ね方をした。

「可愛^{かわい}いやろ？ 藤娘^{ふじむすめ}や。しまつとき。」と姉のような、おとなびた口調で言つて立ち去つた。

僕は、ぼかんとした気持だった。少しもうれしくない。人の好意には素直に感奮すべきだと前の日に思い

をあらたにした矢先ではあつたが、どういうものか、僕には竹さんのこんな好意は有り難くない。それは僕が、この道場に來た当初から變らずに持ちつづけていた感情で、いまさらどうにも動かしがたいのだ。竹さんは、助手の組長で、そうして道場の皆に信賴されてゐる立派な人なのだから、もっと、しっかりしなければならぬ。マア坊なんかとは、わけが違ふのだ。こんな、つまらぬ人形なんかを買つて來て、藤娘や、可愛いやろ？ もないもんだ。

僕は、ごはんを食べながら、つくづくとお膳の隅、その藤娘と称する二寸ばかりの高さの竹細工の人形を

眺^{なが}めたが、見れば見るほど、まずい人形だった。どうも趣味がわるい。これは駅の売店^{ほこり}で埃をかぶつて店^{たな}ざらしになっていたしろものに違いない。気のいい人は、必ず買い物が下手なものだが、竹さんも、どうやら、ごたぶんにもれぬほうらしい。ちよつと不良じみたマア坊なんかのほうが、ずっと気のきいた買い物をする。仕方の無いものだ。僕は、竹細工の始末に窮した。つつかえしてやろうかとさえ思ったが、前の日に、すみれの花くらのあわれな誇りをこそ大事にいたわってやらなければ、などと殊勝^{きき}な覚悟を極めた手前もあり、しよんぼりした気持で、その土産はひとまず

ベッドの引出しにしまい込んで置く事にした。けれども、竹さんの事をあまり書くと、君がまた熱をあげるといけないから、これくらいにして置いて、さて、そのお昼ごはんの後に、僕はとにかくマア坊のお指図どおりに、洗面所へ行ってみた。マア坊は、洗面所の一ばん奥の壁にぴったり背中をつけてこちら向きに立って、くすくす笑っていた。僕はちらと不愉快なものを感じた。

「君は、時々こんな事をするんだろう。」と、自分にも意外な言葉が出た。

「え？ どうして？」と、少し笑いながら眼をまんま

るくして僕の顔を見上げた。僕は、まぶしかった。

「塾生を時々ここへ、」ひっぱり込んで、と言いかけたのだが、流石さすがにそれはひどく下品な言葉のように思われたから、口ごもった。

「そう？ そんなら、よろししょう。」と軽く言つて、お辞儀するように上体を前にこごめて歩きかけた。

「手紙を持って来たよ。」僕は手紙を差出した。

「ありがとう。」とちつとも笑わずに受取つて、「ひばりも、やつぱり、だめね。」

「なぜ、だめなんだ。」僕のほうが受け身になった。

「あたしを、そんな女だと思つていたのね。ひばり、」

と顔を蒼くして僕の顔をまつすぐに見て、「恥ずかしい？」

「恥ずかしい。」僕は、あつさりかぶとを脱いだ。「やいたんだ。」

マア坊は、金歯を光らせて笑った。

3

「僕、その手紙を読んだよ。」大いにとちめてやるつもりであったのだが、竹さんからつまらぬ藤娘なんてお土産をもらって、出鼻をくじかれ、マア坊に対して

うしろめたいものさえ感じて意気があがらず、憂鬱ゆううつに
ちかい気持でこの洗面所に来てみると、マア坊が、あ
んまりなまめかしかつたので、男子として最も恥ずべ
きやきもちの心が起り、つい、あらぬ事を口走って、
ただちにマア坊に糺明きつうめいせられ、今は、ほとんど駄目だめに
なった。

「全部読んだよ。面白かった。つくしつて、いいひと
だね。僕は、好きになっちゃった。」心にもない、あさ
はかなお追従ついでしゅうばかり言っている。

「でも、意外だわ。こんな手紙。」マア坊は仔細しさいらしく
首をひねり、便箋びんせんをひらいて眺めた。

「うん、僕もちよつと意外に思った。」僕の場合、あんまり下手で意外だったのだ。

「まったく、意外だわ。」マア坊にとっては、いかにも、重大な事らしい。

「君のほうからも、手紙を出したんだろう。」またもや要らない事を言ってしまったて、ひやりとした。

「出したわ。」けろりとしている。

僕は急に面白くなかった。

「それじゃ君が誘惑したのだ。君は不良少女みたいだ。そんなのを、オタンチンっていうのだ。ミイチャンハアチャンともいうし、チンピラともいうし、また、トツ

ピンシヤンともいうんだ。けしからんじゃないか、君は。」と思ひ切り罵倒ばとうしてやったが、マア坊はこんどは怒るところか、げらげら笑い出した。

「まじめに聞いてくれよ。殊ことに、つくしには奥さんがある。笑い事じゃないんだぜ。」

「だから、奥さんにお礼状を出したの。つくしが道場を出る時、あたしがまちの駅まで送って行って、その時に奥さんから白足袋を二足いただいたから、あたし、奥さんに礼状を出したの。」

「それだけか。」

「それだけよ。」

「なあんだ。」僕は、機嫌を直した。「それだけの事だったのか。」

「ええ、そうよ。それなのに、こんなお手紙を寄こすんだもの、いやで、いやで、身悶えしちやつたわ。」

「何も身悶えしなくたって、いいじゃないか。君は、本当は、つくしを好きなんだろう。」

「好きだわ。」

「なあんだ。」僕は、また面白くなくなつて来た。「馬鹿にしていやがる。つまらない。奥さんのある人を好きになつたつて、仕様が無いじゃないか。あれは仲のよさそうな夫婦だつたぜ。」

「だって、ひばりを好きになつても仕様が無いでしょう？」

「何を言つてやがる。話が違ふよ。」僕はいよいよ不機嫌になった。「君は不真面目だ。僕は何も君に、好きになつてもらおうと思つてやしないよ。」

「ばか、ばか。ひばりは、なんにも知らないのよ。なんにも知らないくせに、ひばりなんかは、」と言いかけて、くるりとうしろを向いてヒイと泣き出した。そうして、それこそ身悶えして、

「あつちへ、行つて！」と強く言つた。

僕は出処進退に窮した。口をとがらして洗面所をぶらぶら歩いているうちに、何だか、僕も一緒に泣きだくなつて来た。

「マア坊。」と呼ぶ僕の声は、ふるえていた。「そんなに、つくしを好きなのか。僕だつて、つくしを好きだよ。あれは、やさしい、いい人だったからな。マア坊が、つくしを好きになるのも無理がないと思うんだ。泣け、泣け、うんと泣け。僕も一緒に泣くぜ。」

どうしてあんな気障きざな事を言ったのだらう。いま考

えてみると夢のような気がする。僕は泣こうと思った。しかし、ちよつと眼頭めがしらが熱くなっただけで、涙は一滴も出なかった。僕は眼を大きく睜みはつて、洗面所の窓からテニススコートの黄ばみはじめた銀杏いちょうを黙って眺めていた。

「早く、」いつの間にやらマア坊が、僕の傍そばにひっそりと立っていて、「お部屋へお帰り。人に見られると、わるいわ。」と気味のわるいほど静かな、落ちついた口調で言った。

「見られたってかまわない。悪い事をしているわけじゃないんだ。」そう言いながら、僕の胸は妙に躍った。

「とんまねえ、ひばりは。」と僕と並んで洗面所の窓からテニススコートのほうを眺めながら、ひとり言のように、「ひばりが来てから、道場も変っちゃったなあ。なんにも知らないでしょう？ ひばりのお父さんて、偉いお方ですってね。場長さんが、いつかそうおっしゃってたわ。世界的な学者ですってね。」

「貧乏なので、世界的なのだ。」ひどく淋さびしくなつて来た。お父さんとは、もう二箇月も逢あわない。相変わらず、障子が震動するほどの大きな音をたてて鼻をかんでい
るであろうか。

「血筋がいいのね。ひばりが来たら、道場が本当に、

急にあかるくなつたわ。みんなの気持も變つてしまつた。あんないい子を見たことが無いつて、竹さんも言つてた。竹さんはめつたに他人の噂うわさなんかしないひとなんだけど、ひばりには夢中なのよ。竹さんだけでなく、キントトだつて、たまねぎだつて、みんなそうなのよ。でも塾生さんたちにはやな噂を立てられて、ひばりに迷惑がかかるような事になるといけないから、みんな気をつけて、ひばりに近寄らないようにしているのよ。」

僕は苦笑した。けちくさい愛情だと思つた。

「そいつあ、敬遠というものなんだ。好きなんじゃないな

いんだ。」

「あら、あんなこと。」マア坊は僕の背中を軽く叩いて、その手をそのままそつと背中に置いた。「あたしは違うのよ。あたしは、ひばりをちつとも好きでないの。だから、こうして二人きりで話したつてかまわないのよ。思い違いしないでね。あたしは、——」

僕はマア坊の傍からそつと離れ、

「せいぜい、つくしと文通するさ。僕は、はつきり言うけど、つくしの手紙の下手さには呆れた。」

「知ってるわ。下手な手紙だからお見せしたんじゃないの。いい手紙だったら、誰が見せるもんか。あたし

は、つくしの事など、なんとも思つてやしないわ。そんなに人を馬鹿にするもんじゃないわ。」言葉も態度も別人のように露骨で下品になつて来た。「あたしはもう、だめなのよ。あなたは知らないでしょう？」とんまだから、気がつかないんだ。あたしは、あなたと いい仲だつて事を、もう、みんなに言われているのよ。どうするの？ そう言われてもいいの？」

顔を伏せて右肩を突き出し、くすくす笑いながらその肩先で僕をぐいぐい押すのである。

「よせ、よせ。」と僕は言った。こんな時には、それより他に言い方が無いものだ。とんでもない事になったと思った。

「困る？　どうなの？　ね、この上、また恥をかかすの？　ゆうべ、お月さまが、あかるくて、眠れなくて、庭へ出て、それから、ひばりの枕元の、カーテンが、少しあいていたので、のぞいてみたの、知ってる？　ひばりは、月の光を浴びて、笑いながら、眠ってたわ。あの寝顔、よかったな。ね、ひばり、どうするの？」

とうとう壁際かべぎわまで押しつけた。僕は、なんだか、ば

からしくなつて来た。

「無理だよ。どだい無理だよ。僕は二十なんだ。困るんだ。おい、誰か、こつちへ来るぜ。」ぱたぱたと、洗面所のほうへやって来るスリッパの足音が聞こえる。

「だめねえ、そんなんじゃないのよ。」マア坊は僕から離れて、顔を仰向にして髪を搔かき上げ、あははと笑つた。顔はお湯からあがり立てみたいに、ぽつと赤かつた。

「もう、講話の時間だ。失敬するぜ。僕は、時間におくれるなんて、だらしない事はきらいなんだ。」

僕は洗面所から走り出た。とたんに、

「竹さんと仲よくしちや駄目よ。」とマア坊が、細い声で言った。その声が、一ばん僕の心にしみた。

どうも、秋は、いけない。

部屋へ帰ったら、まだ講話は始まらず、かつほれが、ベッドにひっくりかえって、れいの都々逸どどいつなるものを歌っていた。みちの芝が人に踏まれても朝露によみがえるとかいう意味の、前にも幾度か聞かされた都々逸であるが、その時だけは、いつものような閉口迷惑を感じず、素直に耳傾けて拝聴したのだから奇妙なものだ。僕は気が弱くなってしまうたのかも知れない。

やがて講話がはじまり、日支文明の交流という題で、

岡木という若い先生が、主として医学の交流に就いて、昔からのいろいろな例証を挙げて具体的にわかり易く説明して下さい。日本と支那とは、いつも互いに教え合つて進んで来た国だという事が、いまさらの如く深く首肯せられ、反省させられるところも多かつたが、けれども、それにつけても、僕のきょうの秘密が、どうにも気がかりになつて、早くマア坊の事なんか忘れてしまい、以前のような何のくつたくも無い模範的な塾生になりたいとつくづく思った。

いったい、あの、マア坊がいけないのだ。もう少し聡明な女かと思つていたら、案外な、愚かな女だった。

さつき、あんな、思い余ったような素振りをいろいろ
してみせたが、あれには、何の意味も無いという事は
僕だって知っている。僕には馬鹿な自惚うぬぼれは無い。マ
ア坊はいつも自分の事ばかり考えているのだ。つくし
の事も、僕の事も、問題じゃないんだ。ただ、自分の
美しさ、あわれさに陶然としていたいのだ。無邪気な
ふりを装っているけれども、どうしてなかなか虚栄心
が強いものだから、誰にも負けたくないだろうし、そう
して、ひどい慾張よくばりなんだから、ひとのものは何でも
欲しいだろうし、マア坊の策略くらいは僕にだって看
破できる。

マア坊は、あの、つくしの手紙を僕に見せて、やっぱり少し威張りたかったのではあるまいか。けれども僕がその手紙をひどく馬鹿にしているのを、マア坊は敏感に察して、たちまち態度をかえ、泣くやら、押すやら、あらぬ事を口走る結果になったのに違いない。すみれほどの誇りどころか、あのひとの自尊心の高さは、女王さまみたいだ。とても、いたわりきれぬものでない。僕とマア坊といい仲だつて事をみんなが言い

囃はやしているとか言っていたが、ばかばかしい。僕は今まで、マア坊の事で人から、ひやかされた事は一回も無い。マア坊ひとりが騒いでいるのだ。マア坊には、たしなみのない、本質的な育ちのいやしさがある。本当に、越えちし後の言うように、母親がいけない人だったのかも知れない。落ちついて考えるに随したがって、腹が立つて来た。マア坊には、道場の助手としての資格が無いと思つた。道場は神聖なところだ。みんな一心に結核征服を念じて朝夕の鍛錬に精進しているところなのだ。もう一度、マア坊があんな露骨な言動を示したならば、僕は断然、組長の竹さんに訴えて、マア坊を道場から

追放してもらおうと覚悟した。

そのように覚悟をきめたら、やつと僕は、さっきの洗面所に於ける悪夢に就いて、そんなに、こだわりを感ぜないようになった。

あれは、悪い夢だ。悪い夢は、人生につながるの無いものだ。君を殴った夢を見たって、僕はその翌日、君におわびを言いには行かない。僕はそんな感傷的な宗教家、または詩人の心を持ってはいない。あたらしい男は、ややこしい事は大きらいだ。

夢には、こだわらぬつもりだが、しかし、その洗面所の悪夢の翌日、つまり、けさの、未明に、僕はもう

一つ夢を見た。そうして、これは、いい夢だ。いい夢は、忘れたくない。人生に、何かつながりを持たせたい。これは、是非とも君にも知らせてあげたい。竹さんの夢だ。竹さんは、いい人だね。けさ、つくづくそう思った。あんな人は、めつたにいない。君が竹さんに熱を上げるのも無理はないと思った。君は流石さすがに詩人だけあって、勘がいい。眼が高い。偉い。君があまり、竹さんに熱を上げるので、寝込まれたりしても困ると思つて、その後、竹さんに就いての御報告を控えめにしていたが、そんな心配は全然不要だという事が、けさ、はつきりわかった。

竹さんを、どんなに好いても、竹さんはその人を寝
込ませたり墮落させたりなんかしない人だ。どうか、
竹さんを、もつと、うんと好いてくれ。僕も、君に負
けずに竹さんを、もつとうんと信頼するつもりだ。そ
れにつけても、マア坊は馬鹿な女だねえ。竹さんとは
まるで逆だ。全くお説の通り、映画女優の出来損いそ
のものであった。きのう、あれから、マア坊が夜の八
時の摩擦に、自分の番でも無いのに「桜の間」にやつ
て来て、あの、お昼の事などはきれいに忘れてしまつ
たように、固パンや、かっぱれを相手にきやあきやあ
騒ぎ、そのとき、僕の摩擦は竹さんであったが、竹さ

んはれいの通り、無言でシャツシャツとあざやかな手つきで摩擦して、マア坊たちのつまらぬ冗談にも時々につこり笑い、マア坊がつかつかと僕たちの傍へやつて来て、

「竹さん、手伝いしましょうか。」と乱暴な、ふざけた口調で言つても、

「おおきに、」と軽く会釈えしやくして、「すぐ、すみませう。」と澄まして答える。

僕は、こんな具合に落ちついて、しゃんとしている竹さんを好きなのである。僕に下手な好意を示したりする時の竹さんは、ぶぎまで、見られたものでない。マア坊が、くるりと廻れ右してまた固^{まわ}パンのほうへ行つた時、僕は、

「マア坊つて、きぎぎな人だね。」と小声で竹さんに言つた。

「忬^{しん}は、いい子や。」と竹さんは、いつくしむような口調で、ぽつんと答えた。

やはり竹さんはマア坊より、人間としての格が上かな？ とその時ひそかに思った。竹さんは、さつさと

摩擦をすませて、金盥をかかえ、隣りの「白鳥の間」へ摩擦の応援に出かけて、そのあとへ、マア坊がにやにや笑つてまたもや僕のベッドを訪れ、小さい声で、

「竹さんに、何か言つた。たしかに言つた。あたしは、知つてる。」

「きざな子だつて言つたんだ。」

「意地わる！ どうせ、そうよ。」案外、怒らぬ。「ね、あれ、持つてる？」両手の指で四角の形を作つて見せる。

「ケースかい？」

「うん。どこに、しまつてあるの？」

「そのへんの引出しだ。返してもいいぜ。」

「あら、いやだわ。一生、持っててね。お邪魔でしよ
うけど。」妙に、しんみり言つて、それから、いきなり
大声で、「やっぱり、ひばりの所から一ばんお月まさ
がよく見える。かつぽれさん、ちよつと来て！　ここで
並んでお月さまを拝もうよ。明月や、なんて俳句をよ
もうよ。いかが？」

どうも、さわがしい。

その夜は、そんな事で、格別の異変も無く寝に就い
たが、夜明けちかく、ふと眼がさめた。廊下の残置燈さんちとう
の光で部屋はぼんやり明るい。枕元の時計を見ると、

五時すこし前だった。外は、まだ、まっくらのようだ。窓から誰かが見ている。マア坊！ とすぐ頭にひらめいた。白い顔だ。たしかに笑つて、すつと消えた。僕は起きてカアテンをはねのけて見たが、何も無い。へんてこな気持だった。寝呆ねぼけたのかしら。いくらマア坊が滅茶めっちゃな女だつて、まさか、こんな時間に。僕も案外、ロマンチストだ、と苦笑してベッドにもぐつたが、どうにも気になる。しばらくして、遠くの洗面所のほうから、しゃっしゃっというお洗濯せんたくでもしているような水の音が幽かすかに聞えて来た。

あれだ！ と思った。どういう理由でそう思ったの

か、わからない。さつき笑って消えた人は、あれだ。たしかに、あそこに、いま、いるのだ。そう思うと、我慢が出来なくなつて、そつと起きて、足音を忍ばせて廊下に出た。

洗面所には、青いはだかの電球が一つ灯ともっている。のぞいて見ると、緋かすりの着物に白いエプロンをかけて、丸くしやがみ込んで、竹さんが、洗面所の床板を拭ふいていた。手拭てぬぐいをあねさんかぶりにして、大島のアンコに似ていた。振りかえつて僕を見て、それでも黙つて床板を拭ふいている。顔がひどく瘦やせ細こつて見えた。道場の人たちは悉ことごとく、まだ、しずかに眠っている。竹

さんは、いつもこんな早く起きて掃除をはじめているのであろうか。僕は、うまく口がきけず、ただ胸をわくわくさせて竹さんの拭き掃除の姿を見ていた。白状するが、僕はこの時、生れてはじめての、おそろしい慾望に懊惱おうれうした。夜の明ける直前のまっくら闇やみには、何かただならぬ心配がうごめいているものだ。

8

どうも、洗面所は、僕には鬼門である。

「竹さん、さつき、」声が咽喉のどにひっからまる。喘あえぎ喘

ぎ言つた。「庭へ出た？」

「いいえ、」振り向いて僕を見て、少し笑い、「ぼんぼん、なにを寝呆けて言つてんのや。ああ、いやらし。

裸足はだしやないか。」

気がついてみると、いかにも僕は、はだしであった。あんまり興奮してやつて来たので、草履をはくのを忘れていた。

「気のもめる子やな。足、お拭き。」

竹さんは立ち上り、流しで雑巾ぞうきんをじゃぶじゃぶ洗い、

それからその雑巾を持って僕の傍そばへ来てしやがんで、僕の右の足裏も、左の足裏も、きゅつきゅと強くこす

るようにして拭いてくれた。足だけでなく、僕の心の奥の隅すみまで綺麗きれいになったような気がした。あの奇妙な、おそろしい慾望も消えていた。僕は、足を拭いてもらいながら竹さんの肩に手を置いて、

「竹さん、これからも、甘えさせてや。」とわざと竹さんみみたいな関西訛なまりで言ってみた。

「お淋さびしいやろなあ。」と竹さんは少しも笑わず、ひとりごとのように小声で言つて、「さ、これ貸したげるさかいな、早く御不浄へ行つて来て、おやすみ。」

竹さんは自分のはいているスリッパを脱いで僕のほうにそろえて差し出した。

「ありがとう。」平気なふうを装ってスリッパをはき、
「僕は寝呆けたのかしら。」

「御不浄に起きたのと違うの？」竹さんは、またせつせと床板の拭き掃除をはじめて、おとなびた口調で言つた。

「そうなんだけど。」

まさか、窓の外に女の顔が見えた、なんて馬鹿らしい事は言えない。自分の心が濁っていたから、あんな幻影も見えたのだろう。いやらしい空想に胸をおどらせて、はだしで廊下へ飛び出して来た自分の姿を、あさましく、恥かしく思った。毎日こんな真暗い頃ころに起

きて余念なく黙々と拭き掃除している人もあるのに。

僕は、壁によりかかって、なおもしばらく竹さんの働く姿を眺めて、つくづく人生の厳肅を知らされた。健康とは、こんな姿のものであろうと思った。竹さんのおかげで、僕の胸底の純粹の玉が、さらに爽さわやかに透明なものになったような気がした。

君、正直な人っていいものだね。単純な人って、尊いものだね。僕はいままで、竹さんの気のよさを少し軽蔑けいべつしていたが、あれは間違いだった。さすがに君は眼が高い。とても、マア坊なんかとは較くらべものにも何も、なるもんじゃない。竹さんの愛情は、人を墮落さ

せない。これは、たいしたものだ。僕もあんな、正しい愛情の人になるつもりだ。僕は一日一日高く飛ぶ。周囲の空気が次第に冷く澄んで来る。

男児ひっせい畢生危機一髪とやら。あたらしい男は、つねに危所に遊んで、そうして身軽く、くぐり抜け、すり抜けて飛んで行く。

こうして考えてみると、秋もまた、わるくないようだ。少し肌寒はださむくて、いい気持。

マア坊の夢は悪い夢で、早く忘れてしまいたいが、竹さんの夢は、もしこれが夢であつたら、永遠とこに醒さめずさにいてくれるといい。

のろけなんかじゃあ、ないんだよ。

十月七日

固パン

1

拝啓。ひどい嵐あらしだったね。野分のわきというものなのかしら。これでは、アメリカの進駐軍もおどろいているだろう。E市にも、四、五百人來ているそうだが、ま

だこの辺には、いちども現われないようだ。矢鱈やたらにお
びえて、もの笑いになるな、と場長からの訓辞もあつ
たし、この道場の人たちは、割合いに泰然としている。
ただひとり、助手のキントトさんだけ、ちよつとしよ
んぼりしていて、皆にからかわれている。キントトさ
んは、二、三日前、雨の中を用事でE市に行つて来た
そうだが、道場へ帰つて夜、皆と一緒に就寝してから、
シクシク泣いた。どうしたの？ どうしたの？ と皆
にたずねられて、キントトさんのしやくり上げながら
物語るのを聞けば、おおよそ次の如き事情ごとであつたと
いう。

キントトさんは、まちで用事をすまして、帰りのバスを待合所で待っていたら、どしや降りの中を、アメリカの空のトラックが走って来て、そうしてどうやら故障を起したらしく、バスの待合所のちょうど前でとまり、運転台から子供のような若いアメリカ兵が二人飛び降り、雨に打たれながら修理にとりかかって、なかなか修理がすまぬ様子で、濡鼠ぬれねずみの姿でいつまでも黙々と機械をいじくり、やがて、キントトさんたちのバスがやって来たが、キントトさんは待合所から走り出て、バスに乗りかけ、その時まるで夢中で、自分の風呂敷包ふろしきの中の梨なしを一つずつそのアメリカの少年たち

に与え、サンキュウという声を背後に聞いてバスの奥に駆け込んだとたんに発車。それだけの事であったが、道場へ帰り着き、次第に落ちついて来ると共に、何とも言えずおそろしく、心配で心配でたまらなくなり、ついに夜、蒲団ふとんを頭からかぶってひとりでめそめそ泣き出すに到いたつたのだというのである。このニュウスはもうその翌朝、早くも道場全体にひろがり、無理もないと言う者もあり、けしからぬという者もあり、わけがわからんと言う者もあり、とにかくみんな大笑いであつた。キントトさんは、からかわれても、にこりともせず、首を振って、まだ胸がどきどきすると言つて

いる。

それと、もうひとり、同室の固パンさんが、このごろひどく浮かぬ顔をしている。何か煩悶はんもんの様子に見受けられたが、果して彼にもまた一種奇妙な苦労があったのである。

いったいこの固パンという人物は、秘密主義というのか、もつたい振っているというのか、僕たちをてんで相手にせず、いつまでも他人行儀で、はなはだ気づまりな存在であったが、おとといの夜、あのような嵐で、七時少し過ぎた頃ころから停電になって、そのために夜の摩擦も無かったし、また拡声機も停電のため休み

になって、夜の報道も聞かれなかったから、塾生たちは、みんな早寝という事になったのである。けれども、風の音がひどいので、誰も眠られず、かつぽれば小声で歌をうたうし、越後獅子えちごじしは、自分のベッドの引出しから蠟燭ろうそくを捜し出して、それに点火して枕元まくらもとに立て、ベッドの上に大あぐらをかいて自分のスリッパの修繕に一生懸命である。

「ひどい風ですね。」

と、固パンが、妙に笑いながら私たちのほうへやって来た。固パンが、他人のベッドのところへ遊びに来るなんて、実に珍らしい事であった。

蛾^がが燈火を慕つて飛んで来るように、人間もまた、こんな嵐の夜には、蠟燭の貧しげな光でもなつかしく、吸い寄せられて来るのかも知れない、と僕は思った。

「ええ、」僕は上半身を起して彼を迎え、「進駐軍も、この嵐には、おどろいているでしょう。」と言った。

彼はいよいよ妙に笑い、

「いや、なに、それがねえ、」と少しおどけたような口調で言い、「問題はその進駐軍なんです。とにかく君、

これを読んでみて下さい。」そうして、僕に一枚の便箋^{びんせん}を手渡した。

便箋には英語が一ぱい書かれている。

「英語は僕、読めません。」と僕は顔を赤くして言った。「読めますよ。君たちくらいの中学校から出たての年頃が一ばん英語を覚えているものです。僕たちはもう、忘れてしまいました。」にやにや笑いながら言つて、僕のベッドの端に腰をおろし、僕にだけ聞えるように急に声を低くして、「実はね、これは僕の書いた英文なんです。きつと文法の間違いがあるだろうから、君に直してもらいたいです。読めばわかるだろうが、どう

もこの道場の人たちは、僕をよつぽど英語の達人だと
買いかぶっているらしく、いまにこの道場へアメリカ
の兵隊が来たら、或いは僕を通訳としてひっぱり出す
かも知れないんだ。その時の事を思うと、僕は心配で
仕様がな^いんですよ。察してくれたまえ。」と言つて、
てれ隠しみたい^にうふふと笑つた。

「だつて、あなたは本当に英語がよくお出来になるよ
うじゃありませんか。」と僕は、便箋をぼんやり眺めな
がら言つた。

「冗談じゃない。とてもそんな通訳なんて出来やしな
いよ。どうも僕は少し調子に乗つて、助手たちに英語

の披露ひろうをしすぎたんだ。これで通訳なんかひっぱり出されて、僕がへどもどまごついているところを見られたら、あの助手たちが、どんなに僕を軽蔑けいべつするか、わかりやしない。どうも、こんなに弱つた事は無い。このごろ、それが心配で、夜もよく眠られぬくらいなんだ。御賢察にまかせるよ。」と言って、また、うふふと笑つた。

僕は便箋の英文を読んで見た。ところどころ僕の知らない単語などがあつたが、だいたい次のような意味の英文であつた。

君、怒り給たまウコト勿なかレ。コノ失礼ヲ許シ給工。我輩

ハアワレナ男デアル。ナゼナラバ、我輩ハ英語ニ於オイ
テ、聞キトルコトモ、言ウコトモ、ソノホカノコトモ、
スベテ赤あかご子ごノ如ごとキデアル。ソレラノ行為ハ、我輩ノ能
カノハルカ、カナタニ横タワツテイルノデアル。ノミ
ナラズ、カツマタ、我輩ハ肺病デアル。君、注意セヨ！
アア、危イ！ 君ニ伝染ノ可能性スコブル多大デアル。
シカシナガラ、我輩ハ君ヲ深く信みジル。神ノ御名みなニ於
イテ、君ハ非常ニ気品高キ紳士デアルコトヲ認メル。
君ハ必ズコノアワレナ男ニ同情ヲ持ツデアロウコトヲ
我輩ハ疑ワナイノデアル。我輩ハ英語ノ会話ニ於イテ、
ホトンド不具者ぶぐしやデアルガ、カノウジテ、読ム事ト書ク

事が出来ル。モシ、君ガ充分ノ親切心ト忍耐力トヲ保有シテイルナラバ、君ノ今日ノ用事ヲコノ紙片ニ書キシタタメテ欲シイ。シカシテ、一時間ノ忍耐ヲ示シテ欲シイ。我輩ハソノ期間ニ、我輩自身ヲ我輩ノ私室ニ密閉シ、君ノ文章ヲ研究シ、シカシテ、我輩ノ答ヲ、我輩ノ能力ノ最大ヲ致シテ書キシタタメルデアロウ。君ノ健康ヲ熱烈ニ祈ル。我輩ノ貧弱ニシテ醜悪ナル文章ヲ決シテ怒リ給ウナ。

つくしのあの奇怪にして不可解な手紙に較べて、このほうは流石さすがにちゃんど筋道がとおっている。けれども僕は、読みながら可笑おかしくて仕様が無かった。固パ
ン氏が、通訳として引っぱり出される事をどんなに恐怖し、また、れいみえの見栄坊ほうの氣持から、もし万一ひっぱり出されても、何とかして恥をかかずにすまして、助手さんたちの期待を裏切らぬようにしたいと苦心さんたん慘憺たんして、さまざま工夫をこらしている様さまが、その英文に依よつても、充分に、推察できるのである。

「まるでもうこれは、重大な外交文書みたいですね。堂々たるものです。」と僕は、笑いを嚙かみ殺して言った。

「ひやかしちやいけません。」と固パンは苦笑して僕からその便箋をひったくり、「どこか、ミステークがなかったですか？」

「いいえ、とてもわかり易い文章で、こんなのを名文というんじゃないでしょうか。」

「迷うほうのメイブンでしょうか？」と、つまらぬ洒落しゃれを言い、それでも、ほめられて悪い気はしないらしく、ちよつと得意げな、もつともらしい顔つきになり、「通訳となると、やはり責任がね、重くなりますから、僕は、それはごめんこうむって筆談にしようと思ってるんですよ。どうも僕は英語の知識をひけらかしすぎ

たので、或いは、通訳として引っぱり出されるかも知れないんです。いまさら逃げかくれも出来ず、やつかないな事になっちゃいましたよ。」と、いやにシンミリした口調で言つて、わざとらしい小さい溜息ためいきを吐ついた。

人に依つていろいろな心配もあるものだと言は感心した。

嵐のせいであろうか、或いは、貧しいともしびのせいであろうか、その夜は私たち同室の者四人が、越後獅子の蠟燭の火を中心にして集り、久し振りで打解けた話を交した。

「自由主義者つてのは、あれは、いったい何ですか

ね？」と、かつぽれは如何いかなる理由からか、ひどく声をひそめて尋ねる。

「フランスでは、」と固パンは英語のほうでこりたからであろうか、こんどはフランスの方面の知識を披露する。「リベルタンつてやつがあつて、これがまあ自由思想を謳歌おうかしてずいぶんあばれ廻つたものです。十七世紀と言いますから、いまから三百年ほど前の事ですがね。」と、眉まゆをはね上げてもったいぶる。「こいつらは主として宗教の自由を叫んで、あばれていたらしいです。」

「なんだ、あばれんぼうか。」とかつぽれは案外だとい

うような顔で言う。

「ええ、まあ、そんなものです。たいていは、無頼漢ぶらいかんみたいな生活をしていたのです。芝居なんかで有名なあの、鼻の大きいシラノ、ね、あの人なんかも当時のリベルタンのひとりだと言えるでしょう。時の権力に反抗して、弱きを助ける。当時のフランスの詩人なんてのも、たいていもうそんなものだったのでしよう。日本の江戸時代の男伊達おとこただてとかいうものに、ちよつと似ているところがあつたようです。」

「なんて事だい、」とかつぽれば噴き出して、「それじゃあ、幡随院ばんずいいんの長兵衛ちやうべえなんかも自由主義者だつたわけで

すかねえ。」

4

しかし、固パンはにこりともせず、

「そりや、そう言つてもかまわないと思います。もつとも、いまの自由主義者というのは、タイプが少し違つているようですが、フランスの十七世紀の頃のリベルタンつてやつは、まあたいていそんなものだったのです。花川戸はなかわどの助六すけろくも鼠小僧ねずみこぞう次郎じろきち吉も、或いはそうだったのかも知れませんか。」

「へええ、そんなわけの事になりますかねえ。」とかつ
ぽれば、大喜びである。

越後獅子も、スリツパの破れを縫いながら、にやり
と笑う。

「いつたいこの自由思想というのは、」と固パンはい
よいよまじめに、「その本来の姿は、反抗精神です。破
壊思想といっていいかも知れない。压制や束縛が取り
のぞかれたところにはじめて芽生える思想ではなくて、
压制や束縛のリアクションとしてそれらと同時に発生
し闘争すべき性質の思想です。よく挙げられる例です
けれども、鳩はとが或る日、神様をお願いした、『私が飛ぶ

時、どうも空気というものが邪魔になって早く前方に
進行できない、どうか空気というものを無くして欲し
い』神様はその願いを聞き容れてやった。然るに鳩は、
いくらはばたいても飛び上る事が出来なかつた。つま
りこの鳩が自由思想です。空気の抵抗があつてはじめ
て鳩が飛び上る事が出来るのです。闘争の対象の無い
自由思想は、まるでそれこそ真空管の中ではばたいて
いる鳩のようなもので、全く飛翔ひしょうが出来ません。」
「似たような名前の男がいるじゃないか。」と越後獅
子はスリッパを縫う手を休めて言った。

「あ、」と固パンは頭のうしろを搔かき、「そんな意味で

言ったのではありません。これは、カントの例証です。僕は、現代の日本の政治界の事はちつとも知らないのです。」

「しかし、多少は知っていなくちやいけないね。これから、若い人みんなに選挙権も被選挙権も与えられるそうだから。」と越後は、一座の長老らしく落ちつき払った態度で言い、「自由思想の内容は、その時、その時で全く違うものだと言つていいだろう。真理を追及して闘つた天才たちは、ことごとく自由思想家だと言える。わしなんかは、自由思想の本来本元は、キリストだとさえ考えている。思い煩わづらうな、空飛ぶ鳥を見よ、

播かず、刈らず、蔵に収めず、なんてのは素晴らしい自由思想じゃないか。わしは西洋の思想は、すべてキリストの精神を基底にして、或いはそれを敷衍ふえんし、或いはそれを卑近にし、或いはそれを懷疑し、人さまざまの諸説があつても結局、聖書一卷にむすびついていると思う。科学でさえ、それと無関係ではないのだ。科学の基礎をなすものは、物理界に於いても、化学界に於いても、すべて仮説だ。肉眼で見とどける事の出来ない仮説から出発している。この仮説を信仰するところから、すべての科学が発生するのだ。日本人は、西洋の哲学、科学を研究するよりさきに、まず聖書一

巻の研究をしなければならぬ筈だったのだ。わしは別に、クリスチャンではないが、しかし日本が聖書の研究もせず、ただやたらに西洋文明の表面だけを勉強したところに、日本の大敗北の真因があったと思う。自由思想でも何でも、キリストの精神を知らなくては、半分も理解できない。」

それから、みんな、しばらく、黙っていた。かつぱれまで、思案深げな顔をして、無言で首を振ったり何

かしている。

「それからまた、自由思想の内容は、時々刻々に変るといふ例にこんなのがある。」と越後獅子は、その夜は、ばかに雄弁だった。どこやら崇高な、隠者とでもいうような趣きさえあつた。実際、かなりの人物なのかも知れない。からださえ丈夫なら、いまごろは国家のためにも相当重要な仕事が出来る人なのかも知れないと僕はひそかに考えた。「むかし支那しなに、ひとりの自由思想家があつて、時の政權に反対して憤然、山奥へ隠れた。時われに利あらずというわけだ。そうして彼は、それを自身の敗北だとは気がつかなかつた。彼には一

ふりの名刀がある。時来とききたらば、この名刀でもって政敵を刺さん、とかなりの自信さえ持つて山に隠れていた。十年た経つて、世の中が変つた。時来れりと山から降りて、人々に彼の自由思想を説いたが、それはもう陳腐な便乗思想だけのものでしか無かつた。彼は最後に名刀を抜いて民衆に自身の意気を示さんとした。かなしい哉かな、すでに錆びさびていたという話がある。十年一日の如ごとき、不変の政治思想などは迷夢に過ぎないという意味だ。日本の明治以来の自由思想も、はじめは幕府に反抗し、それから藩閥を糾弾し、次に官僚を攻撃している。君子は豹変ひょうへんするといふ孔子こうしの言葉も、こんな

ところを言っているのではないかと思う。支那に於いて、君子というのは、日本に於ける酒も煙草もやらぬ堅人かたじんなどを指さしているのと違って、六芸りくげいに通じた天才を意味しているらしい。天才的な手腕家といってもいいだろう。これが、やはり豹変するのだ。美しい變化を示すのだ。醜い裏切りとは違う。キリストも、いつさい誓うな、と言っている。明日の事を思うな、とも言っている。実に、自由思想家の大先輩ではないか。狐きつねには穴あり、鳥には巢あり、されど人の子には枕まくらするところ無し、とはまた、自由思想家の嘆きとあっていいだろう。一日も安住をゆるされぬ。その

主張は、日々にあらたに、また日にあらたでなければならぬ。日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を攻撃したって、それはもう自由思想ではない。便乗思想である。真の自由思想家なら、いまこそ何を置いても叫ばなければならぬ事がある。」

「な、なんですか？ 何を叫んだらいいのです。」かっぽらは、あわてふためいて質問した。

「わかっているじゃないか。」と言って、越後獅子はきちんと正坐^{せいざ}し、「天皇陛下万歳！ この叫びだ。昨日までは古かった。しかし、今日に於いては最も新しい自由思想だ。十年前の自由と、今日の自由とその内容

が違ふとはこの事だ。それはもはや、神秘主義ではない。人間の本然の愛だ。今日の真の自由思想家は、この叫びのもとに死すべきだ。アメリカは自由の国だと聞いている。必ずや、日本のこの自由の叫びを認めてくれるに違いない。わしがいま病気で無かつたらなあ、いまこそ二重橋の前に立つて、天皇陛下万歳！ を叫びたい。」

固パンは眼鏡をはずした。泣いているのだ。僕はこの嵐の一夜で、すっかり固パンを好きになつてしまつた。男つて、いいものだねえ。マア坊だの、竹さんだの、てんで問題にも何もなりやしない。以上、嵐の燈

火と題する道場便り。失敬。

十月十四日

口紅

1

御返事をありがとう。先日あらしの「嵐の夜の会談」に就いての僕の手紙が、たいへん君の御気に召したようである。君の御意見に依よれば、うれしいと思っている。

越後獅子こそ、当代まれに見る大政治家で、或いは有名な偉い先生なのかも知れないという事であるが、しかし、僕にはそのようには思われない。いまはかえつて、このような巷間無名の民衆たちが、正論を吐いている時代である。指導者たちは、ただ泡を食つて右往左往しているばかりだ。いつまでもこんな具合では、いまに民衆たちから置き去りにされるのは明かだ。総選挙も近く行われるらしいが、へんな演説ばかりしていると、民衆はいよいよ代議士というものを馬鹿にするだけの結果になるだろう。

選挙と言えば、きょうこの道場に於いて、とても珍

妙な事件が起つた。きょうのお昼すぎ、お隣りの「白鳥の間」から、次のような回覧板が発行せられた。曰いわく、婦人に参政権を与えられたるは慶賀に堪えざるも、このごろの当道場に於ける助手たちの厚化粧は見るに忍びざるものあり、かくては、参政権も泣きます、そくぶん仄聞するに、アメリカ進駐軍も、口紅毒々しき婦人を以てプロステチュウトと誤断すもつという、まさに、さもあるべし、これはひとり当道場の不名誉たるのみならず、ひいては日本婦人全体の恥辱なり云々うんぬんとあつて、それから、お化粧の目立ちすぎる助手さんの綽名あだなが洩もれなく列記されてあり、「右六名のうち、孔雀くじゃくの扮装ふんそうは

最も醜怪なり。馬肉をくらいたる孫悟空そんごくうの如しごと。われらしばしば忠告を試みたるも、更に反省の色なし。よろしく当道場より追放すべし。」と書添えられていた。

お隣りの「白鳥の間」には、前から硬骨漢がそろつていて、助手さんたちに人気のある固パンさんなどは、その「白鳥の間」にいたたまらなくなつて、こちらの「桜の間」に逃げて来たような按配あんばいでもあつたのだ。「桜の間」は、越後獅子の人徳のおかげか、まあ、春風駘蕩しゅんぷんたいとうの部屋である。こんどの回覧板も、これはひどい、とまず、かつぽれが不承知とくなを称えた。固パンも、にやりと笑つて、かつぽれを支持した。

「ひどいじゃありませんか。」とかっぱれば、越後獅子にも賛意を求めた。「人間は、一視同仁ですからね、追放しなくたっていいと思いますがね。人間の本然の愛というものは、どんな場合にだつて忘れられるわけのものじゃないんだ。」

越後獅子は黙つて幽かすかに首肯うなずいた。

かっぱれば、それに勢いを得て、

「ね、そういうわけのものでしよう？ 自由思想つてのは、そんなケチなものである筈はずのわけが無いんだ。そちらの若先生はどうです。私の論は間違つてはいないと思うんだ。」と僕にも同意をうながした。

「でも、お隣りの人たちだって、まさか、本当に追放しようとは思ってないんでしょう？　ただ、あの人たちの心意気のほどを皆に示そうとしているんじゃないのかな。」と僕が笑いながら言ったら、

「いや、そんなんじゃない。」とかっぱれば言下に否定して、「どだい、婦人参政権と口紅との間には、致命的な矛盾があるべきわけのものではないと思うんだ。あいつらは、ふだん女にもてねえもんだから、こんな時に、仕返しを仕様とたくらんでいるのに違いない。」と喝破かっぱした。

そうして、それから、れいの一ばんいいところを言
い出し、

「世に大勇と小勇あり、ですからね、あいつらは、小
勇というわけのものなんだ。おれの事を、パイパンと
言っていやがるんです。かねがね癩しやくにさわっていた
んだ。かっぱれという綽名だつて、おれはあんまり好
きじゃねえのだが、パイパンと言われちゃ、黙つて居
られねえ。」あらぬ事で激昂げっこうして、ベッドから降りて帯
をしめ直し、「おれは、この回覧板をたたきかえして来

る。自由思想は江戸時代からあるんだ。人間、智仁勇が忘れられないとはこここのところだ。じゃ皆さん、私にまかせてくれますね。私はこれを叩きかえして来るつもりですからね。」顔色が変わっている。

「待った、待った。」越後獅子はタオルで鼻の頭を拭きながら言った。「あんたが行つちやいけない。ここは、そちらの先生にでもまかせなさい。」

「ひばりに、ですか？」かっぱは大きいに不満の様子である。「失礼ながら、ひばりには荷が重すぎますぞ。お隣りの奴らとは、前々からの行きがかりもあるんだ。今にはじまった事じゃねえのです。パイパンと言われ

て、黙って引つこんで居られるわけのものじゃないんだ。自由と束縛、というわけのものなんだ。自由と束縛、君子豹変くんしひょうへんということにもなるんだ。あいつらには、キリストの精神がまるでわかつてやしねえ。場合に依つては、おれの腕の立つところを見せてやらなくちやいけねえのだ。ひばりには、無理ですぜ。」

「僕が行つて来ます。」僕はベッドから降りて、するりとかつぽれの前を通り抜け、同時に、かつぽれから回覧板を取り上げて、部屋を出た。

「白鳥の間」では、「桜の間」の返事を待ちかねていた様子であった。僕がはいって行ったら、八人の塾生じゅくせい

がみんなどやどやと寄って来て、

「どうだい、痛快な提案だろうか？」

「桜の間の色男たちは弱つたろう。」

「まさか、裏切りやしないだろうな。」

「塾生みんな結束して、場長に孔雀の追放を要求するんだ。あんな孫悟空に、選挙権なんかもつたいない。」などと、口々に言つて、ひどくはしやいでいる。みんな無邪気な、いたずらつ児このように見えた。

「僕にやらせてくれませんか。」と僕は誰だれよりも大きい声を出してそう言った。

一時、ひっそりしたが、すぐにまた騒ぎ出した。

「出しゃばるな、出しゃばるな。」

「ひばりは、妥協の使者か。」

「桜の間は緊張が足りないぞ。いまは日本が大事な時だぞ。」

「四等国に落ちたのも知らないで、べっぴんの顔を拝んでよだれを流しているんじゃないやねえか。」

「なんだい、出し抜けに、何をやらせてくれと言うんだい。」

「今晚、就寝の時間までに、」と僕は、背伸びして叫んだ。「お知らせしますから、もしその僕の処置がみなさんの気に入らなかったら、その時には、みなさんの

提案にしたがいます。」

又ひっそりとなった。

3

「君は、僕たちの提案に反対なのか。」と、しばらくして、青大将という眼めつきの凄すじい三十男が僕に尋ねた。

「大賛成です。それに就いて僕に、とつても面白おもしろい計画があるんです。それを、やらせて下さい。お願いします。」

みんな少し、気抜けがしたようだった。

「よろしいですね。ありがとうございます。この回覧板は、晩までお借り致します。」僕は素早く部屋を出た。これでもいいのだ。むずかしい事は無いんだ。あとは竹さんにしたのめばいい。

部屋へ帰って来たら、かつぽれは、

「だめだなあ、ひばりは。おれは、廊下へ出て聞いていたんだ。あんな事じゃ、なんにもならんじゃねえか。キリスト精神と君子豹変のわけでも、どんと一発言つてやればよかったんだ。自由と束縛！　と言つてやつてもいいんだ。やつら、道理を知らねえのだから、すじみちの立った事を言つてやるのが一ばんなのだ。自

由思想は空気と鳩はとだ、となぜ言つてやらねえのかな。」
としきりに口惜くやしがつていた。

「晩まで僕に、まかせて置いて下さい。」とだけ言つて
僕は、自分のベッドに寝ころがった。

さすがに少し疲れたのである。

「まかせろ、まかせろ。」と越後が寝たまま威厳のある
声で言つたので、かつぽれもそれ以上は言わずに、し
ぶしぶ寝てしまった様子である。

僕には別に、計画なんか無いんだ。ただ、この回覧
板を竹さんに見せると、竹さんは、いいようにしてく
れるだろうと樂觀していたのである。二時の屈伸鍛錬

のときに、竹さんが部屋の前の廊下を通って、ちよつと僕の方を見たので、僕はすかさず右手で小さく、おいでおいでをした。竹さんは軽く首肯うなずいて、すぐに部屋へはいつて来た。

「何か御用？」と真面目まじめに尋ねる。

僕は脚の運動をしながら、

「枕元まくらもと、枕元。」と小声で言った。

竹さんは枕元の回覧板を見て、手に取り上げ、ざつと黙読してから、

「これ、貸してや。」と落ちついた口調で言つてその回覧板を小脇こわきにはさんだ。

「あやまちを改むるに、はばかり事なかれだ。早いほうがいい。」

竹さんは何もかも心得顔に、幽かに首肯き、それから枕元の窓のほうに行つて、黙つて窓の外の景色を眺めていた様子である。

しばらくして、窓の外に向い、

「源さん、御苦労さまやなあ。」と少しも飾らぬ自然の口調で呟いた。窓の下で、小使いの源さんという老人が、二、三日前から草むしりをはじめているのだ。

「お盆すぎにな、」と源さんは窓の下で答える。「いちどむしつたのに、またこのように生えて来る。」

僕は、竹さんの「御苦勞さまやなあ」という声の響きに唸^{うな}るほど、感心していた。回覧板の事など、ちつとも気にしていないらしい落ちついた晴朗の態度にも感心したが、それよりも、あのいたわりの声の響きの気品に打たれた。御大家のお内儀が、庭番のじいやに、縁先から声をかけるみたいな、いかにも、のんびりしたゆとりのある調子なのである。非常に育ちのいいものを感じさせた。いつか越後も言っていたが、竹さんのお母さんは、よっぽど偉い人だったのに違いない。竹さんにまかせたら、この厚化粧の一件も、きつとあざやかに軽く解決せられるだろうと、僕はさらに大い

に安心した。

4

そうして僕のその信頼は、僕の予期以上に素晴らしく報いられた。四時の自然の時間に、突如、廊下の拡声機から、

「そのまま、そのままの位置で、気楽にお聞きねがいます。」という事務員の声が聞えて、「かねて問題になって居おりました助手さんのお化粧に就いて、ただいま助手さんたちから自発的に今日限りこれを改める由よを申

し出てまいりました。」

わあつ、という歓声が隣りの「白鳥の間」から聞えて来た。臨時放送は、さらに続いて、

「きょうの夕食後に、それぞれお化粧を洗い落とし、おそくとも今晚七時半の摩擦の時には、アメリカの人たちにへんな誤解をされない程度の簡素なよそおいで、塾生諸君にお目にかかるそうでございます。なお、次に、助手の牧田さんが、一言、塾生諸君におわび申し上げたいそうで、どうか牧田さんのこの純情を汲くんでやって下さい。」

牧田さんというのは、れいの孔雀だ。孔雀は、小さ

いせきばらいをして、

「私こと、」と言った。

お隣りの部屋から、どっと笑声が起った。僕たちの部屋でも、みんなにやにや笑っている。

「私こと、」こおろぎの鳴くような細い可憐かれんな声だ。

「時節も場所がらも、わきまえませず、また、最年長者でもありますのに、ふつつかにて、残念な事をいたしました。深くおわび申し上げます。今後、何とぞ、よろしくお導き下さいまし。」

「よし、よし。」という声が隣りの部屋から聞こえた。

「可哀かわいそうに。」とかっぽれば、しんみり言って僕のほ

うを横眼で見た。僕は、少しつらかった。

「最後に、」と事務の人が引きとり、「これは助手さんたち一同からのお願いであります。牧田さんの従来
の綽名は、即刻改正していただきたい、との事でございます。
います。きょうの臨時放送は、これだけです。」

「白鳥の間」から、すぐ回覧板が来た。

「一同満足せり。ひばりの労を多とす。孔雀は、私ごと、と改名すべし。」

かっぱれば、その綽名の提案にすぐ反対を表明した。「私ごと」という綽名をつけるのは、いかになんでも残酷すぎるといっているのである。

「むごいじゃねえか。あれでも一生懸命で言ったんだぜ。純情を汲み取ってくれて言われたじゃねえか。空飛ぶ鳥を見よ、というわけのものなんだ。一視同仁じゃねえか。人をのろわば穴二つというわけのものになるんだ。おれは絶対反対だ。孔雀がおしろいを落して黒い地肌じはだを見せるってわけのものだから、これは、カラスとでも改めたらいいんだ。」

このほうが、かえって辛辣しんらつで残酷だ。なんにもならない。

「孔雀が簡素になったんだから、孔雀の上の字を一つ省略して雀すずめとでもするさ。」越後はそう言って、うふ

ふと笑った。

雀も、すこし理に落ちて面白くないが、まあ長老の意見だし、回覧板に、「私こと」は酷に過ぎたり、「雀」など穏当ならん、と僕が書き込んで、かっぽれに持たせてやった。「白鳥の間」には、ほうぼうの部屋から綽名の提案が殺到していたそうであるが、結局、「私こと」に落ちつくかも知れない。どうも、あの時の孔雀の、小さいせきばらいを一つして、さて、「私こと」と言い出したところは、なんとも、よろしくて、忘れられないものだった。「私こと」以外の綽名は、色あせて感ぜられる。

七時の摩擦の時には、キントトと、マア坊と、カクランと、竹さんが、それぞれ金盥かなだらひをかかえて「桜の間」にやって来た。竹さんは、澄まして、まっすぐに僕のところに来た。キントトと、マア坊は、このたびのお化粧の注意人物として数え挙げられていたのであるが、その夜、僕たちの部屋へやって来た時の様子を見るに、髪かみの形などちよつと変わったようにも見えるが、しかしまだ何だかお化粧をしているようだ。

「マア坊は、まだ口紅をつけてるようじゃないか。」と僕は小声で竹さんに言ったら、竹さんは、シャツシャツと摩擦をはじめて、

「あれでも、ずいぶん、拭ふいたり洗ったりして大騒ぎや。いちどに改めろ言うても、それあ無理。若いのやさかい。」

「竹さんの働きは、大したものだね。」

「まえに、場長さんから、幾度となく御注意があつたんや。きよようの事務所からの放送を、場長さんもお聞きになって、いい御機嫌ごきげんやった。きよようの放送は誰の発案かね、とおっしゃるさかいな、ひばりの発明や、

とうちが申し上げたら、愉快な子ですなあ、ってな、あの笑わない場長さんが、にやにやつと笑い居った。」竹さんも、きょうの口紅事件では、さすがに少し興奮したのか、いつになくおしゃべりだ。

「僕の発明じゃあないよ。」軍功の帰趨きすうは分明にして置かなければならぬ。

「同じ事や。ひばりが言わなかったら、うちだつて、動きとうはない。すき好んで憎まれ役を買うひとなんてあるかいな。」

「憎まれたのかね。」

「ううん。」れいの特徴のある涼しい笑顔で首を振り、

「憎まれやしないけどな、うちは、つらかった。」

「孔雀の挨拶あいさつは、ちよつと僕も、つらかったよ。」

「うん。牧田さんな、あのひと自分から挨拶させてと申し込んで来たのや。悪気の無い、いいひとや。お化粧けしょうが下手らしいな。うちだつて、少しは口紅くちびるさしてんのやけど、わからんやろ？」

「なあんだ、同罪か。」

「わからんくらいなら、いいのや。」と平気な顔して、シャツシャツと摩擦をつづける。

女だなあ、と思った。そうして僕は、この道場へ来てはじめて、竹たけさんを、可愛かわいらしいと思った。大鯛おおだいだつ

て、ばかには出来ない。

どうだい、君。僕は、あらためて君に、当道場の訪問をすすめる。ここには、尊敬するに足る女性がひとりいる。これは、僕のものでもなければ、君のもでもない。これは、日本のいま世界に誇り得る唯一ゆい、いつの宝だ。なんていうと少し大袈裟おおげさなほめ方になってしまつて、われながら閉口だが、とにかく、色気無しに親愛の情を抱かせる若い女は少いものではあるまいか。君も、もう竹さんに対しては、色気なんてそんなものは持っていない筈である。親愛の気持だけだろうと思う。ここに、僕たち新しい男の勝利がある。男女の間の、

信頼と親愛だけの交友は、僕たちになければわからない。いわゆる所謂あたらしい男だけが味あじわい得るところの天与の美果である。この清潔の醍醐味だいごみが欲しかったら、若き詩人よ、すべからく当道場を御訪問あれ。

もつとも君は、既に、君の周囲に於いて、さらにすぐれた清潔の美果を味っているかも知れないが。

十月二十日

かしよう
花宵先生

昨日の御訪問、なんとも嬉しく存じました。その折には、また僕には花束。竹さんとマア坊には赤い小さな英語の辞典一冊ずつのお土産。いかにも詩人らしい、親切な思いつきで、殊にも、竹さんとマア坊にお土産を持つて来てくれたのは有難かつた。

あの人たちから僕は、シガレットケースと、それから竹細工の藤娘ふじむすめをもらつて、少し閉口だったけれども、でも、そのうちに何かお返しをしなければならぬのではあるまいかと、内心、ちよつと気になっていたとこ

ろへ、君が気をきかせてお土産を持って来てくれたので、ほっとしました。君には、僕よりもっと新しい一面があるようだ。僕はどうも、女のひとからものをもらったり、また、ものを贈ったりするのに、いささか、こだわりを感ずる。いやらしいと思うのだ。ところが、少し僕の古いところかも知れないね。君のように、てれずに、あつさり贈答できるように修行しよう。僕は君からまた一つものを教えられたような気がした。君の爽さわやかな美德を見たと思いました。

マア坊が「お客様ですよ」と言つて、君を部屋へ案内して来た時には、僕の胸が、内出血するほど、どき

んとした。わかってくれるだろうか。久しぶりに君の顔を見た喜びも大きかったが、それよりも、君とマア坊が、まるで旧知の間柄あいだがらのように、にこにこ笑って並んで歩いて来たのを見て、仰天したのだ。お伽噺とぎばなしのような気がした。これと似たような気持を、僕は去年の春にも、一度味わった。

去年の春、中学校を卒業と同時に肺炎を起し、高熱のためにうつらうつらして、ふと病床の枕元まくらもとを見ると、中学校の主任の木村先生とお母さんが笑いながら何か話合っている。あの時にも、僕は胆きもをつぶした。学校と家庭と、まるつきり違った遠い世界にわかれて住ん

でいるお二人が、僕の枕元で、お互い旧知の間柄みたいに話合っているのが実に不思議で、十和田湖とわだこで富士を見つけたみたいなの、ひどく混乱したお伽噺のような幸福感で胸が躍った。

「すっかり元気そうになったじゃないか。」と君が言うて、僕に花束を手渡して、僕がまごついていたら君は、マア坊に極めて自然の態度で、

「粗末な花瓶かびんで結構ですから、ひばりに貸してやって下さい。」と頼んで、マア坊は首肯うなずいて花瓶を取りに行つて、僕は、まあ、本当に夢のようだったよ。何がなんだか、わからなくなつて、

「マア坊を前から知ってるの？」と下手な質問さえ飛び出して、

「君の手紙で知ってるじゃないか。」

「そうか。」

と二人で大笑いしたっけね。

「マア坊だって事、すぐにわかった？」

「ひとめ見てわかった。予想より、ずっと感じがいい。」

「たとえば？」

「しつこいな。まだ気があるんだね。予想してたほど、下品じゃない。ほんの子供じゃないか。」

「そうかしら。」

「でも、わるくない。骨の細い感じだね。」

「そうかしら。」

僕は、いい気持だった。

2

マア坊が細長い白い花瓶を持って来た。

「ありがとう。」と君は受取り、無雑作に花を挿^さして、

「これは後で、竹さんにでも挿し直していただくんだな。」

と言つたが、あれは少し、まずかつたぜ。君がすぐにポケットから、れいの小さい辞典を取り出してマア坊にあげても、マア坊はそんなに嬉しそうな顔もせず、黙つて叮嚀ていねいにお辞儀をして、すたすた部屋を出て行つたが、あれはやつぱりマア坊が少し気を悪くした証拠だけ。マア坊は、あんな、よそよそしい叮嚀なお辞儀なんかするひとじゃないんだ。でも君には、竹さんの他ほかのひとは、てんで問題じゃないんだから仕様が無い。「お天気がいいから二階のバルコニーへ行つて、話そう。いまはお昼休みだから、かまわないんだ。」

「君の手紙でみんな知ってるよ。そのお昼休みの時間

をねらつて来たんだ。それに、きょうは日曜だから、慰安放送もあるし。」

笑いながら部屋を出て、階段を上つて、そのころから僕たちは、急に固くなつて、やたらに天下国家を論じ合つたのは、あれは、どういうわけなんだろう。尊いお方に僕たちの命はすでにおあずけしてあるのだし、僕たちは御言いつけのままに軽くどこへでも飛んで行く覚悟はちゃんと出来ていて、もう論じ合う事柄も何もない筈なのに、それでも互いに興奮して、所謂新日本再建の微衷を吐露し合ったが、男の子つて、どんな親しい間柄でも、久し振りで逢つた時には、あんな具

合に互いに高邁こうまいの事を述べ合つて、自分の進歩を相手にみとめさせたい焦躁しょうそうにかられるものなのかも知れないね。バルコニーに出てからも、君は、日本の初歩教育からして駄目だめなんだと怒り、

「小さい時にどんな教育を受けたかという事でもう、その人の一生涯いっしやうがいがきまつてしまうのだからね。もつと偉い大人物を配すべきだと思ふんだ。」

「そうだ。報酬ばかり考えているような人間では駄目だ。」

「そうとも、そうとも。功利性のごまかしで、うまく行く筈はないんだ。おとなの駄引きかけひは、もうたくさん

だ。」

「全くき。表面のハツタリなんて古いよ。見え透いてるじゃないか。」

君も、僕と同じくらいに議論は下手のようである。僕たちは、なんだか、同じ様な事ばかり繰り返し繰り返し言っていたようだったぜ。

そうして、そのうちに僕たちのその下手な議論もだんだん途切れがちになって来て、「単なる」とか「要するに」とか「とにかく」とか「結局」とかいう言葉ばかりたくさん飛び出て、だれてしまつて、その時、下の玄関の前の芝生にひよいと竹さんが現われた。僕は

思わず、

「竹さん！」と呼んだ。君は同時にズボンのバンドをしめ上げたね。あれは、どういう意味なんだい？ 竹さんは右手を額にあてて、バルコニーを見上げ、

「何や？」と言つて笑つたが、あの時の竹さんの姿態は悪くなかつたじゃないか。

「竹さんを、とても好きだと言つてる人が、いまここに來ているんだ。」

「よせ、よせ。」と君は言つた。実際、あんな時には、よせ、よせ、という間の抜けた言葉しか出ないものなんだ。僕にも経験がある。

「いやらし！」と竹さんが言ったね。それから首を四十五度以上も横に傾けて、君に向つて、「いらつしやいまし。」と笑いながら言つたら君は、顔を真赤にして、ぴよこんとお辞儀をしたね。それから君は不平そうに
小聲で、

「なんだ、すごい美人じゃないか。馬鹿ばかにしてやがる。君はまた、ただ大きくて堂々とした立派なひとだと手紙に書いてたもんだから、僕は安心してほめてたんだ

が、なあんだ、スゴチンじゃないか。」

「予想と違ったかね。」

「違った、違った、大違い。堂々として立派なんて言うから、馬みたいなひとかと思っていたら、なあんだ、あれは、すらりとしているとでも形容しなくちやいけない。色だって、そんなに黒くないじゃないか。あんな美人は、僕はいやだ。危険だ。」などと早口で言っているうちに竹さんは、軽く会釈えしやくして旧館のほうに行つてしまひそうになつたので、君はあわてて、

「ちよつと、君、ちよつと竹さんと呼びとめてくれ給たまえ。お土産があるんだ。」とポケットをさぐり、れいの

小型辞典を取り出した。

「竹さん！」と僕が大声で言って呼びとめたら、

「失礼ですけど、ほうりますよ。これは、ひばりから、たのまれたんです。僕からじゃありませんよ。」と君が、颯つと赤い表紙の可愛い辞典を投げてやったところなんかは、やっぱりあざやかなものだった。僕は、ひそかに君に敬服した。竹さんは、君の清潔な贈り物を上手に胸に受けとめて、

「おおきに。」と、君に向って、お礼を言ったね。君が何と言ったって、竹さんは、君からの贈り物だという事を知っているのだ。旧館のほうに歩いて行く竹さん

のうしろ姿を眺めながら、君は溜息をついて、

「危険だ、あれは危険だ。」とひどく真面目に呟くので、僕は可笑しかった。

「危険なものか。真暗い部屋にたった二人きりでいたって大丈夫なひとだよ。僕は、もう試験済みだ。」

「君は、とんちんかんだからねえ。」と僕をあわれむような口調で言つて、「君には美人、不美人の区別がわからないのじゃないか？」

僕は、むっとした。君こそ、なんにも、わからないくせに。竹さんが君に、そんなに美しく見えたとしたら、それは、竹さんの心の美しさが、君の素直な心に

反映したのだ。冷静に観察すると、竹さんなんか、ちつとも美人じゃない。マア坊のほうが、はるかに綺麗きれいだ。竹さんの品性の光が、竹さんを美しく見せているだけの話だ。女の容貌ようぼうに就いては、僕のほうが君より数等きびしい審美眼を具有しているつもりだがね。けれども、あの時、女の顔の事などで議論するのは、下品な事のように思われたから、僕は黙っていたのだ。どうも、竹さんの事になると、僕たちはむきになってしまつて、ちよつと気まづくなる傾向があるようだ。よろしくないね。本当に、君、僕を信じてくれ給え。竹さんは美人じゃないよ。危険な事なんか無いんだ。危険だ

なんて、可笑しいじゃないか。竹さんは、君と同じくらい、ただ生真面目きまじめな人なんだ。

僕たちは、しばらく黙ってバルコニーに立っていたが、ふいと君が、お隣りの越後獅子はおおつきかしよう大月花宵という有名な詩人だという事を言い出したので、竹さんの事も何も吹っ飛んでしまった。

4

「まさか。」僕は夢見るようであつた。

「どうも、そうらしい。さつき、ちらと見て、はっと

思つたんだ。僕の兄貴たちは皆あの人のファンで、それで僕も小さい時からあの人の顔は写真で見てもよく知っているんだ。僕もあの人の詩のファンだった。君だって、名前くらいは知っているだろう。」

「そりゃ、知っている。」

僕は、どうも詩というものは苦手だけれども、それでも、大月花宵の姫百合ひめゆりの詩や、鷗かもめの詩は、いまでも暗誦あんしょうできるくらいによく知っている。その詩の作者

と僕は、この数箇月ベッドを並べて寝ていたとは、にわかには信じられぬ事であった。僕には詩というものがちつともわからぬけれども、君も御存じのとおり、天

才の詩人というものを尊敬する事に於いては、敢えて
人後に落ちないつもりだ。

「あのひとが、ねえ。」しばらくは、感無量であった。
「いや、はつきりした事はわからんよ。」と君は少しう
ろたえて、「さつき、ちらと見ただけなんだから。」

とにかくそれでは、もつと、こまかに観察してみよ
うという事になり、そろそろ日曜慰安放送の時間もせ
まって来ていたし、僕たちは階下の「桜の間」に帰つ
た。越後は寝ていた。僕には、あの時ほど越後が立派
に見えた事は無い。それこそ、まさに、眠れる獅子の
ように見えた。僕たちは顔を見合せ、ひそかに首肯うなずき、

二人一緒に思わず深い溜息をついたっけね。緊張のあまり、僕たちは、話も何もろくに出来ず、窓を背にして立ったまま、ただ黙ってレコオドの放送を聞いていたっけ。番組が進んで、いよいよその日の呼び物の助手さんたちの二部合唱「オルレ안의少女」がはじまつた時、君は右肘みぎひじで僕の横腹を強く突いて、

「この歌は、花宵先生が作ったんだ。」とひどく興奮の態ていで囁ささやいてくれたが、そう言われて僕も思い出した。僕が子供の頃ころに、この歌は、花宵先生の傑作として、少年雑誌に挿画さしえ入りで紹介せられたりなどして、大はやりのものであった。僕たちは、ひそかに越後の表情

を注視した。越後はそれまでベッドの上に仰向けに寝て、軽く眼を閉じていたのだが、「オルレアンの少女」の合唱がはじまったら眼をひらいて、こころもち枕から頭をもたげるようにして耳を澄まし、やがてまたぐったりとなつて眼をつぶつて、ああ、眼をつぶつたまま、とても悲しそうに幽かすかに笑つた。君は、右手でこぶしを作つて空間を打つような、妙な仕草をして、それから僕に握手を求めた。僕たちは、ちつとも笑わずに、固く握手を交したつけね。いま思うと、あれはいったい何のための握手だったのか、わけがわからなけれども、あの時には、とてもじつとしては居られ

ず握手でもしなければ、おさまらぬ気持だったものね。君も僕も、ずいぶん興奮していた。「オルレアンの少女」が済んだ時、君は、

「じゃあ、失礼しよう。」と奇怪なしわが唖れた声で言い、僕も首肯いて、君を送って廊下へ出て、

「たしかだ！」と二人、同時に叫んだ。

5

ここまでの事は、君もご存じの筈だが、さて、君とわかれて、ひとりで部屋へ引返した時には、僕の気持

は興奮を通り越して、ほとんど蒼あおざめるほどの恐怖の
状態であつた。わざと越後を見ないようにして、僕は
ベッドに仰向けに寝ころがったが、不安と恐怖と焦躁
とが奇妙にいりまじつた落ちつかない気持で、どうに
も、かなわなくなつて、とうとう小さい声で、

「花宵先生！」と呼びかけてしまった。

返辞が無い。僕は、思い切つて、ぐいと花宵先生の
ほうに顔をねじ向けた。越後は黙々として屈伸鍛錬を
はじめている。僕も、あわてて運動にとりかかった。
脚を大の字にひらき、両方の手の指を、小指から順に
中へ折り込みながら、

「あの歌を誰だれが作ったか、なんにも知らずに歌っていたんでしょね。」と割に落ちついて尋ねる事が出来た。「作者なんか、忘れられていいものだよ。」と平然と答えた。いよいよ、この人が、花宵先生である事は間違いないと思った。

「いままで、失礼していました。さつき友人に教えられて、はじめて知ったのです。あの友人も僕も、小さい頃から、あなたの詩が好きでした。」

「ありがとう。」と真面目に言つて、「しかし、いまでは越後のほうが気楽だ。」

「どうして、このごろ詩をお書きにならないのです

か。」

「時代が変わったよ。」と言って、ふふんと笑った。

胸がつかまって僕は、いい加減の事は言えなくなった。しばらく二人、黙って運動をつづけた。突如、越後が、「人の事なんか気にするな！ お前は、ちかごろ、生意気だぞ！」と、怒り出した。僕は、ぎよっとした。越後が、こんな乱暴な口調で僕にものを言ったのは、いままで一度も無かった。とにかく早くあやまるに限る。

「ごめんなさい。もう言いません。」

「そうだ。何も言うな。お前たちには、わからん。何

も、わからん。」

実に、まったく、気まずい事になってしまった。詩人というものは、こわいものだ。何が失礼に当るか、わかったもんじやない。その日一日、僕たちは一ことも言葉を交さなかつた。助手さんたちが摩擦に来て、僕にいろいろ話かけても、僕は終始ふくれた顔をして、ろくに返辞もしなかつた。内心は、マア坊なんかにお隣りの越後こそ実に「オルレアの少女」の作者なのだという事を知らせて、驚ろかしてやりたくて、うずうずしていたのだが、越後から「何も言うな」と口どめされているし、まあ、仕方なく、ゆうべは泣き寝

入りの形だったのだ。

けれども、けさ、思いがけなく、この激怒せる花宵先生と、あっさり和解できて、ほっとした。けさ、久し振りで越後の娘さんが、越後を見舞いにやって来た。キヨ子さんといって、マア坊と同じくらいの年としかっこう恰好で、痩せて、顔色の悪い、眼の吊り上ったおとなしい娘さんだ。僕たちは、ちようど朝ごはんの最中だった。娘さんは、持って来た大きい風呂敷包ふろしきをほどこきながら、「つくだ煮を少し作って来ましたけど。」

「そうか。いますぐいたただこう。出しなさい。お隣りのひばりさんにも半分あげなさい。」

おや？　と思つた。越後は今まで僕を呼ぶのに、そ
ちらの先生だの、書生さんだの、小柴君こしばだのというば
かりで、ひばりさんなんて変に親しげな呼び方をした
事は一度も無かつたのだ。

6

娘さんは、僕のところへ、つくだ煮を持って来た。

「いれものが、ございますかしら。」

「はあ、いや、」僕は、うろたえて、「その戸棚とだなに。」

と言いながら、ベッドから降りかけたら、

「これでございますか？」娘さんは、しゃがんで僕のベッドの下の戸棚から、アルマイトの弁当箱を取り出した。

「はあ、そうです。すみません。」

ベッドの下にうずくまって、つくだ煮をその弁当箱に移しながら、

「いま、おあがりになりますか？」

「いいえ、もう、食事はすみました。」

娘さんは弁当箱をもとの戸棚に収めて立ち上り、

「まあ、綺麗。」

と君が滅茶苦茶めちやくちやに投げ入れて行ったあの菊の花をほ

めたのだ。君があの時、竹さんに直してもらえ、なんて要らない事を言ったので、なんだか竹さんに頼むのも、てれくさくなくて、また、マア坊に頼むのも、わざとらしいし、あの花は、ついあのままになっていたのだ。

「きのう友人が、いい加減に挿さして行っただけです。直してくれるひとも無いし。」

娘さんは、ちらと越後の顔色をうかがった。

「直しておやり。」越後も食事がすんだらしく爪楊枝つまようじを使いながら、にやにや笑って言った。どうも、けさは機嫌きげんがよすぎて、かえって気味が悪い。

娘さんは顔を赤くして、ためらいながらも枕元に寄つて来て、菊花の花をみんな花瓶かびんから抜いて、挿し直しに取りかかった。いいひとに直してもらえて、僕はとても嬉うれしかった。

越後はベッドの上に大きくあぐらを掻かいて、娘さんの活花いけばなの手際てぎわをいかにも、たのしそうに眺めながら、「もういちど、詩を書くかな。」と呟つぶやいた。

下手な事を言つて、また、呶どな鳴られるといけなから、僕は黙っていた。

「ひばりさん、きのうは失敬。」と言つて、ずるそうに首をすくめた。

「いいえ、僕こそ、生意気な事を言つて。」

実に、思いがけず、あつさりと和解が出来た。

「また、詩を書くかな。」ともう一度、同じ事を繰り返して言った。

「書いて下さい。本当に、どうか、僕たちのためにも書いて下さい。先生の詩のように軽くて清潔な詩を、いま、僕たちが一ばん読みたいんです。僕にはよくわかりませんが、たとえば、モーツァルトの音楽みたいに、軽快で、そうして気高く澄んでいる芸術を僕たちは、いま、求めているんです。へんに大袈裟おおげさな身振りのものや、深刻めかしたものは、もう古くて、わか

り切っているのです。焼跡の隅すみのわずかな青草でも美しく歌ってくれる詩人がいないものでしょうか。現実から逃げようとしているのではありません。苦しさは、もうわかり切っているのです。僕たちはもう、なんでも平気でやるつもりです。逃げやしません。命をおあずけ申しているのです。身軽なものです。そんな僕たちの気持にぴったり逢うような、素早く走る清流のタッチを持った芸術だけが、いま、ほんもののような気がするのです。いのちも要らず、名も要らずというやつです。そうでなければ、この難局を乗り切る事が絶対に出来ないと思います。空飛ぶ鳥を見よ、です。

主義なんて問題じゃないんです。そんなものでごまかそうたって、駄目です。タッチだけで、そのひとの純粹度がわかります。問題は、タッチです。音律です。それが気高く澄んでいないのは、みんな、にせものなんです。」

僕は、不得手な理窟りくつを努力して言ってみた。言ってみて、てれくさく思った。言わなければよかったと思つた。

「そんな時代に、なったかなあ。」花宵先生は、タオルで鼻の頭を拭ふいて、仰向けに寝ころがり、「とにかく早くここから出なくちゃいけない。」

「そうです、そうです。」

僕は、この道場へ来てはじめて、その時、ああ早く頑丈がんじょうなからだになりたいとひそかに焦慮したよ。もつたない事だが、天の潮路を、のろくさく感じた。

「君たちは別だ。」と先生は、僕のそんな気持ちを、さすがに敏感に察したらしく、「あせる事はない。落ちついてここで生活していさえすれば、必ず、なおる。そうして立派に日本再建に役立つ事が出来る。でも、

こっちはもう、としをとつてるし、」と言いかけた時に、娘さんがどうやら活花を完成させたらしく、

「まえよりかえつて、わるくなつたようですわ。」と明るい口調で言い、父のベッドに近寄り、こんどは極めて小さい声で、「お父さん！　また、愚痴を言つてるのね。いまだき、そんなの、はやらないわよ。」ぷんぷん怒っている。

「わが述懐もまた世に容れられずか。」越後はそう言つて、それでも、ひどく嬉しそうに、うふうふと笑つた。

僕もさっきの不覚の焦燥しやうそうなどは綺麗に忘れ、ひどく幸福な気持で微笑ほほえんだ。

君、あたらしい時代は、たしかに來ている。それは羽衣のように軽くて、しかも白砂の上を浅くさらさら走り流れる小川のように清冽せいれつなものだ。芭蕉ばしやうがその晩年に「かるみ」というものを称えて、それを「わび」「さび」「しおり」などのはるか上位に置いたとか、中学校の福田和尚先生から教わったが、芭蕉ほどの名人がその晩年に於いてやっと予感し、憧憬しやうけいしたその最上位の心境に僕たちが、いつのまにやら自然に到達しているとは、誇らじと欲ほつするも能あたわずといふところだ。この「かるみ」は、断じて輕薄と違ふのである。慾よくと命を捨てなければ、この心境はわからない。くるしく

努力して汗を出し切った後に来る一陣のその風だ。世界の
大混乱の末の窮迫の空気から生れ出た、翼のすきとおる
ほどの身軽な鳥だ。これがわからぬ人は、永遠に歴史の
流れから除外され、取残されてしまいうだろう。ああ、
あれも、これも、どんどん古くなって行く。君、理窟も
何も無いのだ。すべてを失い、すべてを捨てた者の平安
こそ、その「かるみ」だ。

けさ、越後に向って極めて下手くそな芸術論みたいな
事を述べて、それからひどくてれくさい思いをしたが、
でも、越後の娘さんもまた僕たちのひそかな支持者
らしいという事に気がついて、大いに自信を得て、

さらにここに新しい男としての気焰きえんを挙げさせていた
だき、前説の補足を試みた次第である。

ついでながら、君の当道場に於ける評判も、はなは
だよろしい。大いに気をよくして、いただきたい。君
がちよつとこの道場を訪問しただけで、この道場の
雰囲ふんいき気が、急に明るくなつたといつてもあながち過言
ではないようだ。だいいち、花宵先生が十年も若返つ
た。竹さんも、マア坊も、君によろしくと言っている。
マア坊の曰いわく、

「いい眼をしているわね。天才みたいね。まつげが長
くて、まばたきするたんびに、パチンパチンという音

が聞えた。」マア坊の言うことは大袈裟である。信じないほうがいい。竹さんの批評を御紹介しようか。そんなに固くならず、平然とお聞き流しを願う。竹さんの曰く、

「ひばりとは、いい取組みや。」

それだけである。但し、ただ顔を赤くして言った。以上。

十月二十九日

竹さん

謹啓。きょうは、かなしいお知らせを致します。もつとも、かなしいといっても、恋しいという字にかなしいと振仮名をつけたみたいな、妙な気持の力なさだ。竹さんがお嫁に行くのだ。どこへお嫁入りするかというと、場長さんだ。ここの健康道場場長、田島医学博士その人のところに、お輿こし入れあそばすのだ。僕はきょうマア坊からその事を聞いた。

まあ、はじめから話そう。

けさは、お母さんが僕の着換えやら、何やらどつさ

り持って道場へお見えになった。お母さんは、月に二度ずつ僕の身のまわりのものを整理しにやって来るのだ。僕の顔をのぞき込んで、

「そろそろ、ホームシックかな？」とからかう。まいどの事だ。

「或いはね。」と僕も、わざと嘘うそを言う。これも、まいどの事だ。

「きようはお母さんを、小梅橋までお見送りして下さいね。」

「誰だれが？」

「さあ、どなたでしょうか。」

「僕？ 外へ出てでもいいの？ お許しが出たの？」

お母さんは首肯うなずいて、

「でも、いやだったら、よござんす。」

「いやなもんか。僕はもう一日に十里だって歩けるんだ。」

「或いはね。」とお母さんは、僕の口真似くちまねをして言った。

四箇月振りで、寝巻を脱ぎかすり紺かすりの着物を着て、お母さんと一緒に玄関へ出ると、そこに場長が両手をうしろに組んで黙って立っていた。

「歩けますか、どうですか。」とお母さんがひとりごとのようにして言って笑ったら、

「男のお子さんは、満一歳から立つて歩けます。」と場長さんは、にこりともせず、そんな下手な冗談を言つて、「助手をひとりお供させます。」

事務所からマア坊が白い看護婦服の上に、椿つばきの花模様の赤い羽織をひっかけて、小走りに走つて出て来て、お母さんに、どきまぎしたような粗末なお辞儀をした。お供は、マア坊だ。

僕は新しい駒下駄こまげたをはいて、まっさきに外へ出た。駒下駄がへんに重くて、よろめいた。

「おつとと、あんよは上手。」と場長は、うしろで囃はやした。その口調に、愛情よりも、冷く強い意志を感じた。

だらしなないぞ！ と叱しかられたような気がして、僕は、しよげた。振り向きもせず、すたすた五、六歩いそぎ足で歩いたら、また、うしろで場長が、

「はじめは、ゆっくり。はじめは、ゆっくり。」と、こんどは露骨に叱り飛ばすようなきびしい口調で言ったが、かえってその言葉のほうに、うれしい愛情が感ぜられた。

僕は、ゆっくり歩いた。お母さんとマア坊が、小声で何か囁ささやき合いながら、僕の後を追って来た。松林を通り抜けて、アスファルトの県道へ出たら、僕は軽い眩めまい暈を感じて、立ちどまった。

「大きいね。道が大きい。」アスファルト道が、やわらかい秋の日ざしを受けて鈍く光っているだけなのだが、僕には、それが一瞬、ぼうようこんとん茫洋混沌たる大河のように見えただのだ。

「無理かな？」お母さんは笑いながら、「どうかな？ お見送りは、このつきに、お願いするのでしょうか？」

「平気、平気。」ことさらに駒下駄の音をカタカタと高

く響かせて歩いて、「もう馴なれた。」と言った途端に、トラックが、凄すさまじい勢いで僕を追い抜き、思わず僕は、わあっ！ と叫んだ。

「大きいね。トラックが大きいね。」とお母さんはすぐに僕の口真似をしてからかった。

「大きくはないけど、強いんだ。すごい馬力だ。たしかに十万馬力くらいだった。」

「さては、いまのは原子トラックかな？」お母さんも、けさは、はしゃいでいる。

ゆっくり歩いて、小梅橋のバスの停留場が近くなつた頃ころ、僕は実に意外な事を聞いた。お母さんと、マア

坊が、歩きながらよもやまの話の末に、

「場長さんが近く御結婚なさるとか、聞きましたけど？」

「はあ、あの、竹中さんと、もうすぐ。」

「竹中さんと？ あの、助手さんの。」と、お母さんも驚いていたようであったが、僕はその百倍も驚いた。十万馬力の原子トラックに突き倒されたほどの衝動を受けた。

お母さんのほうはすぐ落ちついて、

「竹中さんは、いいお方ですものねえ。場長さんはさすがに、眼がお高くていらっしやる。」と言って、明る

く笑い、それ以上突っ込んだ事も聞かず、おだやかに他の話に移って行った。

僕は停留場で、どんな具合にお母さんとお別れしたか、はつきり思い出せない。ただ眼のさきが、もやもやして、心臓がコトコトと響を立てて躍っているみたいな按配あんばいで、あれは、まったく、かなわない気持ちのものだ。

僕は白状する。僕は、竹さんを好きなのだ。はじめから、好きだったのだ。マア坊なんて、問題じゃなかったのだ。僕は、なんとかして竹さんを忘れようと思つて、ことさらにマア坊のほうに近寄って行って、マア

坊を好きになるように努めて来たのだが、どうしても駄目だめなんだ。君に差し上げる手紙にも、僕はマア坊の美点ばかりを数え挙げて、竹さんの悪口をたくさん書いたが、あれは決して、君をだますつもりではなく、あんな具合に書くことに依よって僕は、僕の胸の思いを消したかったのだ。さすがの新しい男も、竹さんの事を思うと、どうも、からだが重くなつて、翼いしゆくが萎縮し、それこそ豚のしっぽみたいな、つまらない男になりそうな気がするので、なんとかして、ここは、新しい男の面目にかけても、あつさりど気持を整理して、竹さんに対して全く無関心になりたくて、われとわが

心を、はげまし、はげまし、竹さんの事をただ気がい
いばかりの人だの、大鯛おおだいだの、買かい物が下手くそだの
と、さんざん悪口を言いつて来た僕の苦衷くそうのほどを、君
すこしは察さつしてくれ給たまえ。そうして、君も僕に賛成し
て一緒に竹さんの悪口を言いつてくれたら、あるいは僕
も竹さんを本当にいやになつて、身軽みかろになれるかも知
れぬとひそかに期待きたいしていたのだけれども、あてがは
ずれて、君が竹さんに夢中むちゆうになつてしまったので、い
よいよ僕は窮きゆうしたのさ。そこで、こんどは、僕は戦法
をかえて、ことさらに竹さんをほめ挙げ、そうして、
色気無しの親愛しんあいの情だの、新しい型の男女おとこの交友こうゆうだの

といて、何とかして君を牽制けんせいしようとしたくらんだ、
というのが、これまでのいきさつの、あわれな実相だ。
僕は色気が無いどころか、大ありだった。それこそ
意馬心猿いばしんえんとでもいうべき、全くあさましい有様だった
のだ。

3

君は竹さんを、凄すじいほどの美人だと言って、僕はやつ
きとなってそれを打ち消したが、それは僕だって、竹
さんを凄すじいほどの美人だと思っていたのさ。この道場

へ来た日に、僕は、ひとめ見てそう思った。

君、竹さんみたいなのが本当の美人なのだ。あの、洗面所の青い電球にぼんやり照らされ、夜明け直前の奇妙な気配の闇やみの底に、ひっそりしやがんで床板を拭ふいていた時の竹さんは、おそろしいくらい美しかった。負け惜しみを言うわけではないが、あれは、僕だからこそ踏み堪こたえる事が出来たのだ。他の人だったら、必ずあの場合、何か罪を犯したに違いない。女は魔物だなんて、かつぽれなんかよく言っているが、或いは女は意識せずに一時、人間性を失い、魔性のものになっ
てしまっている事があるのかも知れない。

今こそ僕は告白する。僕は竹さんに、恋していたのだ。古いも新しいもありやしない。

お母さんとわかれて、それから、膝頭ひざがしらが、がくがく震えるような気持で歩いて、たまらなく水が飲みたくなつて、

「どこかで、少し休みたいな。」と言ったが、その声は、自分ながらおやと思つたほどしわが噎しわがれていて、誰か他の人が遠方つふやでつふや呟つぶやいている言葉のような感じがした。

「お疲れでしょう。もう少し行くと、あたしたちが時々寄つて休ませてもらう家があるんですけど。」

大戦の前には三好野みよしのか何かしていたような形の家に、

マア坊の案内ではいった。薄暗い広い土間には、こわれた自転車やら、炭俵のようなものがころがっていて、その一隅いちぐうに、粗末なテーブルがひとつ、椅子いすが二、三脚置あしづかれている。そうして、そのテーブルの傍そばの壁には大きい鏡がかけられ、へんに気味悪く白く光っているのが印象深かった。この家は商売をよしても、やはり馴染なじみの人たちには、お茶ぐらい出す様子で、道場の助手さんたちが外出した時には、油を売る場所になっているのでもあろう、マア坊は平気で奥の方へ行き、番茶の土瓶どびんとお茶碗ちやわんを持って来た。僕たちは鏡の下のテーブルに向い合つて席をとり、二人で生ぬるい番茶

を飲んだ。ほっと深い溜息ためいきをついて、少し気持も楽になり、

「竹さんが結婚するんだって？」と軽い口調で言う事が出来た。

「そうよ。」マア坊もこのごろ、なぜだか淋さびしそうだ。寒そうに肩を小さくすぼめて、僕の顔をまっすぐに見ながら、「ご存じじゃ、なかったの？」

「知らなかった。」不意に眼が熱くなって、困って、うつむいてしまった。

「わかるわ。竹さんだって泣いてたわ。」

「何を言っていないやがる。」マア坊の、しんみりした口調

が、いやらしくて、いやらしくて、むかむか腹が立つて来た。「いい加減な事を言っちゃ、いけない。」

「いい加減じゃないわ。」マア坊も涙ぐんでいる。「だから、あたしが言ったじゃないの。竹さんと仲よくしちゃいけないって。」

「仲よくなんか、しやしないよ。そんなに何でも心得ているような事を言うな。いやらしくって仕様がな。竹さんが結婚するのは、いい事だ。めでたいじゃないか。」

「だめよ。あたしは、知っているんですから。ごまかしたって、だめよ。」大きい眼から涙があふれて、まつ

げに溜^{たま}って、それからぼろぼろ頬^{ほお}を伝って流れはじめた。「知ってるのよ。知ってるのよ。」

4

「よせよ。意味が無いじゃないか。」こんなところを、ひとに見られたら困ると思った。「なんの意味もありませんじゃないか。」繰返して言ったその僕の言葉も、あまり意味のあるものようには思えなかった。「ひばりは、全く、のんきな人ねえ。」と指先で頬の涙を拭きながら、マア坊は少し笑って言った。「いままで、

場長さんと竹さんとの事をご存じじやなかったなんて。」

「そんな下品な事は知らん。」急に、ひどく不愉快になつて来た。みんなをぼかぼか殴つてやりたくなくなつて来た。

「何が、下品なの？ 結婚つて、下品なものなの？」

「いや、そんな事はないが、」僕は口ごもつて、「前から、何か、——」

「あらいやだ。そんな事は無いのよ。場長さんは、まじめなお方だわ。竹さんには何も言わないで、竹さんのお父さんのところをお願いにあがったのよ。竹さん

のお父さんはいまこっちへ疎開そかいして来ているんだって。そうして竹さんのお父さんから、こないだ竹さんに話があつて、竹さんは二晩も三晩も泣いてたわ。お嫁に行くのは、いやだつて。」

「そんならいい。」僕は、せいせいした。

「どうしていいの？ 泣いたからいいの？ いやねえ、ひばりは。」と笑いながら言つて、顔を横に傾けて、眼の光りが妙に活いき活いきして来て、右腕をすつと前に出し、卓の上の僕の手を固く握つた。「竹さんはね、ひばりが恋しくつて泣いたのよ、本当よ。」と言つて、更に強く握りしめた。僕も、わけがわからず握りかえした。

意味のない握手だった。僕はすぐに馬鹿らしくなって来て、手をひっこめて、

「お茶を、ついであげようか。」とてれかくしに言つてみた。

「いいえ。」とマア坊は眼を伏せて気弱そうに、しかも、きつぱりと、不思議な断り方で断つた。

「それじゃ出ようか。」

「ええ。」

小さく首肯うなずいて、顔を挙げた。その顔が、よかつた。

断然、よかつた。完全の無表情で鼻の両側に疲れたよかすうな幽かな細い皺しわが出来ていて、受け口が少しあいて、

大きい眼は冷く深く澄んで、こころもち蒼あおざめた顔には、すごい位の気品があつた。この気品は、何もかも綺麗きれいにあきらめて捨てた人に特有のものである。マア坊も苦しみ抜いて、はじめて、すきとおるほど無慾な、あたらしい美しさを顕現できるような女になつたのだ。これも、僕たちの仲間だ。新造の大きな船に身をゆだねて、無心に軽く天の潮路のままに進むのだ。幽かな「希望」の風が、頬を撫なでる。僕はその時、マア坊の顔の美しさに驚き「永遠の処女」という言葉を思い出したが、ふだん気障きざだと思つていたその言葉も、その時には、ちつとも気障ではなく、実に新鮮な言葉のよう

に感ぜられた。

「永遠の処女」なんてハイカラな言葉を野暮な僕が使うと、或いは君に笑われるかも知れないが、本当に僕は、あの時、あのマア坊の気高い顔で救われたのだ。

竹さんの結婚も、遠い昔の事のように思われて、すつとからだが軽くなった。あきらめるとか何とか、そんな意志的なものではなくて、眼前の風景がみるみる遠のいて望遠鏡をさかさに覗いたのぞみたいに小さくなってしまった感じであった。胸中に何のこだわるところもなくなった。これでもう僕も、完成せられたという爽快そうかいな満足感だけが残った。

晩秋の澄んだ青空をアメリカの飛行機が旋回している。僕たちは、その三好野ふうの家の前に立ってそれを見上げて、

「つまらなそうに飛んでいるねえ。」

「ええ。」とマア坊はほほえ微笑む。

「しかし、飛行機というものの形には、新しい美しさがある。むだな飾りが一つも無いからだろうか。」

「そうねえ。」とマア坊は小声で言って、子供のように

無心に空の飛行機を見送っている。

「むだな飾りの無い姿って、いいものなんだねえ。」

それは、飛行機だけでなく、マア坊の放心状態みたいな素直な姿態に就いてのひそかな感懐でもあったのだ。

二人だまって歩いて、僕は、途で逢う女のひとの顔をいちいち注意して見て、程度の差はあるが、いまの女のひとの顔には皆一様に、マア坊みたいな無慾な、透明の美しさがあらわれているように思われた。女が、女らしくなったのだ。しかしそれは、大戦以前の女にかえったというわけでは無い。戦争の苦悩を通過した

新しい「女らしさ」だ。何といたらいいのか、鶯^{うぐいす}の笹鳴き^{ささな}みたいな美しさだ、とでもいたら君はわかつてくれるであろうか。つまり、「かるみ」さ。

お昼すこし前に道場へ帰って来たが、往復半里以上も歩いたから、さすがに疲れて、寝巻に着換えるのもめんどろくさくて、羽織も脱がずにベッドに寝ころがって、そのまま、うとうと眠った。

「ひばり、ごはんや。」

眼を薄くあけて見ると、竹さんがお膳^{ぜん}を持って笑って立っている。

ああ、場長夫人！

すぐに、はね起き、

「や、すみません。」と言って、思わず軽く頭を下げた。

「寝ぼけているな。寝ぼすけさん。」とひとりごとの

ように言って、お膳を枕元まくらもとに置き、「着物、着たまま

寝ている人があるかいな。いま風邪ひいたら一大事や。

早うお寝巻に着換えたらええ。」眉まゆをひそめて不機嫌ふきげん

そうに言いながら、ベッドの引出しから寝巻を取り出

し、「世話の焼けるぼんぼんや。おいで、着換えさして

あげる。」

僕はベッドから降りて兵古帯へこおびをほどいた。いつもの

とおりの竹さんだ。場長と結婚するなんて、嘘うそみたい

に思われて来た。なあんだ、僕はいまうとうと眠って夢を見たのだ。お母さんが来たのも夢、マア坊があの三好野みみたいな家で泣いたのも夢、と一瞬そんな気がして嬉うれしかったが、しかし、そうではなかった。

「いい久留米くるめがすり餅やな。」竹さんは僕に着物を脱がせて、「ひばりには、とてもよく似合うわよ。マア坊は果報やなあ。帰りに一緒にオバさんところでお茶を飲んだつてな。」

やはり、夢ではなかった。

「竹さん、おめでどう。」と僕が言った。

竹さんは返辞をしなかった。黙って、うしろから寝

巻をかけてくれて、それから、寝巻の袖口そでぐちから手を入れて、僕の腕の附つけ根のところを、ぎゅつとかなり強くつね抓つかった。僕は齒を食いしばって痛さを堪こえた。

6

何事も無かつたように寝巻に着換えて、僕は食事に取りかかり、竹さんは傍そばで僕の紺この着物を畳たたんでいる。お互いに一ことも、ものを言わなかつた。しばらくして竹さんが、極めて小さい声で、

「かんにんね。」と囁ささいた。

その一言に、竹さんの、いつさいの思いがこめられてあるような気がした。

「ひどいやつや。」と僕は、食事をしながら竹さんの言葉の訛りなまを真似まねてそつと呟つぶやいた。

そうしてこの一言にも、僕のいつさいの思いがこもっているような気がした。

竹さんはくすくす笑い出して、

「おおきに。」と言った。

和解が出来たのである。僕は竹さんの幸福を、しんから祈りたい気持になった。

「いつまでここにいるの？」

「今月一ぱい。」

「送別会でもしようか。」

「おお、いやらし！」

竹さんは大袈裟に身震いして、畳んだ着物をさっさと引出しにしまい込み、澄まして部屋から出て行った。どうして僕の周囲の人たちは、皆こんなにさっぱりした、いい人ばかりなのだろう。いま僕はこの手紙を、午後一時の講話を聞きながら書いているのだが、きょうの講話は、どなたが放送していらっしやるか、わかりますか？ およろこび下さい。大月花宵先生です。大月先生の当道場に於けるこのごろの人気はたいへん

なものですよ。もう越後獅子えちごじしなんて失礼な綽名あだなでは呼
べなくなつた。君が発見して、それから、二、三日は
僕も我慢して誰にも言わずにいたが、とうとうマア坊
にこつそり教えて、たちまち噂うわさがぱつとひろがり、何
せ「オルレ안의少女」の作者だという事で無条件に
尊敬せられ、場長も巡回の時に、花宵先生に向つて、
いままで知らずに失礼しました、という意味のおわび
を言つたくらいだ。

新館はもちろん、旧館の塾生じゅくせいたちからも、詩、和歌、
俳句の添削依頼が殺到している有様だ。けれども花宵
先生は、急に威張り返るとか何とか、そんな浅墓あさはかな素

振りは微塵^{みじん}も示さず、やっぱり寡言家^{かげんか}の越後獅子であつて、塾生たちの詩歌の添削は、たいていかつぽれに一任しているのだ。かつぽれ、このところ大得意だ。花宵先生の一番弟子のつもりで、もつともらしい顔をして、よそのひとの苦心の作品を勝手にどんどん直している。きようは事務所からの依頼で花宵先生がはじめて講話をする事になつて、「献身」と題するお話であるが、こうして拡声機を通して流れ出る声を聞いてみると、非常に貴い人から教え訓^{さと}されているようなき厳肅な気持になつて来る。実に落ちついた、威厳のある声である。花宵先生は、僕が考えているよりも、もつ

とはるかに偉い人なのかも知れない。お話の内容も、さすがにいい。すこしも古くないのである。

献身とは、ただ、やたらに絶望的な感傷でわが身を殺す事では決してない。大違いである。献身とは、わが身を、最も華やかに永遠に生かす事である。人間は、この純粹の献身に依つてのみ不滅である。しかし献身には、何の身支度も要らない。今日ただいま、このままの姿で、いつさいを捧^{ささ}げたてまつるべきである。鋏^{くわ}とる者は、鋏^のとつた野良姿^ののまま、献身すべきだ。自分の姿を、いつわつてはいけない。献身には猶^{ゆう}予^よがゆるされない。人間の時々刻々が、献身でなければな

らぬ。いかにして見事に献身すべきやなどと、工夫をこらすのは、最も無意味な事である、と力強く、
諄々じゆんじゆんと説いている。聞きながら僕は、何度も赤面した。僕は今まで、自分を新しい男だ新しい男だと、少し宣伝しすぎたようだ。献身の身支度に凝り過ぎた。お化粧にこだわっていたところが、あつたように思われる。新しい男の看板は、この辺で、いさぎよく撤回しよう。僕の周囲は、もう、僕と同じくらいに明るくなっている。全くこれまでに、僕たちの現れるところ、つねに、ひとりでに明るく華やかになって行つたじゃないか。あとはもう何も言わず、早くもなく、おそく

もなく、極めてあたりまえの歩調でまっすぐに歩いて
行こう。この道は、どこへつつづいているのか。それは、
伸びて行く植物の蔓つるに聞いたほうがよい。蔓は答える
だろう。

「私はなんにも知りません。しかし、伸びて行く方向
に陽ひが当るようです。」
さようなら。

十二月九日

底本…「パンドラの匣」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年10月30日発行

1997（平成9）年12月20日46刷

初出…「河北新報」河北新報社

1945（昭和20）年10月22日～1946（昭和21）
年1月7日

入力：SAME SIDE

校正…細渕紀子

2003年1月27日作成

2006年5月20日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。